

奈良市埋蔵文化財調査報告書

昭和60年度

昭和61年

奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査報告書

昭和60年度

昭和61年

奈良市教育委員会



1. 平城京左京七条二坊六坪出土唐三彩杯



2. 平城京左京六条三坊十五坪出土彩釉陶器

序 文

奈良市が、本格的な発掘調査の拠点といえる奈良市埋蔵文化財調査センターを開設して、早や3年の年月が過ぎました。その間、センター開設時以来の周知の遺跡での発掘届出件数の増加には、驚くべきものがあり、これに対処しての日々切れ目ない発掘調査が続けられております。その過程で貴重な埋蔵文化財も数多く発見され、地下に眠る歴史が徐々に明らかにされようとしております。しかし、その反面で、新たな開発の波に押され、現状では対処し得ず消えていく文化財のあることも、また事実であります。地中に埋れた重要な歴史遺産、これに学び、更に次の世代へと受け継いでいくことが、現代に生きる私たちの大きな責務でありましょう。そのためにも、今後とも調査体制の充実をはかってまいり所存であります。

発掘調査及び、調査報告書作成にあたりまして、御指導、御協力賜りました奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会をはじめ、関係諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

昭和61年3月

奈良市教育委員会教育長職務代理者

教育総務部長 松本和義

例 言

1. 本書は、昭和60年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告を集録したものである。
2. 昭和60年度には、のべ29件の発掘調査を実施した。本書では、そのうち国庫補助金による緊急調査および、公共事業に係る調査について報告する。なお、平城京左京九条一坊三・六坪の調査については、昭和61年度に二次調査を予定しているため、次年度に併せて報告する。

本書収録分以外に、平城京左京八条三坊十一坪（東市跡推定地）および、発掘原因者の費用負担による調査があるが、これについては、別途に概要報告を刊行する予定である。
3. 本書に収録した報告は、次頁に記したとおりである。なお、調査地の位置は、発掘調査位置図に示した。
4. 調査件数の増加に伴ない、本書に収録する調査について、発掘調査成果の収録を簡便化するために調査の次数を付すことにした。次数は、平城京、京内各寺院、東市跡推定地、その他特定遺跡の調査で継続的に実施するものについて、それぞれに付すことにした。調査次数は奈良市教育委員会が本格的に発掘調査に着手した昭和54年度にさかのぼり、左京五条二坊十四坪の調査を平城京第1次調査とし、調査開始日時により順次付す。本年度最初の左京六条三坊十六坪の調査は、平城京第87次調査となる。
5. 発掘調査は、奈良市教育委員会文化課埋蔵文化財調査センター（所長；三好良則）が行なった。調査に関わる庶務は、文化課文化係（係長；野口 宏，森 光彦）が担当した。
6. 発掘調査および出土遺物の整理作業には、下記の諸氏の参加、協力があつた。

茜 昌代、池永 和子、大西 明彦、大野 佳子、金村 浩一、影近 栄子、
桐山 美佳、佐賀 和美、志賀 理史、菅原 道子、芹川 順子、玉林 尚子、
樋泉 彰子、中山 和之、服部 芳人、花谷めぐむ、藤田 忠彦、古川 成美、
保坂 香恵、松山 径子、松田 光広、村松 京子、山下優貴子、山村 光子、
吉田 洋恵、吉田 野々 （五十音順）
7. 本書の作成は、文化課長 亀井伸雄の指導のもとに調査担当者全員があたり、それぞれ分担し執筆した。なお、各報告の末尾にその文責を明らかにした。
8. 本書の編集は、立石堅志が行なった。

目 次

1	大柳生町遺物散布地の調査	1
2	平城京朱雀大路の調査 第103次	6
3	平城京右京六条一坊十四坪の調査 第92次	13
4	平城京右京七条二坊十四坪の調査 第101次	14
5	平城京左京（外京）四条六坊十一坪の調査 第100次	18
6	元興寺旧境内（第5次）の調査	19
7	平城京左京六条三坊十五坪の調査 第91次	24
8	平城京左京六条三坊十六坪の調査 第87次	29
9	平城京左京七条二坊六坪の調査 第93次	31
10	平城京左京八条二坊一坪の調査 第98次	36
11	コナベ古墳外堤部の調査	37
12	史跡 大安寺旧境内（第21次）の調査	38
13	同 （第22次）	39
14	同 （第23次・24次）	43
15	佐紀町内遺跡確認調査	44

図 版 目 次

巻首図版 1 平城京左京七条二坊六坪 第93次 出土唐三彩杯

2 平城京左京六条三坊十五坪 第91次 出土彩釉陶器

図版1	大柳生遺物散布地の調査	(1)調査地全景	図版18	平城京左京六条三坊十五坪 第91次	(1)発掘区全景
図版2	同	(2)各発掘区全景	図版19	同	(2)発掘区各部
図版3	同	(3)各発掘区全景	図版20	同	(3)出土遺物
図版4	同	(4)各発掘区全景	図版21	平城京左京六条三坊十六坪 第87次	発掘区全景
図版5	同	(5)各発掘区全景	図版22	平城京左京七条二坊六坪 第93次	(1)発掘区全景
図版6	同	(6)宮の下古墳外形	図版23	同	(2)発掘区各部
図版7	平城京朱雀大路第103次	(1)第1発掘区全景他	図版24	同	(3)発掘区各部
図版8	同	(2)第2発掘区全景他	図版25	同	(4)出土遺物
図版9	同	(3)第3発掘区全景他	図版26	平城京左京八条二坊一坪 第98次	発掘区全景
図版10	同	(4)第4発掘区全景	図版27	コナベ古墳外堤部の調査	発掘区全景
図版11	同	(5)第4発掘区各部 ・出土遺物	図版28	史跡大安寺旧境内 第21次	発掘区全景
図版12	平城京右京六条一坊 十四坪 第92次	発掘区全景他	図版29	史跡大安寺旧境内 第22次	(1)発掘区全景他
図版13	平城京右京七条二坊 十四坪 第101次	(1)発掘区全景	図版30	同	(2)出土遺物
図版14	同	(2)発掘区各部	図版31	史跡大安寺旧境内 第23・24次	発掘区全景
図版15	平城京左京四條六坊 十一坪 第100次	発掘区全景他	図版32	佐紀町内遺跡確認調査	(1)調査地全景他
図版16	元興寺旧境内 第5次	(1)発掘区全景	図版33	同	(2)発掘区全景
図版17	同	(2)発掘区全景他			

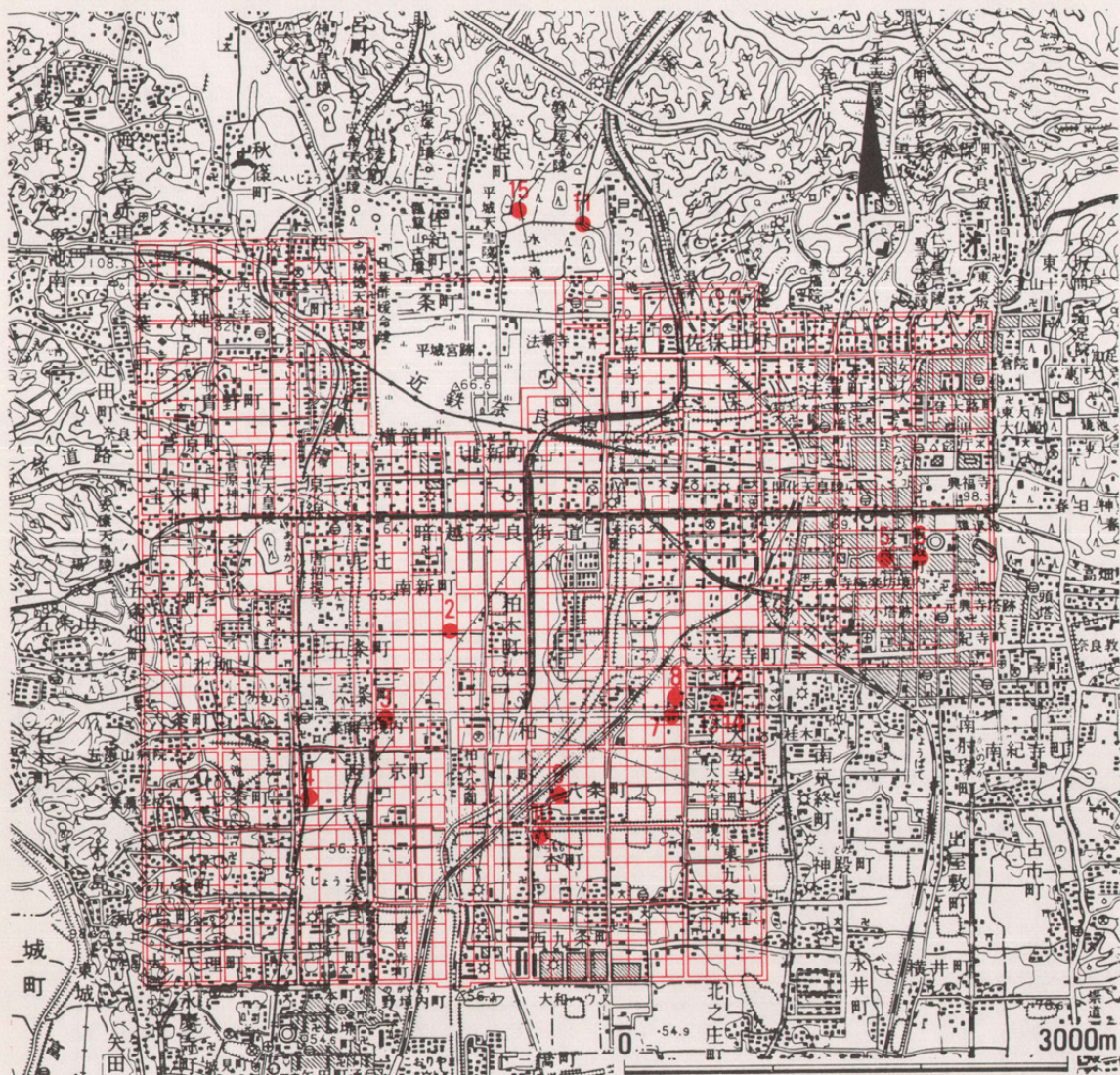
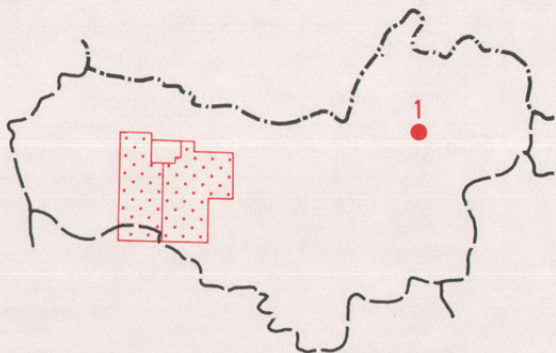
※ 写真図版のうち、図版11 平城京朱雀大路 第103次(5) 出土遺物に使用した、X線写真撮影については、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室の手を煩わせた。記して感謝いたします。

※ 報文中で使用する用語のうち、出土土器の名称等は、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ・Ⅺ』に準拠するものとする。

調 査 地 一 覧

	調 査 地	調 査 期 間	調 査 積	備 考
1	大柳生遺物散布地	大柳生町2028番地 他	昭60年11月11日 ～12月20日	425 m ² 圃場整備関連
2	平城京朱雀大路	柏木町	60年12月16日 ～61年2月1日	130 m ² 市道整備
3	平城京右京六条一坊十四坪	西の京町 104 - 1 番地	60年7月8日 ～7月30日	120 m ² 宮城正治
4	平城京右京七条二坊十四坪	七条町 349 番地	60年10月21日 ～12月9日	534 m ² 七条町地域体育館
5	平城京左京(外京)四条六坊十一坪	南中町 2・3 番地	60年10月16日 ～10月22日	17.5 m ² 都市計画道路
6	元興寺旧境内	北室町15番地の2 16番地の2 下御門町43番地の2	61年3月12日 ～3月28日	65 m ² 都市計画道路
7	平城京左京六条三坊十五坪	大安寺町81-1 番地	60年6月20日 ～7月24日	140 m ² 下水道集水場
8	平城京左京六条三坊十六坪	大安寺町98番地の1・5	60年4月24日 ～5月17日	196 m ² 市川美喜雄 市川 嘉雄
9	平城京左京七条二坊六坪	八条町 792 の 1 番地 他	60年8月8日 ～9月1日	255 m ² 八条町駐車場
10	平城京左京八条二坊一坪	杏町 391 の 2 番地	60年9月26日 ～10月9日	60 m ² 辰市保育園
11	コナベ古墳外堤部	法華寺町・佐紀町	60年7月28日 ～8月1日	27 m ² 上水道管布設
12	史跡大安寺旧境内 (食堂并大衆院推定地)	大安寺町1035番地の1	60年4月5日 ～4月10日	30 m ² 野田忠一
13	同 (贖院推定地)	大安寺町東今在家 994 - 2	60年6月1日 ～6月12日	47.5 m ² 山本五鈴
14	同 (同)	大安寺町1263	60年12月18日 ～12月21日	12 m ² 大西義則
	同 (同)	大安寺町1260-4	60年12月18日 ～12月21日	0.5 m ² 東栄造
15	佐紀町遺跡確認調査	佐紀町1264番地 他	60年1月27日 ～3月27日	626 m ²
	平城京左京四条五坊四坪	三条本町 259 - 1 番地	60年5月17日 ～6月18日	282 m ² 榎太平開発
	平城京左京(外京)三条六坊十二坪 円証寺	林小路町 5 - 1 番地	60年5月21日 ～8月1日	355 m ² 日本生命
	平城京右京八条二坊一坪	七条町字東浦 170 - 1	60年5月27日 ～7月19日	480 m ² 佐伯建設
	平城京左京三条一坊十五坪	二条大路南二丁目 135 - 1 と 3	60年8月8日 ～9月20日	500 m ² 木本 隆
	平城京左京三条三坊十二坪	大宮町 4 丁目 258 - 7	60年8月12日	18 m ² カヤノキ建設
	平城京左京(外京)二条七坊八坪	西包永町31番地 他	60年8月21日 ～9月13日	300 m ² 日興不動産
	平城京右京七条一坊十五坪	六条町 ⁹⁷ 102 - 1 番地	60年9月2日 ～10月30日	1230 m ² 高比康臣
	平城京左京四条四坊十一坪	三条大宮町 352・353 番地	60年9月30日 ～12月7日	1100 m ² 富士地所
	平城京左京三条四坊九坪	芝辻 2 丁目 171 番地 他	60年12月10日 ～61年2月13日	900 m ² 明城開発
	平城京八条大路	東九条町 430 番地	61年1月20日 ～1月28日	150 m ² 農協事務所
	平城京左京三条四坊八坪	芝辻町 2 丁目 235 - 1	61年1月21日 ～1月31日	400 m ² 西田素康
	東市推定地(平城京左京八条三坊十 ・十一坪)	東九条町 437・438 番地	60年11月19日 ～61年3月19日	600 m ² 重要遺跡範囲確認
	平城京左京九条一坊三・六坪	西九条町 5 丁目 4 - 9・11・12	61年1月17日 ～3月31日	600 m ² 第一化工

※掲載番号は、発掘調査地位置図に対応する。

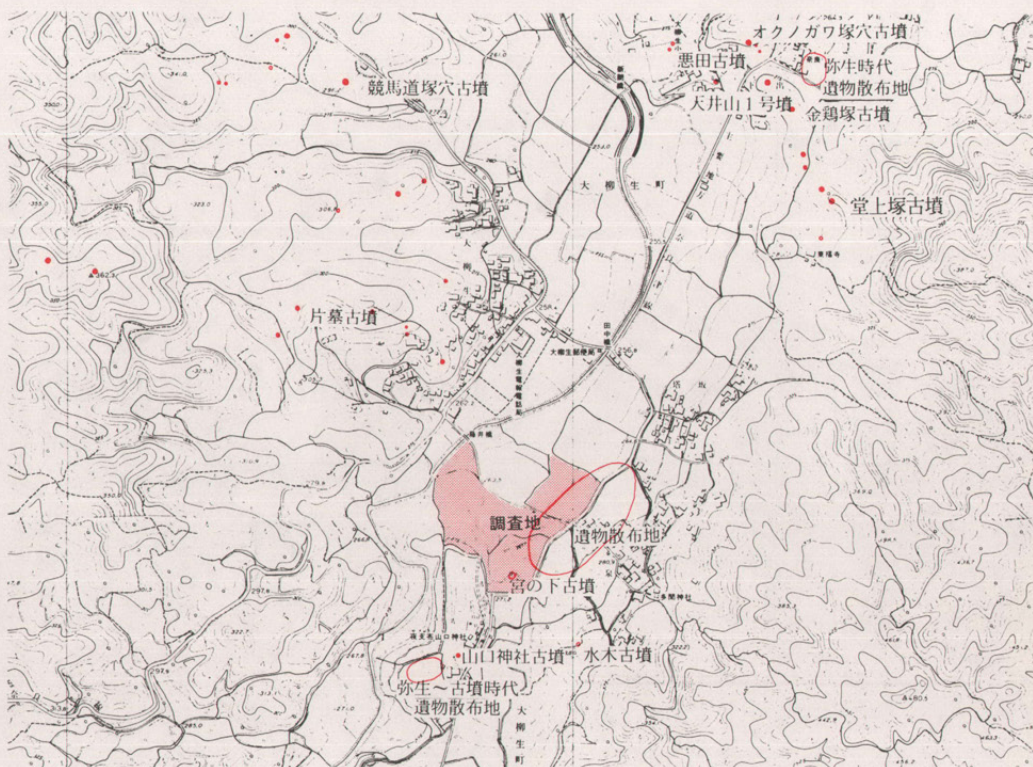


発掘調査地位置図

1. 大柳生町遺物散布地の調査

1 はじめに

本調査は、奈良市大柳生町2028番地他（大貫上地区）で実施した圃場整備事業に伴う事前発掘調査である。奈良市大柳生町は、大和高原の一面、北流する白砂川の開析した小盆地で、弥生時代以後のいくつかの遺跡の存在が知られ、60基前後の古墳の存在が見られる地域である。今回、圃場整備事業の対象地となったのは、延喜式内社夜支山神社の東北部分の水田4.68haで、『奈良県遺跡地図第1分冊』（奈良県教育委員会 昭和48年）に記載された遺物散布地（6B-24・奈良377）がその一部にかかる。このため、遺跡の有無の確認に調査の主眼をおき、3×3mの発掘区を事業予定地内に27箇所設定し、調査を行うこととし、その結果に応じ、随時、発掘区を拡張した。また、今回の圃場整備予定地には、宮の下古墳（6B-23・奈良376）が存在し、国有地でもあることから、事業の対象からは除外されていたが、今後の保存対策のため併せて調査を実施した。調査は、昭和60年11月11日から12月20日まで行った。調査にあたっては、大柳生町圃場整備管地委員会及び大柳生町自治会の協力を得た。記して感謝したい。



調査地と周辺の遺跡 1/15000

II 調査の概要

発掘区は、『奈良県遺跡地図』所載の遺物散布地の範囲に重点をおき、設定したが、調査の結果は、いずれの発掘区でも顕著な遺構は検出できなかった。以下に各発掘区で得た土層の堆積状況を中心とした所見を記す。



発掘区位置図 1/2000

No.1 土層は耕土の下、灰色泥砂、暗褐色泥砂層となる。灰色泥砂層からは、須恵器片、土師器片、瓦器片が少量出土したが、その下層の暗褐色泥砂層には、遺物が含まれず、その上面では、遺構は検出できなかった。

No.2 耕土の下に、淡青灰色泥砂があり、以下灰色泥砂、黒色砂泥となり、現地表から50～70cmで地山である灰色砂礫層となる。灰色砂礫層は地形に従い西北方向へ傾斜し、それに伴い、灰色泥砂、黒色砂泥も傾斜した堆積状況をみせる。灰色泥砂層から須恵器、土師器、瓦器、近世陶磁器の小片が出土した。

No.3 耕土の下に10cm程度、灰色砂が堆積し、その下は、No.2で確認したのと同じ黒色砂泥が1m以上つづく。

No.4 発掘区の北寄りでは、耕土の下の灰色泥砂が1m以上つづく。南寄りでは、灰褐色泥砂とその下層の黒色砂泥が確認できた。北寄りの灰色泥砂層は、近年の水田造成時の盛土らしい。黒色砂泥層からは、近世陶磁器、須恵器、土師器の小片とサヌカイト剥片が少量出土した。

No.5 耕土の下、灰色泥砂、黒色砂泥となり、黒色砂泥が1m以上つづく。灰色泥砂層から、須恵器、土師器、瓦器の小片が出土した。

No.6 耕地の下は黒灰色および灰色の砂泥となる。出土遺物はない。

No.7a 耕土、灰色泥砂、暗灰色砂泥、黒色砂泥の順に堆積し、黒色砂泥は、1.2m程度つづき、その下が灰色砂礫になることが確認できた。暗灰色砂泥層から須恵器片、土師器片、瓦器片が少量出土した。

No.7b No.7aと同じ水田の西南部に設定した発掘区で、堆積土層はNo.7aと変わらない。ただ黒色砂泥は、厚さ50cm程度しかなく、灰色砂礫の地山面が高くなっている。暗灰色砂泥層から須恵器、土師器、瓦器の小片が出土した。

No.8 耕土の下に灰褐色泥砂が20cm程度あり、地山の灰色砂礫層となる。灰褐色泥砂層から須恵器、土師器、近世陶器の小片が少量出土した。

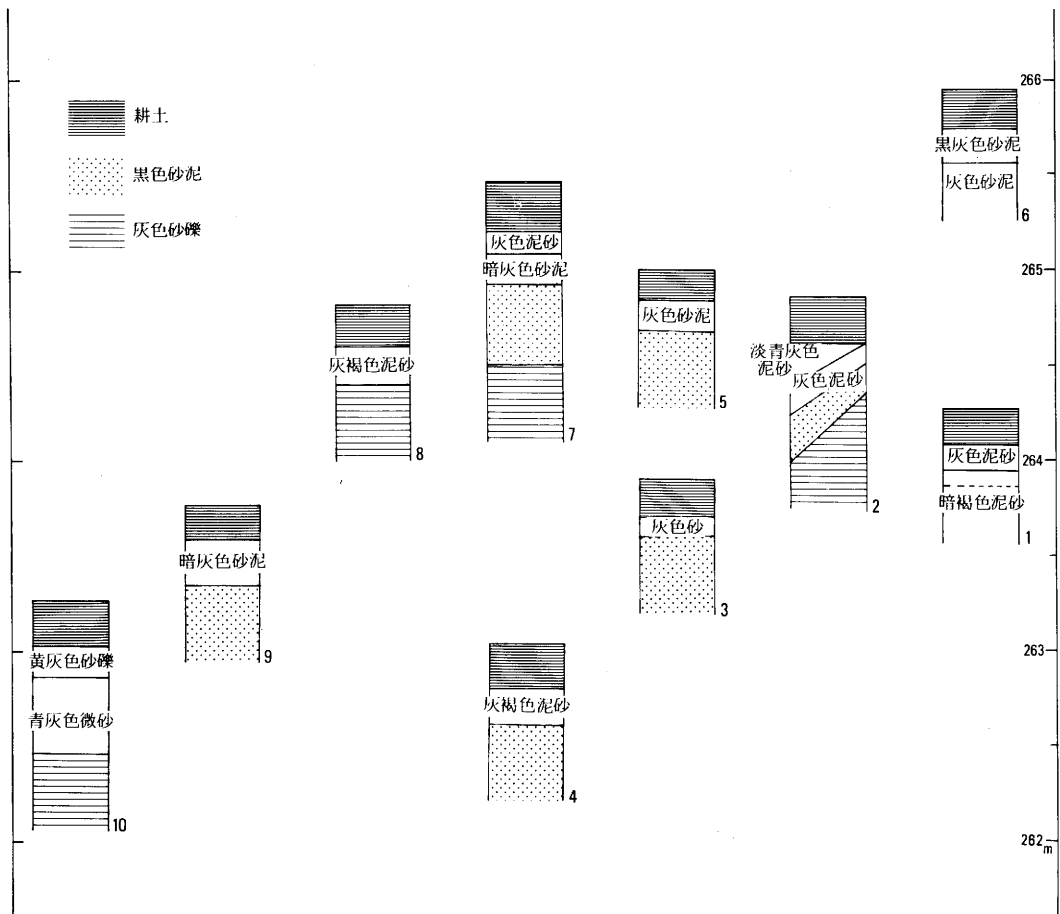
No.9 耕土の下、暗灰色砂泥が20cm程度あり、その下には黒色砂泥が1m以上つづく。湧水が著しく、地山は確認できなかった。黒色砂泥層から土師器皿、近世陶器の細片が少量出土した。

No.10 耕土、黄灰色砂礫、青灰色微砂の順で堆積し、地表から約1mで地山の灰色砂礫となる。出土遺物はない。

No.11 耕土の下に灰褐色泥砂層が約20cmあり、その下は、地山の灰色砂礫層となる。灰褐色泥砂層から近世陶器片、土師器片が少量出土した。

No.12～No.15 耕土の下に灰褐色泥砂が堆積し、地表下30～90cmで地山の灰色砂礫となる。No.7などで確認した黒色砂泥が、その間に堆積する部分もある。灰褐色泥砂層から須恵器片、土師器片が少量、それぞれの発掘区から出土しており、No.13～No.15の発掘区ではサヌカイト片も少量出土している。

No.16～No.19 耕土の下に灰色粘質砂泥が70cm～1m前後あり、その下は地山の灰色砂礫となる。



No. 1 ~ No. 10 発掘区柱状断面図 1/40

No.18を除き、灰色粘質砂泥層から土師器皿片が少量出土した。

No.20 耕土の下に灰色粗砂、黒色砂泥が1m以上つく。灰色粗砂層から黒色土器A類、土師器が少量出土した。

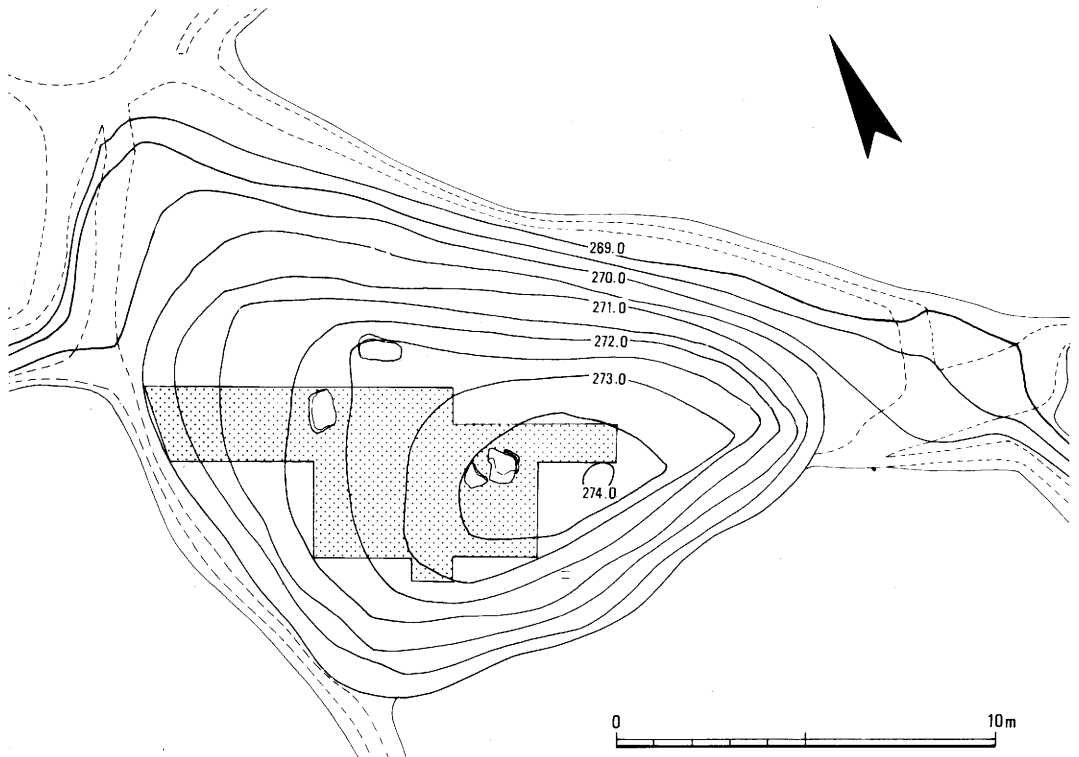
No.21・22・26・27 耕土の下がすぐ淡黄色粘土の地山であった。26・27の耕土中から須恵器、土師器の細片が少量出土したが、淡黄色粘土上面では顕著な遺構は検出できなかった。

No.23・24 No.23では耕土の下に灰色泥砂層が40cm程度堆積し、その下が灰色砂礫の地山となるが、No.24では耕土の下に、すぐ灰色砂礫の地山があらわれる。いずれも出土遺物はない。

No.25 耕土の下に、淡褐色砂泥、青灰色砂、青灰色砂泥の堆積があり、地表から80cm程度で、地山の灰色砂礫層となる。出土遺物はない。

III 宮の下古墳の調査

宮の下古墳は、夜支布山口神社のある丘陵の東北、水田中に存在する小丘（東西20cm、南北15cm、高さ3m）で、現在、「墳墓地」として国有地となっている。『大柳生村史』および『奈良



宮の下古墳地形図（アミ部分は発掘区） 1/200

市史』において古墳の可能性が指摘され、『奈良県遺跡地図』では、小字宮の下にあることから「宮の下古墳」と名付けられているものである。地元では、「柳の森」と呼ばれ、柳の枝が根づいた柳の巨木が、あったとされ、「柳生」の地名発生地として信仰の対象地ともなっていた。

古墳の可能性を確認するため、地形実測の後、丘陵の長軸方向に沿い発掘区を設定し、調査を行ったが、表土を除くと、すぐ地山があらわれ、埋葬施設らしき遺構は、検出できなかった。ただ丘陵頂部に自然石があり、この周辺からは、近世の土師器皿16点と銭貨（寛永通寶）2点が出土し、この自然石が江戸時代以来、磐座のようなものとして、信仰の対象となっていたことがうかがえる。地名発生地として神聖視され、水田化されずに丘陵が残ったものと考えられ、古墳ではないが、地名発生説話ともからみ、民俗学的資料として興味深い。

IV まとめ

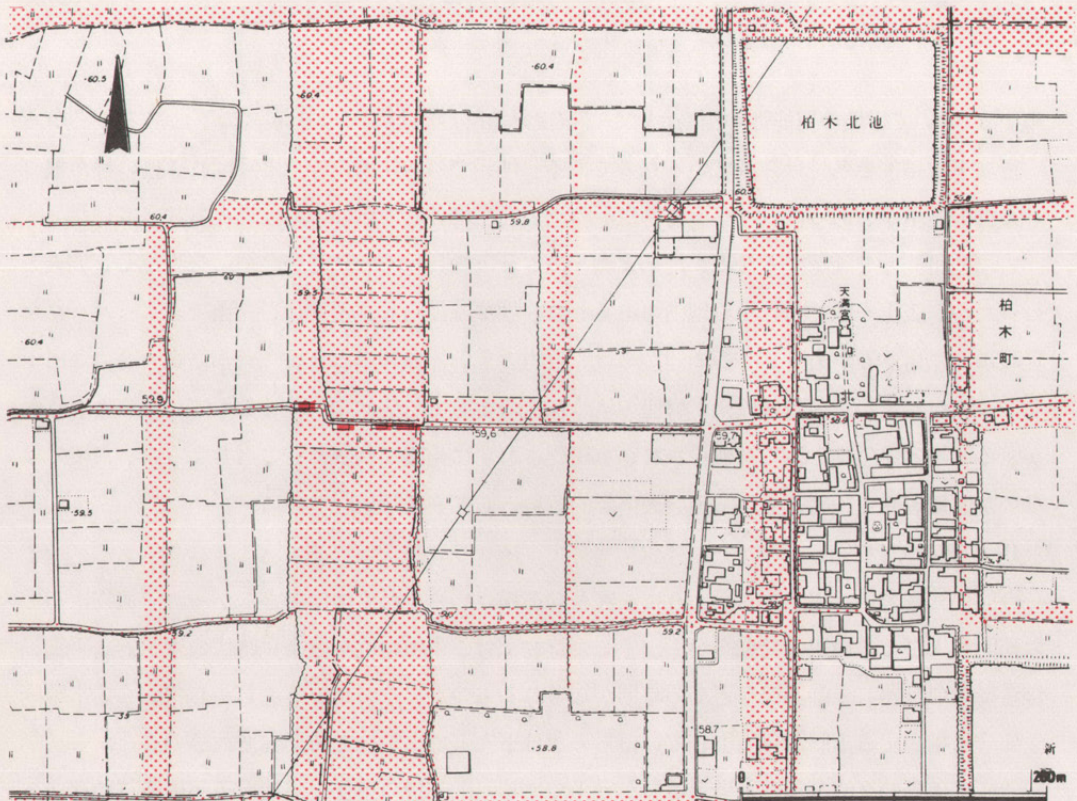
今回の調査では、上記したように、顕著な遺構は、まったく検出できなかった。遺物散布地の範囲およびその周辺の発掘区から出土した遺物には、古墳時代から奈良時代の須恵器、平安、鎌倉時代の瓦器、土師器皿などその時期が知られるものもいくつかある。しかしながら、水田床土部分に相当する土層から出土しているものがほとんどで、小片で時期幅も大きいことから、水田造成による二次的な包含と考えるのが妥当である。調査地の東側、盆地縁辺部に遺跡の存在を
 (森下恵介)

2. 平城京朱雀大路の調査 第103次

1 はじめに

本調査は、奈良市柏木町において実施した、市道改良工事に伴う事前発掘調査である。当該地は、平城京条坊復元では朱雀大路と五条条間路の交差点に相当する。市道が、朱雀大路の路面を横断する形で計画されていることから、今回の調査では、主に朱雀大路東西両側溝の確認を目的としているが、さらにこれに加えて下つ道東西両側溝の確認をも目的として計画した。

朱雀大路については、畦畔、水路などからによる条坊復元調査からその位置と規模が、ほぼ明らかになっている。この成果に加え、従前の朱雀大路関係の発掘調査成果を考慮して、発掘区を設定した。しかし朱雀大路全幅を検出する発掘区を設定することは、用地確保等の諸問題から困難であるため、朱雀大路両側溝、下つ道両側溝相当地点に分散して発掘区を設定せざるを得なかった。また、朱雀大路東側溝については、農業用水路の改修工事の先行により、側溝本体については確認できないであろうことは、調査開始時から明らかであった。



発掘区の位置と周辺の遺存地割 1/5000

発掘区は、朱雀大路西側溝相当地点に南北4m、東西10m(40㎡)、下つ道両側溝相当地点に南北3m、東西9m(27㎡)の範囲で、それぞれ設定した。なお、朱雀大路東側溝については、用水路壁際に南北3m、東西12m(36㎡)の発掘区を設定し、側溝両肩の確認をはかった。

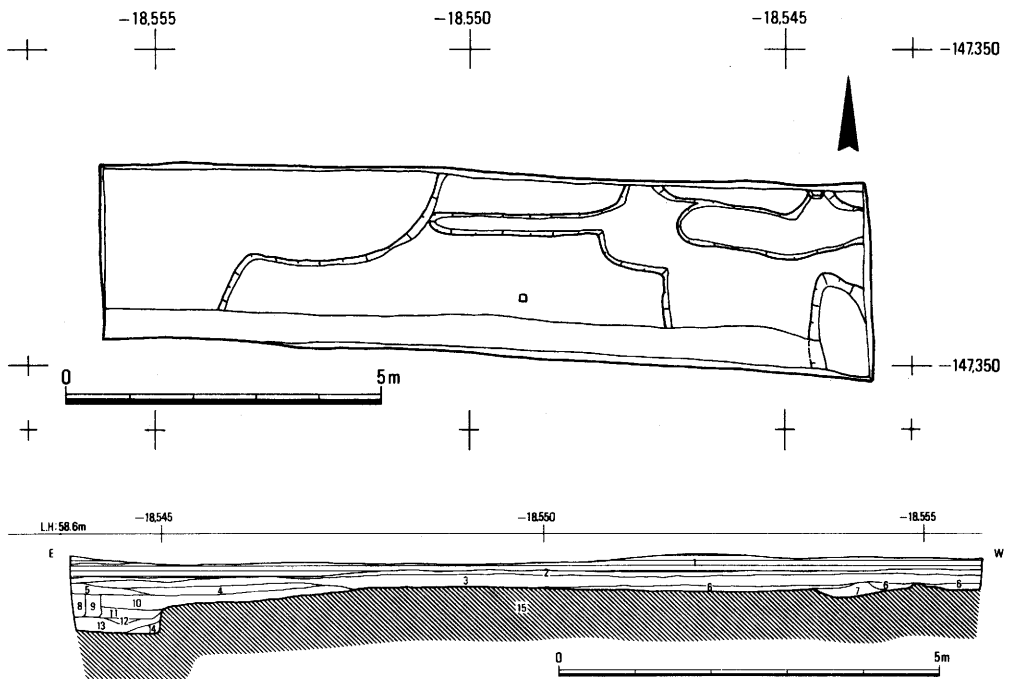
調査は、昭和60年12月16日に開始し、昭和61年2月1日に終了した。

II 検出遺構

以下に、各発掘区ごとに検出した遺構について概述する。発掘区は、東側から順次、第1発掘区、第2発掘区、第3発掘区、第4発掘区と呼称する。

第1発掘区 朱雀大路東側溝西肩の検出を目的として設定した発掘区である。発掘区内の基本的な土層堆積状態は、耕土、床土以下、暗黄灰色砂質土の遺物包含層が約10cmにわたり堆積し、地表下約40cmで、灰色砂を主とした地山に至る。

朱雀大路路面は、この灰色砂の自然堆積土からなる地山上面にあたと考えられ、現状では礫敷き等の路面上の造作は認められなかった。大路路面上では、極めて少量の奈良時代の瓦片が出土した。発掘区内では、朱雀大路東側溝と考えられる遺構は検出し得なかったが、発掘区内東側で朱雀大路路面から東に向い緩やかに落ちる傾斜面を確認した。斜面は東西幅約4m以上にわたり緩やかに下がり、約30~40cmの高低差がみられる。発掘区外東へ続く。一部に大きく浸蝕を受けた部分がみられ、朱雀大路路面から東側溝へ続く路肩部に相当するものと考えられよう。



- | | | |
|------------|-----------|-------------|
| 1. 耕土 | 4. 茶灰色砂 | 7. 黒灰色砂質土 |
| 2. 床土 | 5. 茶灰色砂質土 | 8. 暗灰色砂質土 |
| 3. 暗黄灰色砂質土 | 6. 暗灰色粘砂 | 9. 茶灰色砂質土 |
| | | 10. 暗灰色粘砂 |
| | | 11. 淡黄灰色砂質土 |
| | | 12. 茶灰色砂質土 |
| | | 13. 淡青灰色砂 |
| | | 14. 茶灰色粘土 |
| | | 15. 地山 |

朱雀大路東側溝平面図 1/120・南壁堆積土層図 1/100

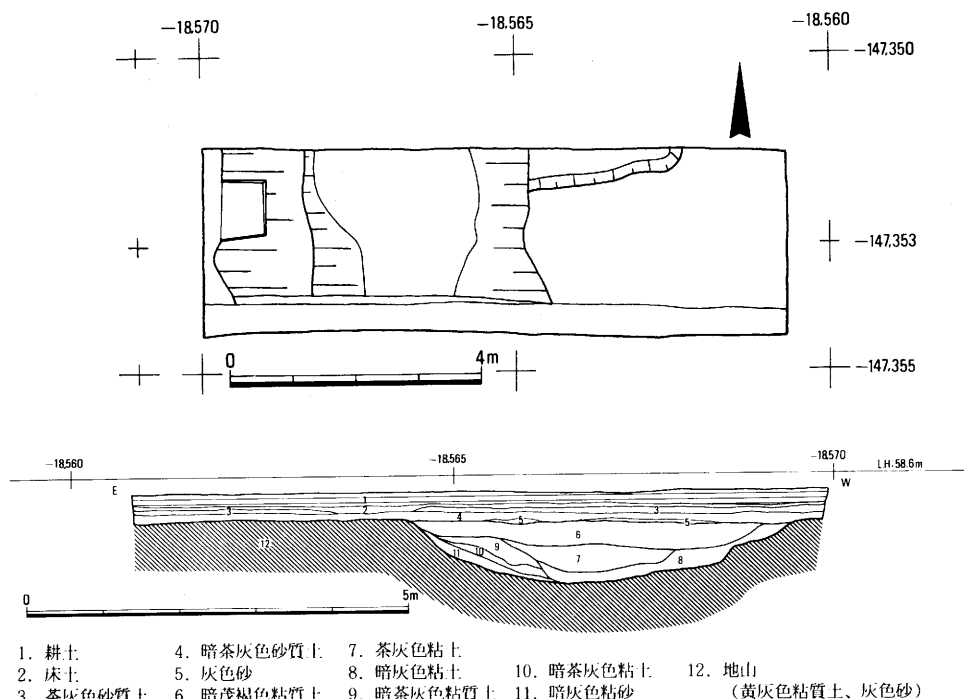
また、大路路面から、路肩部の傾斜に沿って流れ込む東西方向の幅約40cm、深さ約5cmの素掘り溝を検出した。溝底で瓦片が散乱して出土しており、東側溝へ流れ込む流路状のものかとも考えられる。

発掘区内浸蝕部埋土からは、極めて少量の瓦片、土器片が出土したが、いずれも小片であり、年代を決定し得るものではない。

第2発掘区 下つ道東側溝の検出を目的として設定した発掘区である。発掘区内の基本的な土層堆積状態は、耕土、床土、茶灰色砂質土と続き、以下、暗茶灰色砂質土の遺物包含層が約10cmにわたり堆積し、地表下約40cmで朱雀大路路面をなす黄灰色粘質土に至る。

発掘区内西側で、幅約5mの土質の変化する箇所が認められた。この部分の土を除去したところ、幅約5m、検出面からの深さ約80cmの南北溝を検出した。下つ道東側溝に相当するものと考えられる。この溝の埋土は、下層から灰色粘土、茶灰色粘土、茶褐色粘質土の堆積をみる。埋土中から極めて少量の土器細片が出土したが、年代を決定し得るものではない。

第3発掘区 下つ道西側溝の検出を目的に設定した発掘区である。発掘区内の基本的な土層堆積状態は、耕土、床土、黄褐色粘砂、暗灰色粘砂と続き、以下、淡黄灰色砂質土の遺物包含層が約10cmにわたり堆積し、地表下約50cmで暗褐色粘質土の下つ道路面整地土に至る。この整地土面上で幅約6mの土質の変化する箇所が認められた。この部分の土を除去したところ、幅約6m、検出面からの深さ約70cmの南北溝を検出した。東肩は、黄褐色粘土の地山を掘り込む形で作られ



下つ道東側溝平面図 1/120 ・ 南壁堆積土層図 1/100

ている。下つ道西側溝に相当するものと考えられる。埋土は、下層から暗黄褐色粘土、黄褐色粘土、茶灰色粘砂、黄褐色砂質土の堆積をみる。埋土中から極めて少量の土器細片が出土したが、年代を決定し得るものではない。

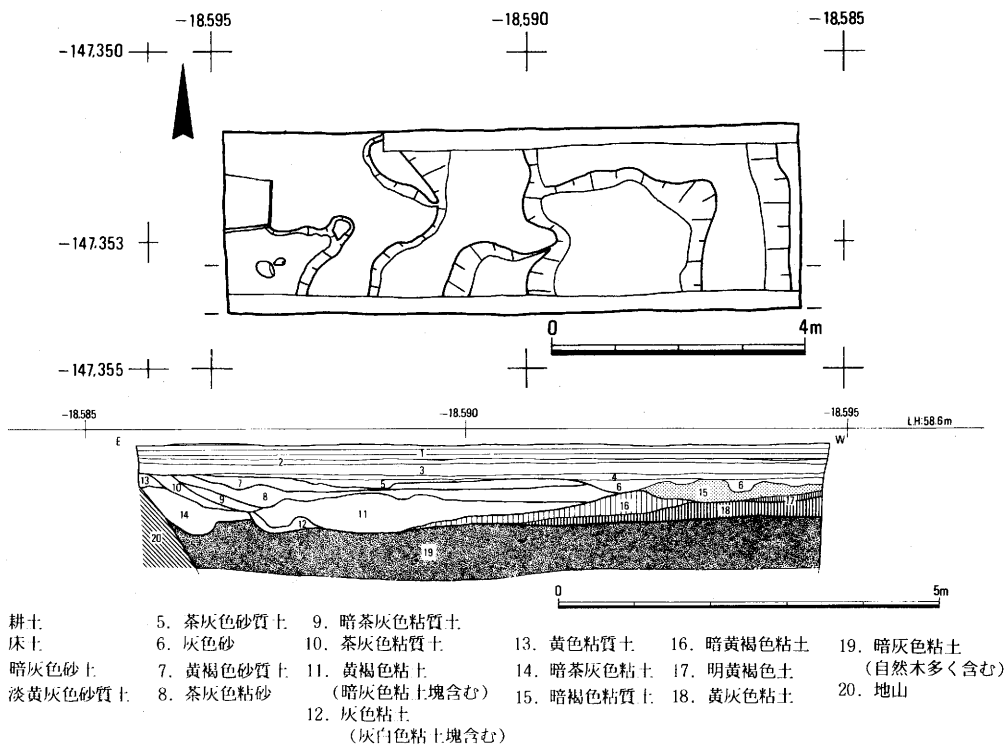
第2発掘区において検出した南北溝と、この南北溝との溝心々間距離は、約22mである。この東西両溝にはさまれた間を下つ道路面に、両溝を東西両側溝と考えておく。

また、この下つ道西側溝の下層には、さらに大きな溝が存在する。下層溝の東肩は、下つ道西側溝のそれとほぼ一致し、そこから発掘区外へ広がる。検出幅は9mにわたり、発掘区内全面におよぶ。今回は発掘面積との関係から、溝底については確認できなかったが、下つ道西側溝下1m以上におよぶことを確認した。溝内は、灰色粘土が堆積し、埋土中には自然木が多量に埋没していた。出土遺物は全くみられず、遺構の性格と時期については明らかでない。

下つ道西側溝は、この下層溝埋土上に整地土として暗褐色粘質土をおき、下つ道路面とした整地層を掘り込む形で作られたものと考えられる。

第4発掘区 朱雀大路西側溝の検出を目的として設定した発掘区である。発掘区内の基本的な土層堆積状態は、耕土、床土、暗灰色砂質土、茶灰色砂質土と続き、以下、黄灰色砂質土の遺物包含層が約10cmにわたり堆積し、地表下約60cmで黄色粘土、黄灰色砂の地山に至る。

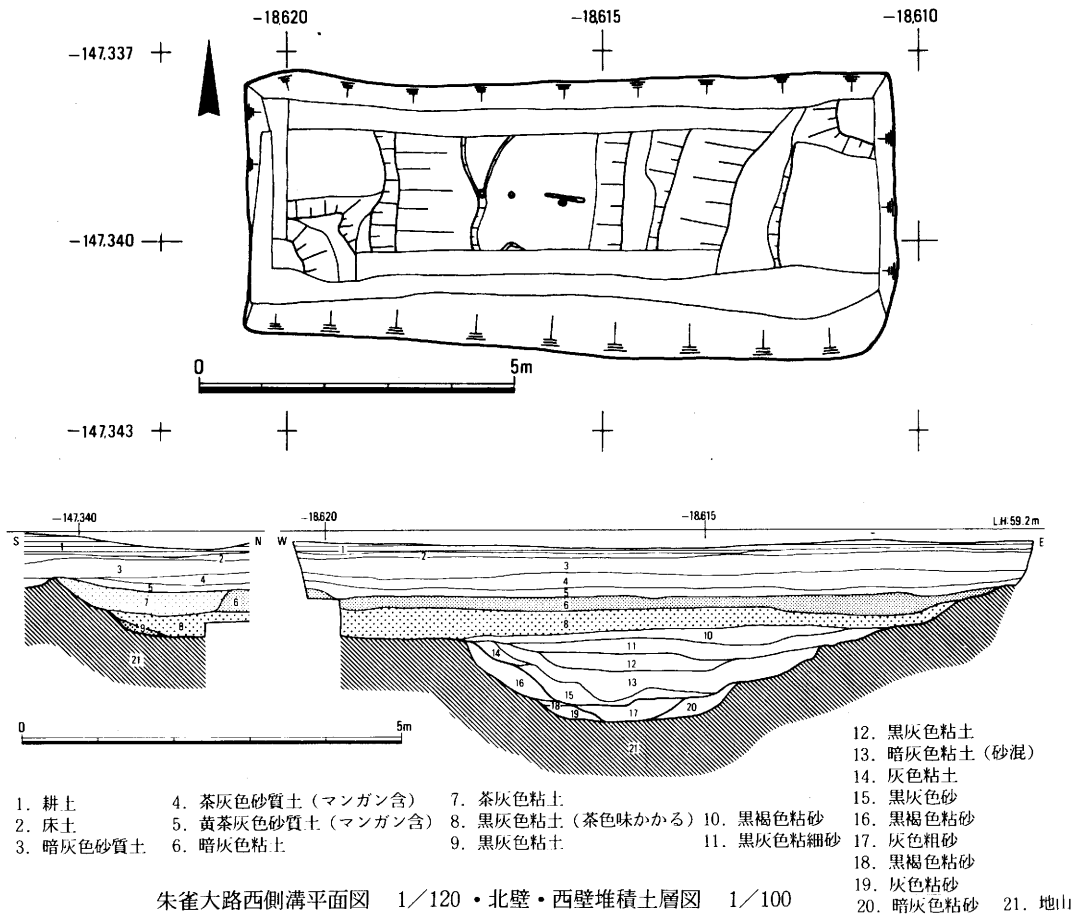
この地山上で発掘区全体にわたる検出最大幅約11m、深さ1.8mの南北溝を検出した。朱雀大路西



下つ道西側溝平面図 1/120・南壁堆積土層図 1/100

側溝に相当するものと考えられる。溝幅については、検出した範囲内で、溝岸に3回以上の流水による変形がみられ、本来の溝幅を示すことはできない。また、発掘区西側で、この南北溝に流れ込む形での東西溝の南肩を検出した。五条条間路北側溝に相当するものと考えられる。

朱雀大路西側溝の変遷については、発掘区北壁の土層断面の観察から、以下のように考える。断面の土層では、大きく3つの堆積の変化がみられ、最低2回以上の溝の改修がうかがえる。最下位の溝は東肩を上位の溝によってきられており、底部付近を確認するにとどまったが、西肩については、明確にし得た。この下位溝埋土は粘砂を主体としている。溝埋土からほとんど遺物は出土しなかった。中位溝は、最下位の溝埋土を掘り込む形で流れており、明確に底をとどめているが、その上部は上位溝にて浸蝕され、両岸は明らかでない。溝埋土は、灰色粗砂が堆積し、若干量の奈良時代の遺物が出土した。溝底において、後述する東西溝との合流部で、東西方向に並ぶ三本の杭が打たれ、東杭に長さ50cm、幅5m、厚さ2cmの長方材が横木として置かれていた。この杭は、下位溝の灰色粘砂層を基盤に打ち込まれており、中位溝時代に作られたものと考えられる。東西溝からの流水により溝底が浸蝕されるのを防ぐために設けられた堰等の施設であろうか。上位溝は、下位溝、中位溝に比してやや東寄りに流れを移し、幅約5.6m、深さ1mをはかり



平坦な底を呈する。溝底には、黒灰色砂が約20cmの厚さで堆積し、その上層に暗灰色粘土、黒灰色粘土、黒灰色粘細砂、黒褐色粘砂と堆積する。各堆積土層から若干の遺物が出土した。

以上述べたように、溝岸の変移は大きく、本来の溝幅について明らかにし難いが、上位溝でみられた溝幅 5.6mを一時期の溝幅と考えておきたい。

発掘区西側で検出した東西溝は、幅 2.5m以上、深さ 0.7mを測る。この東西溝は、朱雀大路西側溝がほぼ埋まった段階においても流れていたものと思われ、発掘区北壁の土層断面において西側溝埋土上を横断し、西側溝東肩に達する堆積土を確認した。埋土から若干量の瓦片、土器片が出土した。出土遺物の特徴からみて、この東西溝は平安時代に入ってから流水がみられたものと思われる。

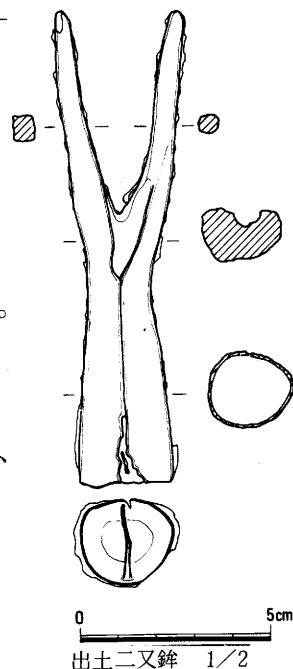
III 出土遺物

各発掘区から若干量の遺物が出土しているが、全体に小片で図示できるものは少なく、時期決定の資料となり得るものも僅少である。ここでは、特に朱雀大路西側溝上位溝、黒灰色粘細砂層から出土した鉄製「二又鉾」についてふれておく。鉾先をV字形の二股につくり、もとの方を袋状とした鉾で、目釘にて柄材に固定したものと考えられ、目釘が遺存する。残存長12.5cm、最大幅3.5cmを測る。身部は、先端が錆化により一部欠損するが、二股根部より直線状に外方へ伸びるもので、断面方形を呈し、刃をつけた痕跡はみられない。袋部は、二股根部を薄く伸ばし、漏斗状につくったものである。末端は錆化により欠損している。おそらくは、鍛造によるものであろう。出土層での共伴遺物が少なく、年代については明確にし難いが、西側溝本体からの出土であり、溝内埋土からは平安時代に下と思われる遺物はみられず、奈良時代の範疇に含めて問題ないものとする。現在のところ類例は、日光男体山岩陰祭祀遺跡から出土した、平安時代以降と考えられるもの以外知られず、用途を特定できるものではない。日光男体山出土品では、身部をU字形につくり、平行して上方にのびるものが多く、刃部をつくりだしている。形態的に、今回出土したものがやや古様を示しているものかと思われる。いずれにしても、今後の資料の増加を期待したい。

注) 栃木県教育委員会『栃木県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第二輯 昭和2年

IV まとめ

今回の調査では、朱雀大路、同西側溝、下つ道、同東西両側溝、および五条条間路北側溝の一部を検出した。朱雀大路、下つ道に関しては、過去数回の調査例がみられ、それぞれに造営計画復元についての検討がなされている。ここでは、これらの成果をふまえ、今回の資料を加えて造営計画について資料の整理を行ない、基礎資料としたい。



朱雀大路 朱雀大路西側溝はこれまで、朱雀門南辺、六条一坊、羅城門北辺の調査で検出されている。ここで、これらの調査で検出された西側溝と、今回検出した五条一坊朱雀大路西側溝とを比較し、朱雀大路西側溝の国土方眼方位に対する振れについてみることにする。

五条一坊朱雀大路西側溝心と、朱雀門南辺西側溝心間での西側溝の振れは、北で西に $0^{\circ}15'59''$ となり、六条一坊西側溝心間での振れは、北で西に $0^{\circ}13'20''$ である。また、羅城門北辺西側溝心間では、北で西に $0^{\circ}14'24''$ の振れがみられる。これまで明らかにされている朱雀大路西側溝の振れをみると、朱雀門南辺、六条一坊間では、北偏西 $0^{\circ}14'09''$ 、六条一坊、羅城門北辺間では、北偏西 $0^{\circ}15'49''$ の振れがみられる。今回の成果とこれらを比較すると、振れの数値には若干のばらつきはみられる。これについて種々の考察を加えるべきであろうが、朱雀大路西側溝の詳細については、今後の更なる資料の蓄積が必要であり、今回は一応の成果として数値を呈示しておく。

下つ道 下つ道はこれまで、平城宮第一次大極殿南門、平城宮朱雀門、六条一坊朱雀大路、稗田・若槻遺跡の調査で検出されている。大極殿南門では東側溝を、他の調査ではいずれも東西両側溝を確認している。今回の調査では、下つ道の幅員は溝心心間で21.9m、路肩幅で16.05mを測る。側溝幅は東側溝で4.8m、西側溝で5.5mである。

従前の調査例との比較により、下つ道の国土方眼方位に対する振れを考えると、以下のようである。五条一坊下つ道と、朱雀門間では東側溝心で $0^{\circ}21'30''$ 、西側溝心で $0^{\circ}23'42''$ 、それぞれ北で西に振れる。六条一坊の間では、東側溝心で $0^{\circ}14'44''$ 、西側溝心で $0^{\circ}02'40''$ 、それぞれ北で西への振れがみられ、稗田遺跡間では、東側溝心で $0^{\circ}15'40''$ 、西側溝心で $0^{\circ}13'46''$ の北で西への振れがみられる。また、これまで明らかにされている下つ道の振れをみると、稗田、六条一坊間では東側溝心で北偏西 $0^{\circ}15'47''$ 、西側溝心で北偏西 $0^{\circ}15'16''$ 、六条一坊、朱雀門間では、東側溝心で北偏西 $0^{\circ}19'53''$ 、西側溝心で北偏西 $0^{\circ}18'03''$ の振れがみられる。また、朱雀門、大極殿南門間では、東側溝心で北偏西 $0^{\circ}14'30''$ の振れがみられる。これらによると、下つ道の国土方眼方位に対する振れは、場所によりかなりの差異をもつことがわかる。

以上、朱雀大路・下つ道についてその造営方位の国土方眼方位に対する振れをみてきたが、いずれの詳細についても、今後の調査成果の蓄積によるところが大きいと言えよう。(立石堅志)

地 点 名	X	Y	備 考
五条一坊朱雀大路西側溝心	-147,338.334	018,616.25	今回の調査
五条一坊下つ道東側溝心	147,353.887	-018,566.90	今回の調査
同 西側溝心	147,353.887	-018,588.80	今回の調査
朱雀門南辺朱雀大路東側溝心	-146,008.03	-018,545.50	奈良研『平城宮概報 昭和56年度』
同 西側溝心	146,009.86	-018,622.50	奈良研『平城宮概報 昭和57年度』
六条一坊朱雀大路東側溝心	147,797.00	-018,540.85	奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』
同 西側溝心	147,869.30	-018,614.25	奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』
羅城門北辺朱雀大路西側溝心	-149,719.20	018,606.34	大和郡山市『平城京羅城門跡発掘調査報告』
平城宮第1次大極殿南門下つ道東側溝心	-145,402.55	-018,577.99	『平城宮発掘調査報告IX』
朱雀門下つ道東側溝心	145,948.0	-018,575.69	『平城宮発掘調査報告IX』
同 西側溝心	145,948.0	-018,598.49	『平城宮発掘調査報告IX』
六条一坊下つ道東側溝心	147,797.0	018,588.40	奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』
稗田・若槻遺跡下つ道東側溝心	-151,675.0	018,547.20	『奈良県遺跡調査概報 1980年度』
同 西側溝心	151,675.0	-018,571.50	『奈良県遺跡調査概報 1980年度』

計 測 座 標 表

3. 平城京右京六条一坊十四坪の調査 第92次

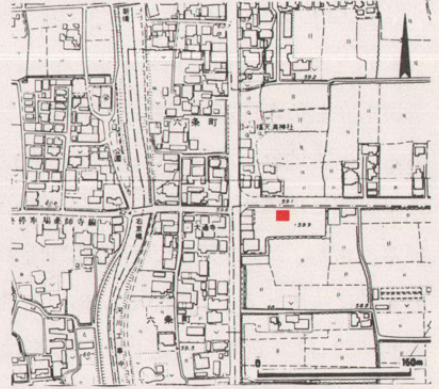
本調査は、奈良市西の京町104番地の1において、宮城正治氏届出の農業用倉庫建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では右京六条一坊十四坪の北辺部に相当し、六条条間路南側溝の存在が想定される位置にあった。そこで同側溝の確認を目的に推定位置に120㎡の発掘区を設定し、昭和60年7月8日から同年7月30日にかけて調査した。

発掘区内の堆積土層は、まず1.0mほどまでは造成盛土で、以下旧耕土・床土の下、茶褐色および灰色系の堆積土が続き、地表下約1.9mが遺構検出面である。

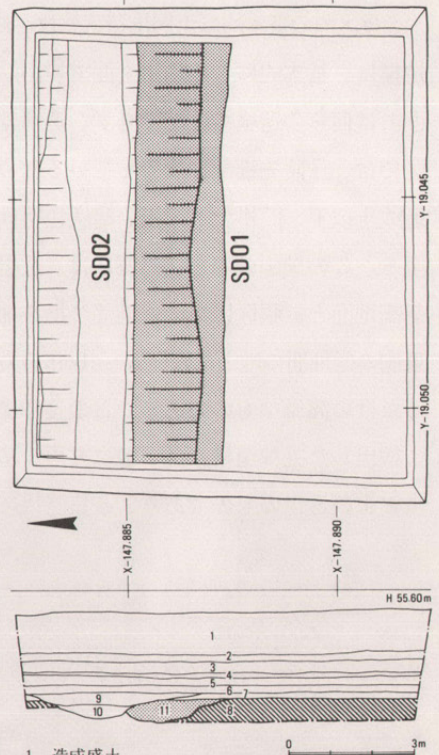
検出遺構は六条条間路南側溝SD01と、これの上層でほぼ同位置に重複するいま一条の東西溝SD02とである。SD01は、SD02の掘削で北岸を欠くが、残存幅2.0~2.2m、深さ50cm内外の素掘り溝で、青色砂の地山を掘込んでいる。溝内には青灰色粘砂が堆積し、8~9世紀の瓦類・土器類が出土した。SD02は、幅3.7~4.2m、深さ60cm内外の素掘の溝で、地山上に堆積した厚さ20cmほどの灰色粘土を掘込んでいる。下層のSD01とは溝心々で約1.5m北側へ寄っている。溝内埋土は上下2層に大別でき、下層には黒灰色粘土が、上層には暗灰色粘土が堆積し、下層からは8~12世紀の、上層からは8~13世紀の瓦類・土器類が出土した。

遺物は上述の二条の溝から出土したものが大半で、整理箱20箱分があるが、多くは瓦類が占める。SD01出土の土器には土師器・須恵器と僅少ながら黒色土器があり、瓦には軒丸瓦6308C型式1点が含まれる。SD02出土の土器には土師器・須恵器・黒色土器に加え灰釉陶器・瓦器があり、瓦には軒丸瓦6276A型式1点、軒平瓦6641H型式2点、同6721G型式1点、平安時代の軒平瓦1点がある。

(中井 公)



発掘区的位置 1/7500



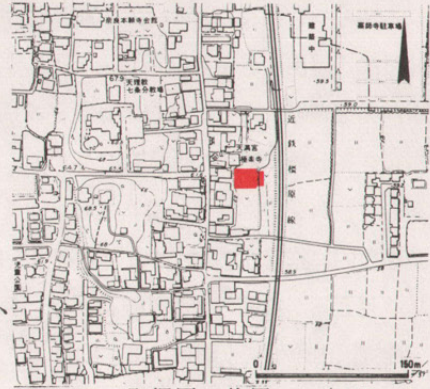
- | | |
|--------------|---------------------|
| 1. 造成盛土 | 7. 灰色粘土 |
| 2. 黒色腐蝕土(耕土) | 8. 青色砂(地山) |
| 3. 灰褐色砂土(床土) | 9. 暗灰色粘土(SD02上層埋土) |
| 4. 茶灰色砂土(床土) | 10. 黒灰色粘土(SD02下層埋土) |
| 5. 灰色粘砂 | 11. 青灰色粘砂(SD01埋土) |
| 6. 灰色粘土 | |

検出遺構平面図・東壁堆積土層図

4. 平城京右京七条二坊十四坪の調査 第101次

I はじめに

本調査は、奈良市七条町349番地において実施した、奈良市立七条町地域体育館建設に伴う事前発掘調査である。当該地は平城京条坊復元では右京七条二坊十四坪の中央部に相当する。近世には円満寺の存在が知られている。また、地形的には、西の京丘陵の東に伸びる支脈の東端に位置する。発掘区は、体育館敷地全面にわたり、総面積534㎡の範囲を設定した。調査は昭和60年10月21日に開始し、同年12月9日に終了した。

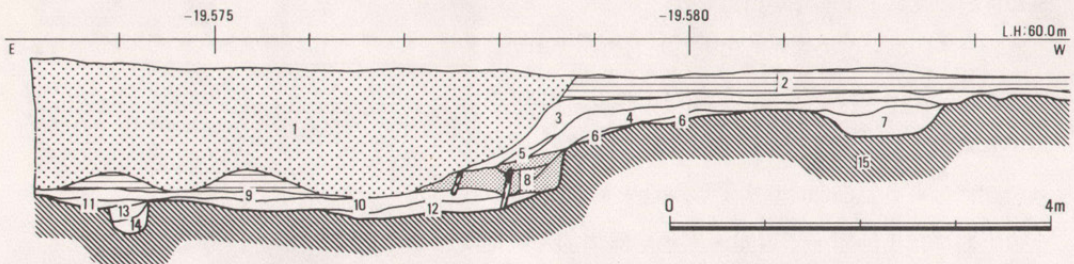


発掘区の位置 1/7500

II 検出遺構

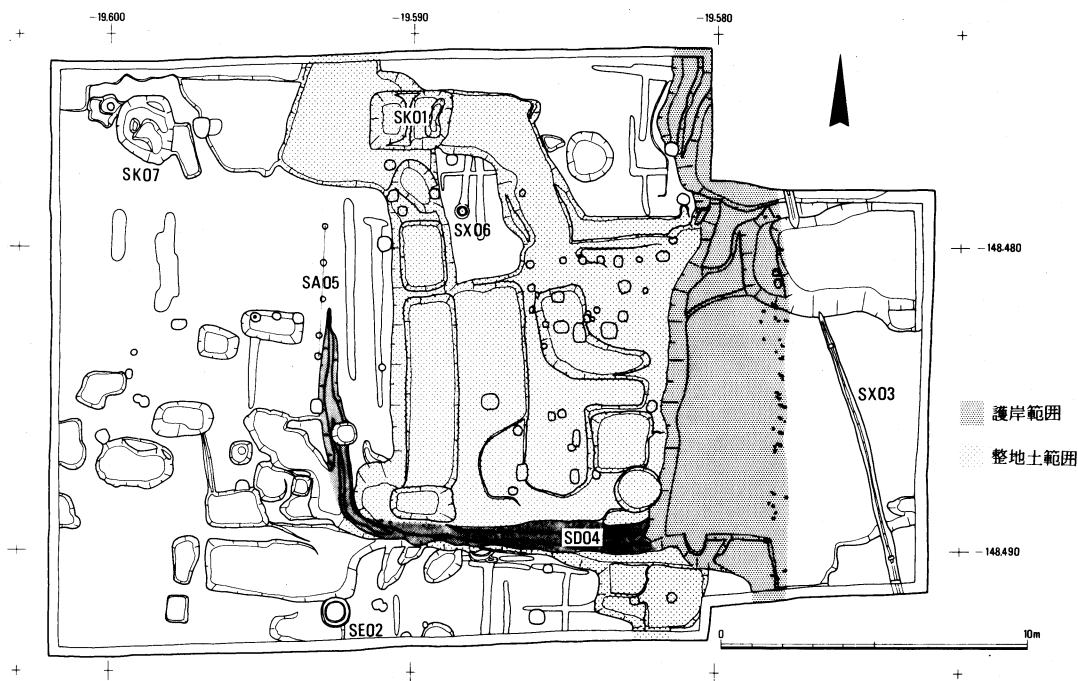
発掘区内の基本的な土層堆積状態は、耕土、床土の下、地表下約30cmで黄色粘土の地山となる。遺構は、基本的にこの地山上面で検出した。発掘区東半分では、近世の整地がみられる。この上面では何らの遺構も確認できず、遺構は整地層除去後、地山上面にて検出した。発掘区東側拡張区では、丘陵先端部に位置しているためか、地山に比高差約1mの落ちがみられる。約1.2mの造成土以下、旧耕土、床土、暗灰色粘砂と続き、現地地表下1.4mで灰色砂を主体とする地山面に至る。この地山の落ち込み部には、近世期のものと考えられる畦畔状の護岸の造作がなされ、西側高地面と拡張区以東の低地面の境を補強している。護岸施設は、地山の落ちの肩部より約4m東側の低地面の地山に直径5~10cmの丸木杭を打ち込み、落ちの肩部までの間に土砂を積みあげるだけの簡単なものである。この護岸裏込め土からは、大量の近世遺物が出土した。

検出した主な遺構には、他に井戸1基、上水道1条、溝、土塹、柱穴等がある。ほとんどが中世および近世のものであり、奈良時代に属すものはまれである。以下に概略を述べる。



- | | | | | | |
|---------|------------|------------|------------|-----------|--------------------|
| 1. 造成客土 | 3. 暗茶灰色粘質土 | 5. 暗茶灰色砂 | 7. 暗茶褐色粘質土 | 10. 暗灰色粘砂 | 13. 暗灰色粘砂 |
| 2. 耕土 | 4. 黒茶褐色粘質土 | 6. 暗茶褐色粘質土 | 8. 護岸埋土 | 11. 茶灰色粘砂 | 14. 灰色砂 (S X 03埋土) |
| | 9. 暗青灰色粘質土 | 12. 暗灰色粘土 | 15. 地山 | | |

発掘区南壁堆積土層図 1/80



検出遺構平面図 1 / 250

S K01 発掘区北側の近世整地層下地山面にて検出した長辺2.6m、短辺1.8m、検出面からの深さ0.6mの長方形の土塊。塊内埋土から14世紀前半代の瓦器碗、土師器皿、土師器釜が出土した。

S E02 発掘区南側で検出した井戸。直径0.9mの鉛直に掘り込まれた円形掘形の中央に直径約0.7mの円形井戸枠をもつもので、検出面からの深さ3m以上、底は確認し得なかった。井戸枠は長さ約1m、幅20cm程度、厚さ約2cmの長方材の接面を木釘で留め、竹製のたがで締め桶状にしたものを重ねたもので、3段分を検出。構築の際は、下段の井戸枠の外側に上段の内径を嵌め込む形で積みあげている。枠内埋土からは、近世末葉の遺物が出土した。

S X03 発掘区東拡張区にて検出した上水管施設である。長さ14m以上にわたる。発掘区外の南北へ伸びる。地山の灰色砂を幅約20cm、深さ30cm程度に掘り込み、直径5cm程度の竹管を置き水道管としたもの。北端と南端での高低差は、約7cmで南に向い傾斜する。水道管の接続部は、幅20cm、高さ10cm、厚さ5cmの長方材の中央に竹管の径で穴を穿ったものを置き、接続とする。この上水道管の延長北側には、通称「楠井戸」と呼ばれる古井があり、この井戸からの分水道かとも考えられる。また、この上水道掘形上面には多量の破碎された瓦器挿鉢を主とする土器類が敷かれており、上水管の保護を図ったものかとも思われる。

S D04 発掘区南側整地土層下で検出した素掘り溝。発掘区中央で、南北方向から直角に近く東西方向へ曲がり、東側の地山の落ち込み部へ流れ込む。幅約2m、深さ20cm程度のもの。溝肩の一部に、平瓦による護岸擁壁がみられる。溝埋土からは18世紀後半代の土器類が出土した。

S A05 S D04西側で検出した柱列である。4間分(4.3m)を検出。北側3間は1.2m等間となる。S D04の北側延長上に沿って柱穴が並び、これに関連する柵等の施設かと考える。

S X06 発掘区北部にて検出した埋甕土壌。直径50cmの円形掘形中央に底部中央を穿孔した瓦器甕を据える。上半を欠いており、性格、用途については不明である。

S K07 発掘区西北隅で検出した不整形な土壌。検出面からの深さ約50cm。埋土から瓦当文様に『圓満禅寺』の文字を配する軒丸瓦2点が出土した。

III 出土遺物

今回の調査では、東側拡張区を中心に多量の遺物が出土した。ここでは土壌S K01、溝S D04を中心に出土遺物について概述する。

S K01出土土器 土師器皿(1~8)、瓦器椀(9~12)、土師器釜(13)がある。土師器皿には、胎土が赤色系を呈するもの(3、5、7、8)と、白色系のもの(1、2、4、6)がみられる。いずれにも口径8~8.5cm、器高1.4cm程度の小皿と、口径10.5~11cm程度、器高2.4cm前後の大皿がみられる。赤色系のものは、内面および口縁部上半をよこなで、白色系のは、内面および口縁部下半までをよこなで調整とする。瓦器椀は、口径10cm前後、器高3.2~3.6cm程度のもので、高台を付すもの(10~12)と、高台を付さないもの(9)がある。いずれも内面に粗い渦巻状の磨きを施す。土師器釜は口径16.5cm。口縁部を内傾させ、口縁端部を外側へ折り返し押さえるもの。胴部上位に鏝の痕跡が残る。いずれの土器も、14世紀前半代のものである。

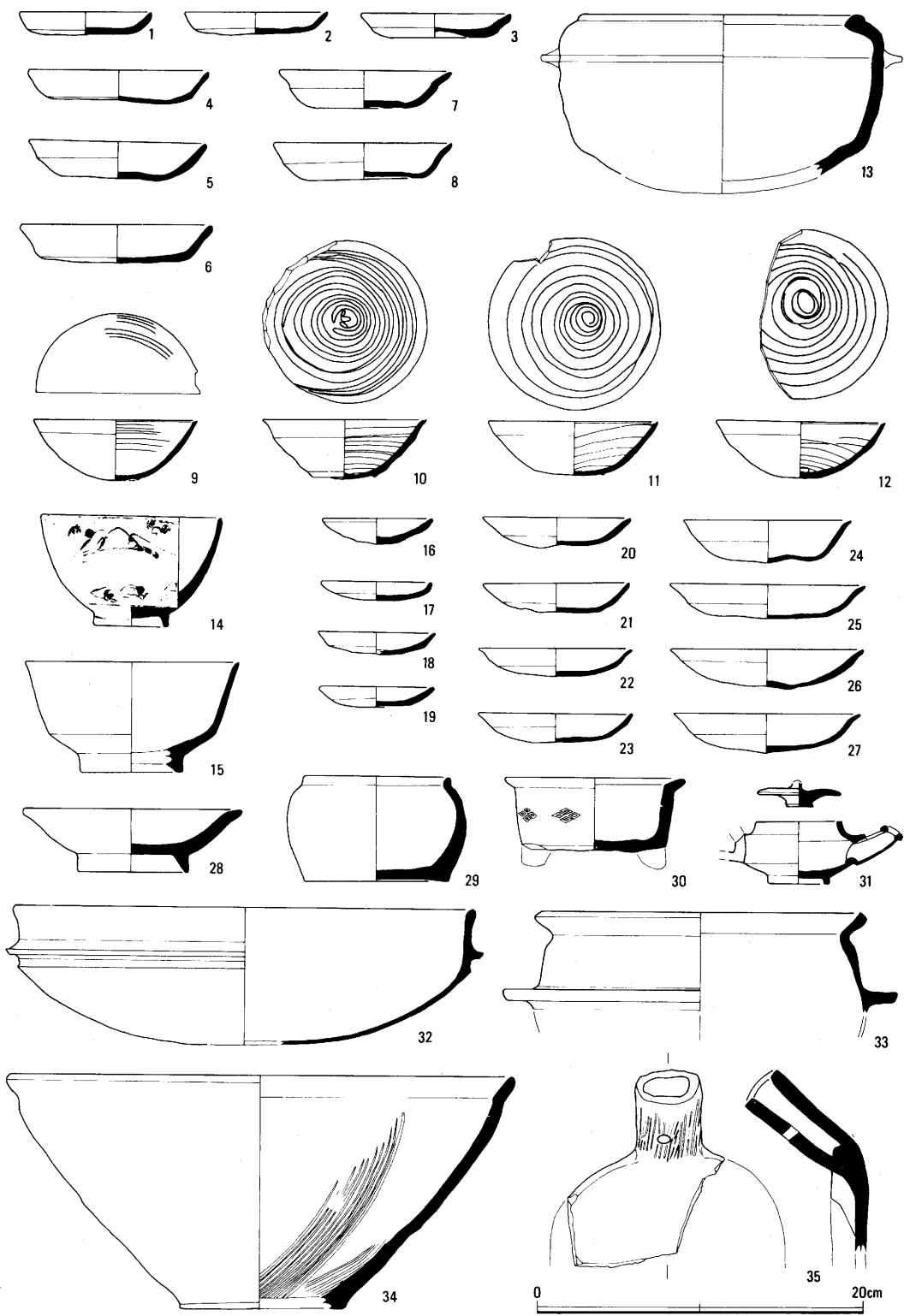
S D04出土土器 唐津系陶器椀(15)、土師器皿(16~27)等がある。土師器皿には、口径7cm前後、器高1.3cm前後の小皿(16~19)、口径9~9.5cm、器高1.8cm前後の中皿(20~23)、口径10.5~12cm程度、器高2~2.5cmの大皿(24~27)の三種類のものがみられる。いずれも内面及び口縁部外面をよこなでする。いずれも18世紀後半代の特徴を示す。

その他の出土土器 以上述べた他に、近世護岸裏込め土から瓦器高台付皿(28)、瓦器香炉(29~30)、土師器釜(33)、瓦器把手付焙烙(35)、土師器皿等の18世紀後半から19世紀にかけての土器類と銭貨。近世整地土層からは磁器椀(14)、土師器焙烙(32)、瓦器挿鉢(34)、陶器灯明器(31)等の18世紀から19世紀にかけての土器類が出土している。

IV まとめ

以上調査の概要を記したが、ここで近世期の当該地の様相についてふれ、若干のまとめとする。

当該地北辺には近世期、円満寺と称す寺院の存在が知られており、今回多量に出土した仏器具や『圓満禅寺』の文字を配する軒丸瓦の出土もこのことから理解できる。また、『大和名勝志』に円満寺に関して、「(略)昔日此村=円満者ト云モノアリ、初メテ陶ヲツクル、其後葉代々陶者多シ、号シテ円満鉢ト云フ(略)」とあり、「陶」の生産が行なわれていたことが、うかがえる。ここでの「円満鉢」を挿鉢であると考えれば、今回大量に出土した瓦器挿鉢について、その生産を当該地においてまかなったものと想定することも可能であろう。(立石聖志)

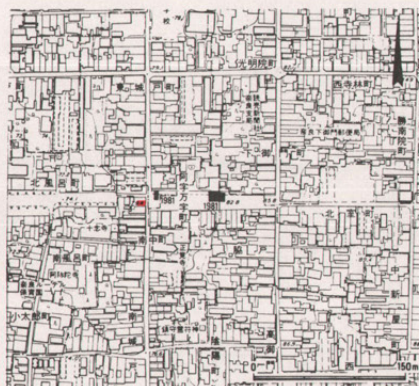


出土土器 1/4

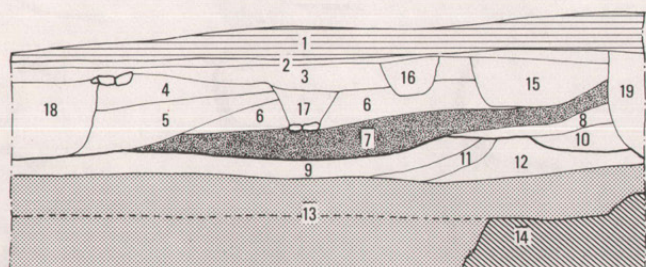
5 平城京左京（外京）四条六坊十一坪の調査 第100次

本調査は、都市計画道路杉ヶ町・高畑線の建設に伴う事前調査として実施した。調査地は、奈良市南中町2～3番地で、都市計画道路昭和56年度調査地とは道路交差点を隔て、その西南に位置する。道路拡幅部分の調査といった、その性格から、発掘区は、13㎡（2m×6.5m）と小規模なものにとどまった。調査は、昭和60年10月16日から10月22日にかけて行なった。中世以降、現在に至るまで、周辺は、奈良町の中心部であり、活発な土地利用のくりかえしによって、発掘区の土層は、かなり複雑

なものであるが、現地表下約1mのところ、昭和56年調査で確認したものと同一と考えられる近世の焼土層が確認できた。土層は以下、黄褐色砂質土、淡褐色砂質土とつづくが、地山である黄白色砂礫層は、発掘区東端から急な傾斜面となる。遺構は、黄褐色砂質土上面で、近世の建物に伴うらしい石垣状の遺構を検出した他には、顕著な遺構は検出できなかった。（森下恵介）

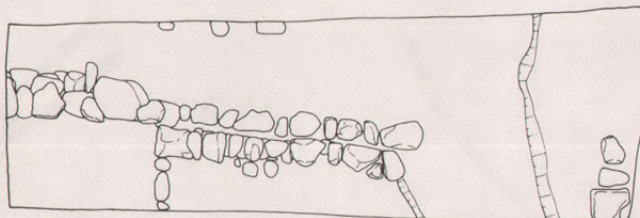


発掘区の位置 1/7500



79.20m

- | | |
|-------------|------------|
| 1. 表土 | 11. 黒灰色土 |
| 2. 黄色砂 | 12. 褐色砂質土 |
| 3. 暗黄褐色粘質土 | 13. 淡褐色砂質土 |
| 4. 灰褐色土 | 14. 黄白色砂礫 |
| 5. 黒灰色砂質土 | 15. 黒灰色砂 |
| 6. 暗茶褐色砂質土 | 16. 黒灰色砂質土 |
| 7. 焼土 | 17. 黄褐色粘質土 |
| 8. 淡黄褐色砂質土 | 18. 黒灰色粘質土 |
| 9. 黄褐色砂質土 | 19. 黒灰色土 |
| 10. 暗黄褐色砂質土 | |



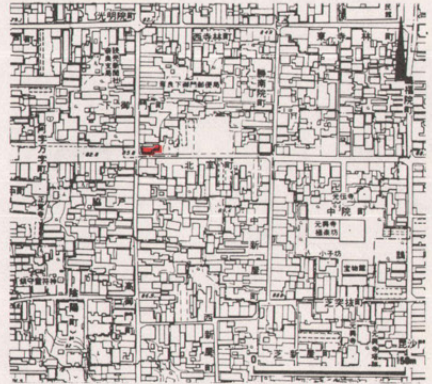
0 2m

発掘区北壁堆積土層・検出遺構図 1/80

6 元興寺旧境内第5次発掘調査

1 はじめに

この調査は、都市計画道路杉ケ町・高畑線の建設に伴う発掘調査である。杉ケ町・高畑線は奈良の旧市街地を横断する計画で逐時工事が進められている。発掘調査は、昭和56年度以来、用地買収を終え家屋などの取り壊しが完了した地点ごとに実施してきているが、基本的にこの工事が既設道路の拡幅工事であることと、用地買収が既存の住宅など1軒ごとに行なわれ、かつ拡幅部分のみが対象となるため、広範な発掘面積を確保することが難かしく、また調査日程にも制約を受けざるをえない状況にある。

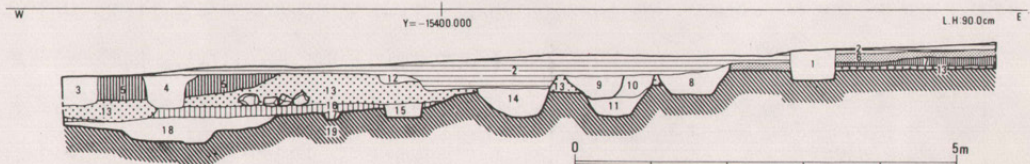


発掘区的位置 1/7500

今回の調査は奈良市北室町15番地の2・16番地の2、下御門町43番地の2を対象に行った。平城京の条坊復原では元興寺の旧境内、あるいは東六坊大路にあたとされており、とりわけ元興寺の西面中門の一部にかかる可能性のある地点であった。調査期間は昭和61年3月12日から同年3月28日まで、発掘面積は約65㎡である。

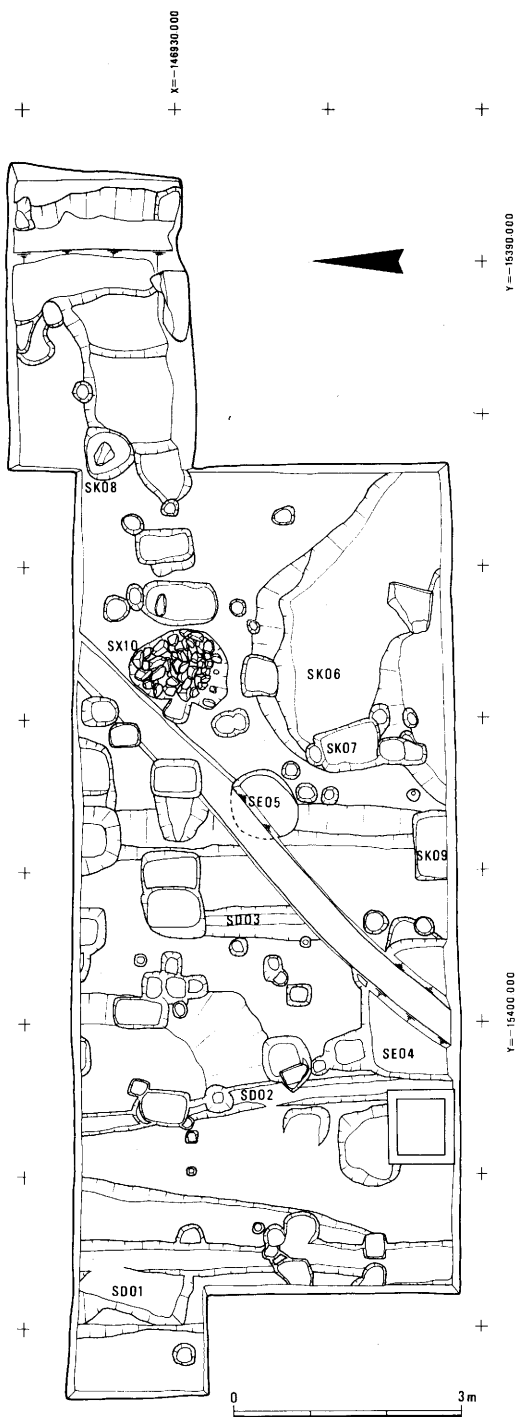
II 検出遺構

発掘区内は近年の整地、あるいは暗渠や井戸の掘形で攪乱を受けている部分が多く、地山である礫まじりの黄褐色土層上面まで手掘りによりいっきにさげて遺構検出を行った。基本的な層序は以下のとおりである。まず、発掘区内の全面にコンクリート片などがまざった近年の整地土が広がっている。つづいて黄灰色砂質土、黒緑色砂質土が堆積し、発掘区東半では地山である礫まじりの黄褐色土層に達する。西半ではさらに一層茶色砂質土層をへて地山に至る。地山は、わずかな段差をもちながら東から西へ下がっている。大半の遺構は黒緑色砂質土層から掘り込まれて



- | | | | |
|--------------|-----------|-----------|---------------|
| 1. 水道管掘形 | 6. 暗茶色砂質土 | 11. 黄褐色土 | 16. 茶色砂質土 |
| 2. 礫・ガラ混り整地土 | 7. 焼土層 | 12. 排水管掘形 | 17. 黄褐色砂質土 |
| 3. 黄色砂質土 | 8. 黒色粘土 | 13. 黒色砂質土 | 18. 礫まじりの暗茶色土 |
| 4. 暗渠掘形 | 9. 黒色粘土 | 14. 黒色粘土 | 19. 礫まじりの黄褐色土 |
| 5. 黄灰色砂質土 | 10. 黒色砂質土 | 15. 黒色粘土 | |

発掘区北壁土層図 (1/100)



遺構平面図 1/100

いるが、地山である礫まじりの黄褐色土層に掘り込まれたものもある。

検出した遺構は柱穴、溝、井戸、土壇である。

柱穴は径20～30cm程度、検出面からの深さは残りのよいもので約30cm、浅いものでは7～8cmほどである。いずれも埋土は黒色粘質土で柱痕跡は不明。発掘区が狭いため建物としてはまとまらない。他に柱穴かとも考えられる一辺40～70cm程度の平面隅丸長方形の掘形をもつ土壇がいくつかある。検出面からの深さは30～40cmほどで、四辺の壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底も平である。

SD 01 発掘区西端で検出した素掘りの南北溝。幅約1.2m、検出面からの深さは10～20cm。東肩にそって幅30～40cmほどの一段深い部分がある。埋土には奈良時代の瓦片とともに若干の瓦器碗小片が含まれるが、層序の検討から溝の掘削は中世以前に遡る可能性がある。

SD 02 幅30～35cm、検出面からの深さ6～14cmの南北素掘り溝。国土方眼方位に対して北でわずかに西へふれている。

SD 03 幅30～45cm、深さ6cmほどの南北素掘り溝。削平が著しく一部が残るのみである。

SE 04 一辺1.8mほどの平面隅丸方形掘形をもつ井戸。検出面からの深さは1.93m以上。石組や木製井戸側の痕跡はない。掘形の一部が袋状に崩壊しており、井戸底まで完掘することができなかった。埋土からは15C前半頃の土器類が出土した。

SE 05 径0.85mほどの平面円形掘形をもつ井戸。検出面からの深さは2.06m以上。石組や木製井戸側の痕跡はない。掘形の上を現在使用されている水道管が通っており、これ以上の

発掘は困難であった。埋土からは、15C頃の土器とともに北宋銭のみ計7点が出土している。

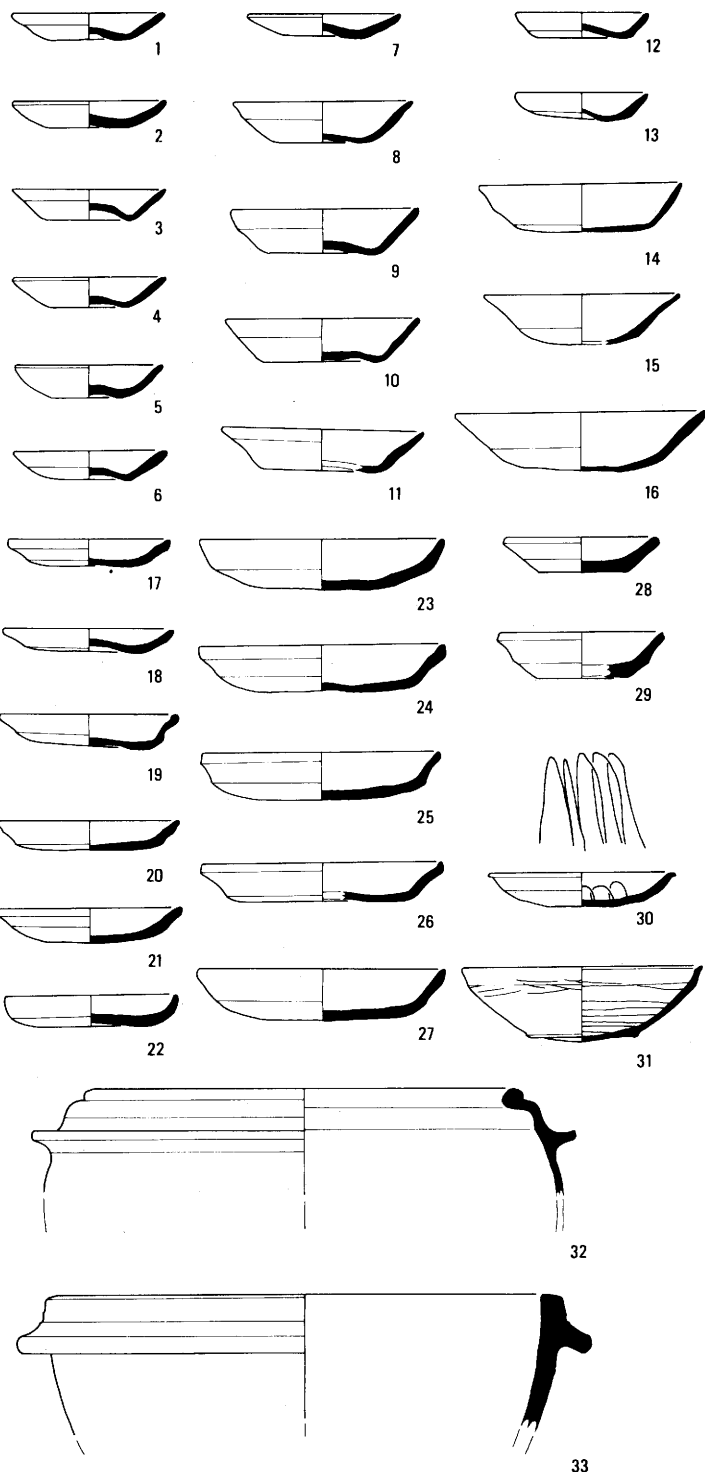
SK 06 発掘区南東隅で検出した不整形な土壇。発掘区外へ続いたため全体の規模は不明。検出面からの深さは最も深い部分で約0.56m。埋土には奈良時代の瓦片とともに若干の瓦器碗小片が含まれる。

SK 07 東西0.6m、南北0.86m、深さ0.4mの土壇。内部には焼土が入っていた。切り合い関係からSK06より新しいことがわかる。

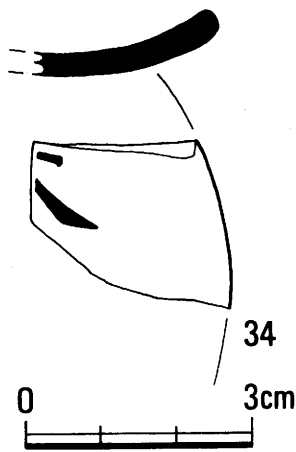
SK 08 径0.6m、検出面からの深さ0.47mの土壇。底には幅0.25m、長さ0.3mの偏平な石が据えられる。埋土からは15C後半頃の土器が出土した。掘形の形態から柱穴かとも考えられるが、発掘区内にはこれと組み合う柱穴はない。

SK 09 東西0.9m、検出面からの深さ0.48mの土壇。発掘区南壁にかかっており全体の規模は不明。

SK 10 長径1.3m、短径1.0mほどの平面長円形土壇。内部には人頭大から拳大の礫がつまる。



SE 04・SK 08 出土土器 1/4



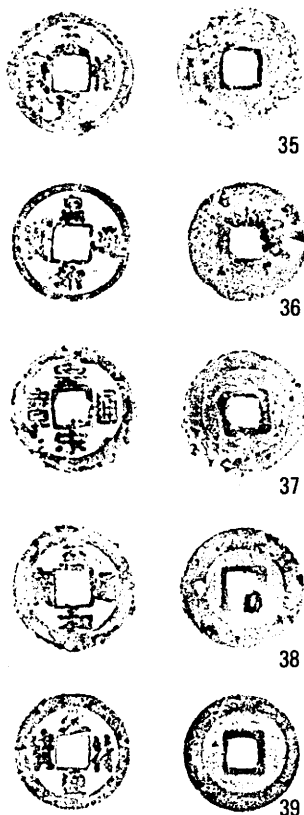
SE04出土墨書土器 1/1

Ⅲ 出土遺物

奈良時代から近年に至るまでの多量の遺物が出土した。大半が土器類であり、他に瓦類、金属製品、貝殻などの自然遺物がある。以下、比較的まとまりのよいSE04、SK08出土土器とSE05出土銭貨を報告する。

SK 08 出土土器 (1~16) 土師器皿と瀬戸窯陶器折縁深皿の小片がある。土師器皿にはいわゆる赤色系のもの(1~11)と白色系のもの(12~16)がある。赤色系の皿は口径8cm前後、器高1.6cm前後の小型のもの、口径10cm前後、器高2.2cm前後の大型のものに分けることができる。いずれも底部は上げ底で、口縁部外面上端及び、内面にはよこなでの痕跡が残る。白色系の皿は口径7cm、器高1.2cm前後の小型のもの、口径10.5cm前後、器高2.3cmの中型のもの、口径13.4cm、器高3cmの大型のものに分けることができる。小型のものは上げ底であるが、中・大型のものは調整を行わずに丸味をおびた底部をもつ。15C後半の製品であろう。

SE 04 出土土器 (17~33) 土師器皿、土師器羽釜、瓦器鉢・皿、灰釉系陶器皿、焼締陶器片、東播系須恵器片、中国製白磁合子蓋片がある。土師器皿(17~27)は口径9.0cm前後、器高1.8cm前後の小型のもの、口径13cm前後、器高2.6cm前後の大型のものに分けることができる。いずれも口縁部によこなでの痕跡を残し、底部は無調整である。小型のものは上げ底ぎみ。色調は乳黄色から赤褐色を呈する。灰釉陶器皿が2点(28・29)ある。いずれも底部は回転糸切りで切り離され、口縁部に淡緑色の釉がかかる。29は底部内面に赤色顔料が付着している。30は瓦器皿。口縁部はよこなで調整し、底部外面は無調整である。底部内面にジグザグ状のみがきを施す。31は瓦器碗。口縁部内側に一条の沈線をめぐらせ、底部には断面三角形の低い高台をつける。外面上半と内面に粗いみがきを施す。土師器羽釜(32・33)は口縁部を外に折り返し肥厚させるものと、まっすぐに立ち上がらせるものがある。13C後半の製品かと考えられる。



SE 05 出土銭貨 2/3

墨書土器 SE04から墨書土器1点(34)が出土した。土師器皿の底部外面に墨痕が残るが、左半を欠くため判読はできない。

銭貨 SE05から7点が出土した。いずれも北宋銭であり、天禧通寶(35 1018年初鑄)

1点、皇宋通寶（36・37 1039年初鑄）4点、至和通寶（38 1054年初鑄）1点、元符通寶（39 1054年初鑄）1点がある。

IV まとめ

以上の遺構はその出土遺物をみても直接元興寺にかかわるものとは考えにくく、当初想定した元興寺西面中門の遺構も発掘区内では検出できなかった。溝、井戸、土壇、柱穴いずれも元興寺の境内が町屋に浸蝕されていく過程で構築されたものだと考えられる。出土遺物をみると、奈良時代の瓦片、土器片が若干あるものの平安時代の遺物はほとんどなく、大半を鎌倉時代以降の土器、あるいは近世以降の瓦片が占める。調査地界隈の町屋の成立時期とその後の変遷を反映しているのであろうか。

最後に、検出した溝SD01の掘削の時期が奈良時代まで遡る可能性をも考えて、平城京の条坊遺構との位置的な関係を検討しておこう。まず、朱雀門心とSD01心との距離は国土方眼方位で3184.75mある。これをふれ15'41"で修正すると実長は3180.453mとなる。大安寺伽藍中軸線と朱雀門心との実長をもとに1大尺の実長を求めると0.355307mとなるから、さきの3180.453mは8951.28大尺に換算できる。そして、朱雀門心から東四坊大路心までは1坊あたり1500大尺の計画で造営されていると考えられるから、 $8951.28大尺 - 1500大尺 \times 4（坊） = 2951.28大尺$ が東四坊大路心からSD01までの距離となる。東四坊大路以東も1500大尺の計画寸法で造営されているとすると、東四坊大路から元興寺の主要伽藍が西接する東六坊大路までは二坊あるのだからその計画寸法は $1500大尺 \times 2 = 3000大尺$ となり、SD01の位置は京の条坊道路遺構の位置としては不適當なものとなる。しかし、遺存地割からみたSD01の位置は条坊道路の側溝だと考えてもおかしくはない位置にあり、東四坊大路以東の1坊あたりの計画寸法が1500大尺より短くなっていると考えざるをえない。そこで、本報告ではSD01の位置を次のように考えておく。

外京の東西方向の地割は東六坊坊間路までは大路心心間1460大尺の計画で設定されており、東六坊坊間路以東は大路心心間1500大尺の計画にもどるものの、実際には東六坊大路心を条坊計画線より20大尺西へずらして設定することにより、みかけの上では東六坊坊間路と東六坊大路の間も大路心心間計画寸法1460大尺で設定したのと同寸法になると考えてみる。^{注)}この考えにSD01の位置をあてはめると以下ようになる。東四坊大路心からみかけの東六坊大路心の計画寸法は $1460大尺 \times 2（坊） = 2920大尺$ となり、東六坊大路の幅員を60大尺だと想定すれば、その東側溝心は東四坊大路心から2950大尺の位置にあることになる。さきに求めた東四坊大路心からSD01心までの寸法は2951.28大尺であったから、両者はごく近似した値であることがわかり、このことから、SD01は上記の外京の条坊地割寸法での東六坊大路東側溝である可能性が考えられよう。ただ、現在まで外京の条坊地割の詳細は明らかでない部分が多く、以上の点も可能性として指摘しておくにとどめたい。

（西崎卓哉）

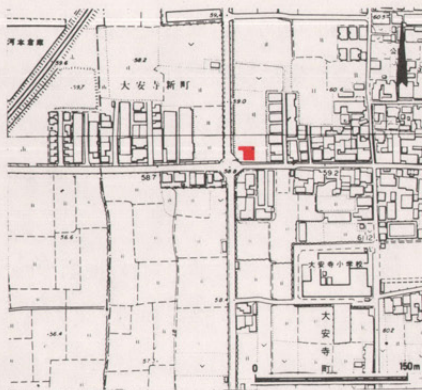
注) 西崎卓哉「平城京外京の地割計画寸法」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1985』（奈良市教育委員会1986）

7. 平城京左京六条三坊十五坪の調査

I はじめに

本調査は、奈良市公共下水道大安寺幹線管渠築造工事の作業基地建設に伴う事前の発掘調査である。

調査地は、奈良市大安寺町81番地の1（土地所有者増田文男氏）の水田である。届出の工事概要は南側を東西に通る県道京終停車場薬師寺線下に下水道本管を築造するための、シールド発進立杭及び工事基地をこの水田に設けるものである。立杭の位置は平城京左京六条三坊十五坪の南西隅に相当し、六条条間路北側溝と十・十五坪境小路東側溝が推定されるため、この部分



発掘区の位置 1/7500

に発掘区を設定した。発掘区は東西10m、南北12mで、東側溝を確認するため発掘区北西隅を西へ約2m幅で6m拡張し、発掘面積は140㎡となった。調査期間は、当初21日間を予定していたが、梅雨の時期にあたったため大幅に延び昭和60年6月20日から7月24日までとなった。

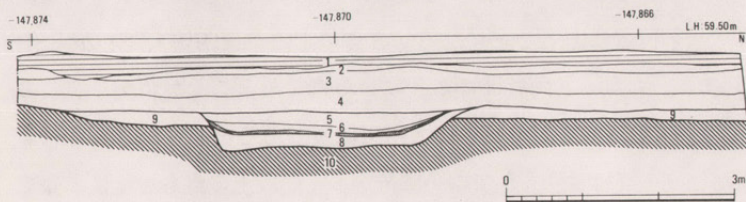
II 検出遺構

発掘区の土層堆積状態は、地表（標高59.2m）から黒灰色土（耕土）、淡黒灰色砂土（床土）、暗茶褐色土、黄灰色となり、地表下0.55～0.8mで明黄灰色粘土の地山となる。地山面は東から西へ向ってゆるやかに傾斜しておりその比高差は0.25mである。検出した遺構には、掘立柱建物、柱列、土塙、溝など奈良時代から平安時代末にかけてのものがある。奈良時代及び平安時代中期の遺構は地山上面で、平安時代末の遺構は黄灰色土上面で検出した。

奈良時代の遺構 掘立柱建物5棟、土塙4がある。

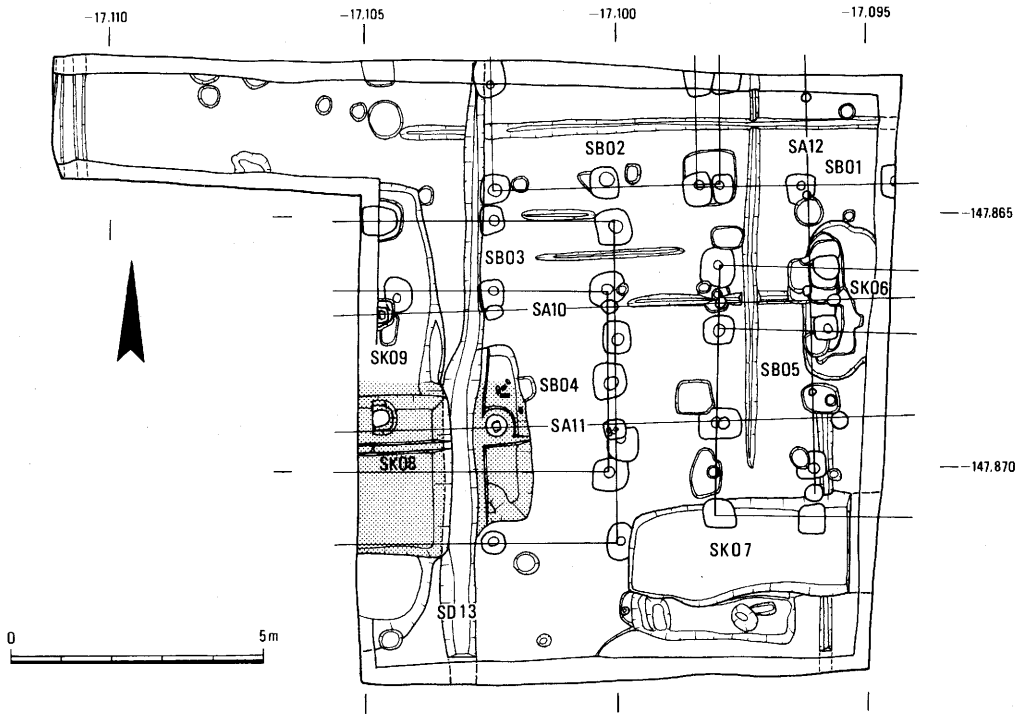
S B01 北西隅で検出した東西2間以上、南北1間以上の建物。柱掘形は一辺0.5m前後の隅丸方形で径約20cmの柱痕跡が残る。柱間寸法は南北2.15m、東西1.8m等間である。

S B02 S B01の西側にある東西2間、南北1間以上の建物で南北棟と考えられる。柱掘形は



1. 黒灰色土（耕土）
2. 淡黒灰色砂土
3. 暗茶褐色土
4. 黄灰色土
5. 茶褐色土（S K08埋土）
6. 暗灰色砂土（S K08埋土）
7. 黒灰色粘質土（S K08埋土）
8. 暗灰色粘土（S K08埋土）
9. 茶灰色粘質土（S K09埋土）
10. 明黄灰色粘土（地山）

発掘区西壁土層図 1/50



遺構平面図 1/150

一辺0.5m前後の隅丸方形で、径約30cmの柱痕跡が残る。柱間寸法は東西約2.25m、南北2.1mである。重複関係からみてSB01より新しいことがわかる。

SB03 SB02の南側にある東西2間以上、南北3間の建物。柱掘形は一辺約0.5~0.7mの隅丸方形で、径約20cmの柱痕跡が残る。柱間寸法は東西2.4m、南北2.1mの等間である。

SB04 SB03とほぼ同位置にある東西2間以上、南北2間の建物で東西棟と考えられる。柱掘形は一辺0.5~0.7m前後の隅丸方形で、径約20cmの柱痕跡が残る。北柱列西端の柱痕跡には柱根が遺存していた。柱間寸法は東西2.1m、南北1.8mの等間である。

SB05 SB04の東側にある東西1間以上、南北2間の建物で北廂がつく東西棟と考えられる。柱掘形は一辺0.5~0.7mの隅丸長方形で、径約20cmの柱痕跡が残る。柱間寸法は東西2.1m、南北1.8mの等間、廂の出は1.2mである。建物の主軸は、国土方眼方位東に対してやや南振する。

SK06 SB05の北東にある平面が不整形な浅い土壌で東西1.6m、南北3.2m、深さ5cmを測る。埋土からは奈良時代の土器片が若干出土した。重複関係からみてSB05より新しい。

SK07 SB05の南側にある平面長方形の東西に細長い土壌で、東西5m以上、南北2m、深さ0.4mを測る。埋土からは奈良時代の土器片が若干出土した。重複関係からSB05より新しい。

SK08 SB04の南側にある平面方形の土壌で発掘区西側へ延びる。東西3.5m以上、南北3.5m、深さ0.5mを測る。土壌の底は平面方形の平坦で東西1.4m以上、南北2.6mを測る。

土壌の東部は壇状になり、底は平坦で深さ0.2mを測る。土壌の埋土は大きく2層に大別できる。上層は遺構検出面から茶褐色土、暗灰色砂土、黒灰色粘質土（炭化物層）が30cmの厚さであり、この上層からは奈良時代中葉以降の土器が多量に出土した。下層は約20cmの厚さで暗灰色粘土である。この層からは二彩陶器など若干の遺物が出土した。上層の遺物はこの土壌が浅く埋ったのち、その窪地に投棄されたものであろう。重複関係からSB03・04より新しいことがわかる。

SK09 発掘区の西辺にある南北に細長い浅い土壌で、東岸を検出した。東西1.8m以上、南北9.2m、深さ16cmを測る。埋土から三彩陶器など奈良時代の土器が若干出土した。重複関係からSB04より新しく、SK08より古いことがわかる。

平安時代の遺構 掘立柱列3条、溝1条がある。

SA10 発掘区中央にある4間以上の東西柱列で発掘区外へ延びる。柱掘形は径約30cmの円形で、その底に平らな自然石が据えられたものもある。柱間寸法は2.3mである。重複関係からSB04・SK06・09より新しいことがわかる。

SA11 SA10の南側にある4間以上の東西柱列である。SA10と2mの間隔をあけて並行し、南北に柱筋を揃える。柱掘形及び柱間寸法はSA10と同様である。柱掘形から土師器皿片、緑釉陶器片など10世紀後半の遺物が出土している。重複関係からSB04・05、SK09より新しいことがわかる。SA10と同時期のものであろう。

SA12 発掘区東辺にある4間以上の南北柱列で発掘区北へ延びる。柱掘形は径約20cmと小さい。柱間寸法は2.0m等間である。埋土から12世紀初頭の瓦器椀片が出土した。重複関係からSB01・05、SK07より新しいことがわかる。

SD13 発掘区西辺にある南北の素掘り溝である。幅0.3~0.6m、深さ8cmと浅い溝で12.5m分検出した。埋土から12世紀初頭の瓦器椀片が出土しており、SA12と同時期のものである。重複関係からSB02・03・04、SK08より新しいことがわかる。

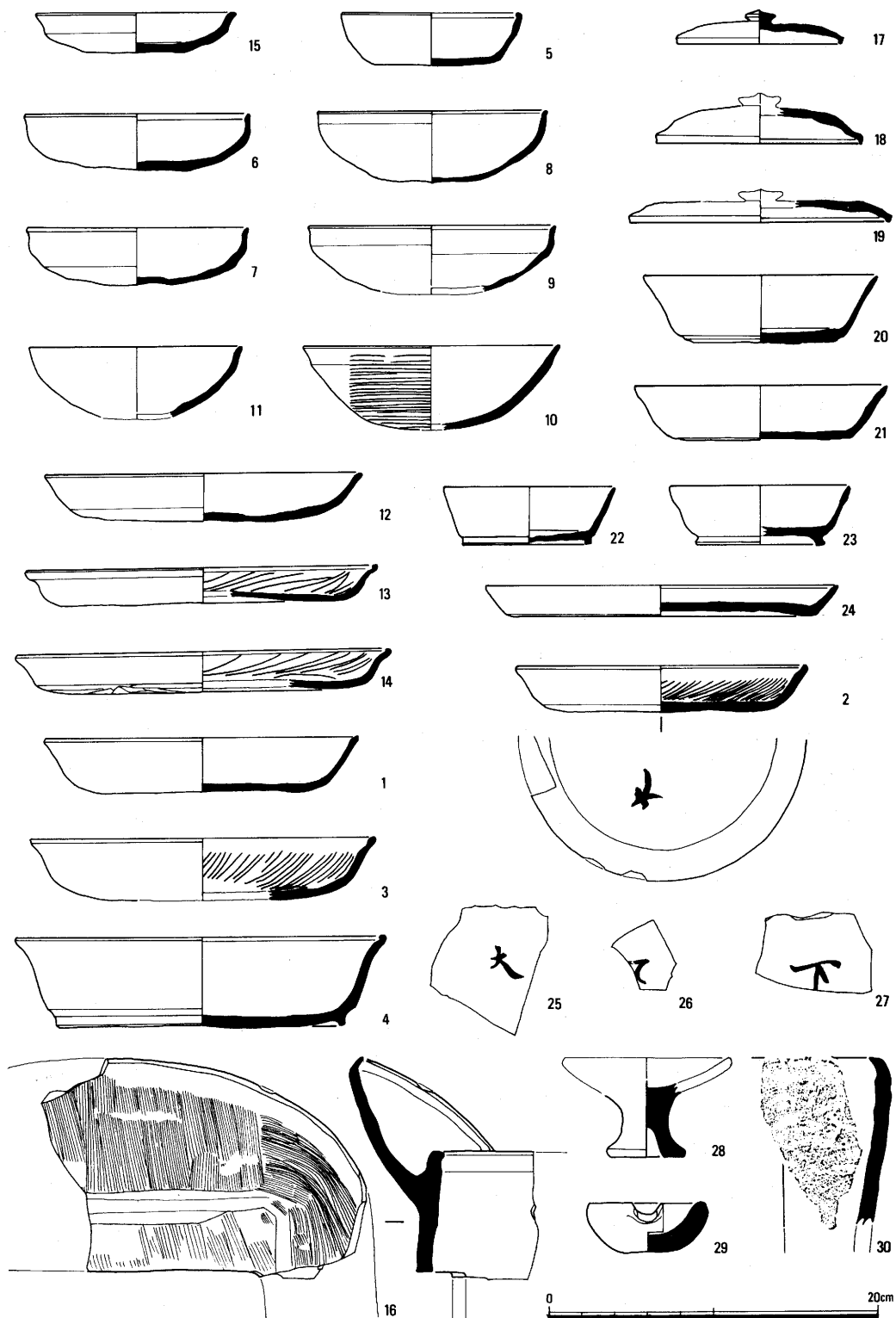
II 出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、土師器、須恵器、黒色土器、施釉陶器、瓦器がある。以下、軒瓦、SK08出土土器、施釉陶器について述べることにする。

軒瓦 軒丸瓦1点、軒平瓦1点がある。軒丸瓦は外区の一部が残るもので線鋸歯文と珠文があり、平城宮6301型式と考えられる。SB05出土。軒平瓦は均整唐草文軒平瓦で瓦当面の中央上部が残る。平城宮6716型式と考えられる。SK08上層出土。

SK08出土土器 土師器（1~16）、須恵器（17~24）、黒色土器、墨書土器（2・25~27）、小型模造土器（28）、とりべ（29）、ふいごの羽口、製塩土器（30）、二彩壺（31）がある。二彩壺以外の遺物は、SK08の上層から出土している。

土師器 杯A（1~3）、杯B（4）、椀（5）、椀C（6~9）、椀A（10・11）、皿A（12~14）、皿C（15）、竈（16）、甕B、高杯がある。杯Aは外傾する口縁部をもつ平底の土器で、



S K 08 出土土器 1/4

1は表面が磨滅しているが、口縁部外面の一部にへら磨きの痕跡が残る。2・3は底部外面に凸凹を残し、へら磨きしないa₀手法で内面に斜放射状暗文と螺旋状暗文を施す。杯B（4）は底部と口縁部の外面をへら削りした後、へら磨きしないC₀手法を施す。椀（5）は内彎する口縁部をもつ平底の土器で、口縁端部は平担で内側に肥厚する。内外面とも磨滅のため調整は不明。椀Cは丸底に近い底部と内彎して立つ口縁部からなる。椀Aは丸底ぎみの底部と内彎しながら傾めに開く口縁部からなる。10はa₀手法、Bは底部と口縁部の外面をへら削りした後、へら磨きするC₃手法を施す。皿Aは広く平らな底部と斜めひ開く短い口縁部からなる。12は調整不明。13・14は底部をへら削りした後、へら磨きしないb₀手法で、内面に斜放射状暗文、螺旋状暗文を施す。皿C（15）は底部外面に凸凹が残り、口縁部を強くよこなでするe手法を施す。竈（16）は焚口の上部和庇が残る。外面には細かいハケ目、内面にはよこなでを施す。色調は黄灰色で胴部内が炭化物付着のために黒くなっている。

須恵器 杯B蓋（17～19）、杯B（20・21）、杯B（22・23）、皿A（24）、甕、壺がある。杯B蓋は頂部外面をロクロ削りした後、口縁部はロクロナデを施す。杯Aの底部外面にはへら切りの痕跡が残る。口縁部はロクロナデを施す。

黒色土器 内面に炭素を吸着させたA類椀Aがあるがいずれも小片である。

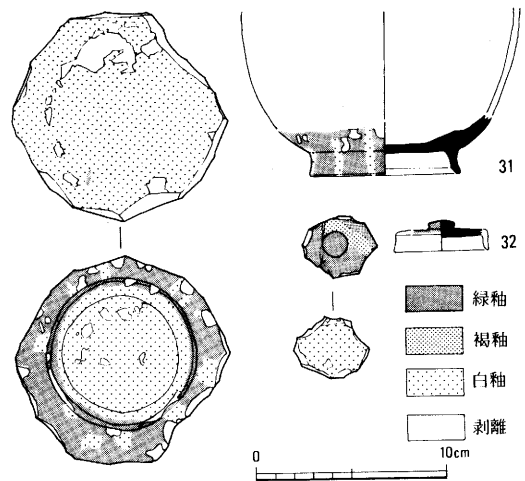
墨書土器 墨書された土器は4点ある。2・25は土師器杯の底部に「大」と墨書される。26は土師器杯の底部に墨書されるが判読できない。27は須恵器杯Aの底部外面に「下」と墨書される。

小型模造土器 27は高杯の脚部である。手づくねのもので、脚柱部は面取せずに裾部へ広がる。

鑄造関係遺物 ふいごの羽口ととりべ（29）がある。羽口はいずれも小片である。29は厚手の小型のとりべで口縁部に片口をもつ。口縁部外面と内面は火熱で黒色に変色し熔解している。

製塩土器 土器片が多く出土しているが、いずれも細片である。30はほぼ直立する口縁部に、内側へ尖がる口縁端部がつく。外面は粗いなで、内面には布目圧痕が残る。赤褐色か暗褐色を呈し、胎土中に多量の砂粒を含む。他に、内面に布目圧痕がないものもある。

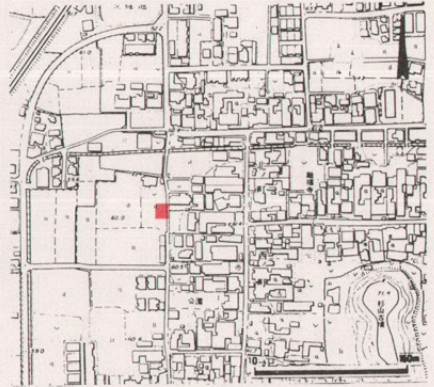
施釉陶器 二彩壺（31）、三彩壺蓋（32）、緑釉皿片がある。30は高台がつく壺の底部で、外面には緑釉、白釉が、内面には白釉を施す。S K 08下層出土。32は扁平なつまみがつくもので、外面には緑釉と褐釉が、内面には白釉を施す。S K 09出土。共に胎土は緻密で、色調は灰白色。（篠原豊一）



施釉陶器 1/4

8. 平城京左京六条三坊十六坪の調査 第87次

I はじめに 本調査は、奈良市大安寺町98番地の5における市川美喜雄氏届出の農業用倉庫建設に伴う事前発掘調査、並びに、奈良市大安寺町98番地の1における市川嘉雄氏届出の共同住宅建設に伴う事前発掘調査として実施したものである。調査地が隣接しているため調査は同時に行ない、発掘区内畦畔によって両者を区別した。当該地は、平城京条坊復元では、左京六条三坊十六坊に相当し、東三坊大路、及びその西側溝の存在が想定された。



発掘区の位置 1/7500

II 検出遺構 発掘区における基本的な土層堆積状態は、耕土、床土の下、約20cmにわたり遺物包含層である暗茶灰色砂が堆積し、地表下約45cmで地山である黄色粘土に至る。発掘区東側では、地山は黄褐色砂に変わっている。遺構は原則として地山上面において検出したが、一部に淡茶褐色砂の整地土が残っており、この面から掘り込むものも見られた。

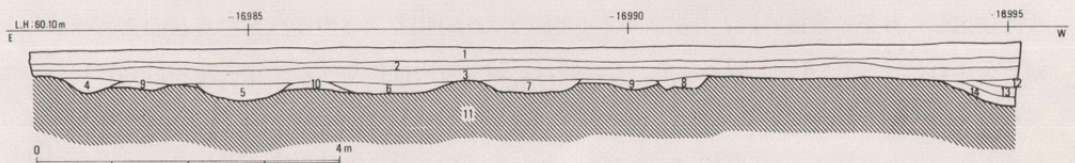
検出した主な遺構は、溝5条、土壇4である。

SD 01 発掘区東端で検出した幅0.8m、検出面からの深さ0.2mを測る南北方向の素掘り溝である。溝心が、国土方眼位に対し北で東に振れる。

SD 02 SD01西側で検出した幅約1.4m、検出面からの深さ0.2mを測る西北方向の素掘り溝である。溝心が、国土方眼位に対し北で東に振れる。

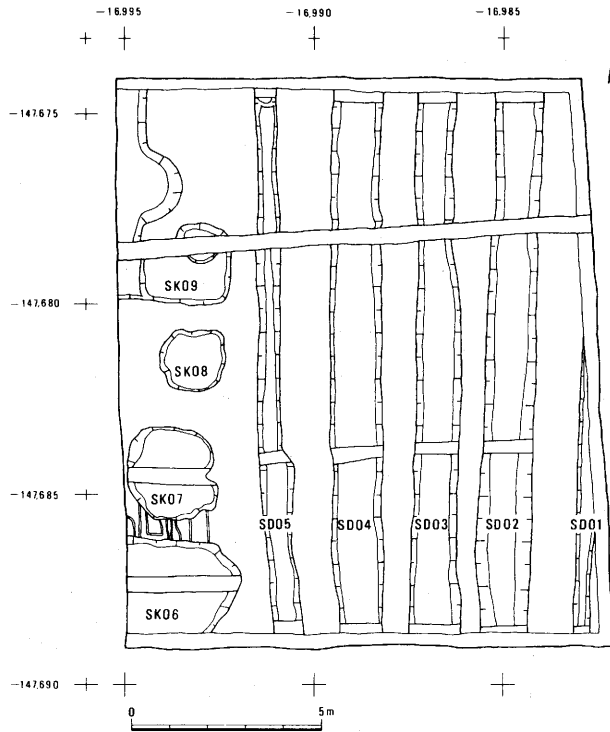
SD 03 SD02西側で検出した幅約1.3m、検出面からの深さ0.3mを測る南北方向の素掘り溝である。溝心は、国土方眼位にほぼ一致する。

SD 04 発掘区中央で検出した幅1.5m、検出面からの深さ0.3mを測る南北方向の素掘り溝である。溝心は、国土方眼位にほぼ一致する。



- | | | | |
|--------------------|--------------------|--------------------|-----------|
| 1. 耕土 | 5. 暗茶褐色粘砂 (SD02埋土) | 9. 淡茶褐色砂 | 13. 淡茶褐色砂 |
| 2. 淡茶灰色砂質土 | 6. 暗茶褐色粘砂 (SD03埋土) | 10. 黄色粘土 (砂混ざる) | 14. 淡灰褐色砂 |
| 3. 暗茶灰色砂 | 7. 暗茶褐色粘砂 (SD04埋土) | 11. 黄色粘土 (地山) | |
| 4. 暗茶褐色粘砂 (SD01埋土) | 8. 淡茶褐色粘砂 (SD05埋土) | 12. 暗茶褐色砂 (灰色がかかる) | |

南壁堆積土層図 1/100



検出遺構平面図 1/200

SD 05 SD 04の西側約1.5mを隔てて検出した幅約0.5m、検出面からの深さ約0.2m測る南北方向の素掘り溝である。溝心は、国土方眼位に一致。

SK 06 発掘区南西端で検出した不整形な土壌。発掘区外へ続く。東西3m分、南北2.5m分を検出。検出面からの深さ約0.4mを測る。

SK 07 SK 06北側で検出した長辺2.5m、短辺2mの隅丸長方形の土壌。検出面からの深さ0.3mを測る。

SK 08 SK 07北側で検出した一辺約1.5mの隅丸方形の土壌。検出面からの深さ0.2m。

SK 09 SK08北側で検出した隅丸長方形の土壌。発掘区外へ続く。東西3m分、南北約2mを検出。土壌西側は、深さ約0.1mと浅く、テラス状となり、東側は、一段深く掘り込まれ、最深部は、検出面からの深さ約0.5mを測る。

いずれの遺構からも出土遺物は少なく、わずかに瓦片・土器小片があるのみである。

Ⅲ まとめ 今回の調査は、東三坊大路及び西側溝の確認を目的として実施し、近接した5条の素掘り溝を検出した。いずれの埋土からも少量の遺物片が出土したのみで、時期は不明である。

平城京の条坊は、国土方眼位に対して北で西に振れを持つことは、従来の調査により知られている。昭和58年度の左京六条三坊十三坪の調査で、東三坊大路及びその西側溝を確認しており、^{注1)}今回検出した5条の素掘り溝と比較すると、SD05のみが北で西への振れを示し、国土方眼位に対する振れは、 $N 0^{\circ} 6' 44'' W$ となる。この値は、国土方眼位に対する朱雀大路の振れに比し、かなり小さい値を示している。また、昭和49年度の左京一条三坊の調査では、東三坊大路東側溝が明らかにされている。^{注2)}今回のSD05を利用した西側溝の振れの数値を用い、側溝心々間の距離を想定すると30尺となり、従来想定されている80尺、もしくは50尺という数値と大きく異なる。

これらのことから、今回の調査では、SD05の西側溝への比定については、その可能性を指摘するにとどめ、今後の調査成果の蓄積を待ちたい。(立石堅志)

注1)奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和58年度 1984 注2)奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告VI』1974

9. 平城京左京七条二坊六坪（第93次）の調査

I はじめに

本調査は、奈良市八条町 792の1番地他において実施した奈良市同和対策事業の一環である八条運動場の駐車場建設に伴う事前発掘調査である。調査地は、平城京条坊復元では、平城京左京八条二坊六坪に相当する。昭和58年度には、当教育委員会が、六坪と隣接する十一坪において八条運動場建設に伴う事前調査を実施したが、付近一帯の字名（蓮池）が示すとおり、沼池が続いており遺構を検出するにはいたっていない。今回の調査地も



発掘区の位置 1/7500

あるいはその一部分かとも考えられたが、東西34.0m、南北7.5m（255㎡）の発掘区を設定し行なうこととした。調査期間は、昭和60年8月8日～9月1日までである。

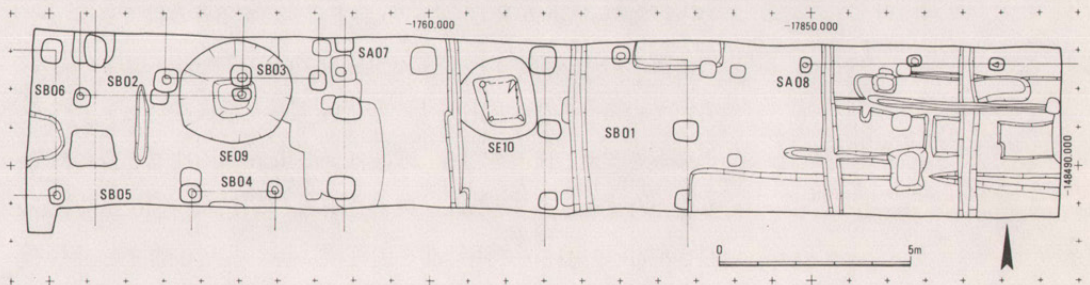
II 検出遺構

調査の結果、十一坪で検出された沼池は今回の調査地までには及んでおらず、奈良時代の掘立柱6棟、柱列2条、井戸2基、土壇などを検出することができた。

発掘区内の基本的な土層堆積状態は、耕土、床土の下、黄褐色粘質土、暗灰色粘土、淡青灰色粘土、茶灰色砂質土、灰色砂質土、奈良時代の遺物を包含する赤褐色土と続き、耕土から約1.7mで暗茶灰色土の地山となる。奈良時代の遺構は、地山上面で検出した。

SB01 発掘区中央部で検出した桁行2間（4.8m）以上、梁行2間（4.8m）の南北棟建物で、南側は発掘区外へのびる。柱間は、桁行・梁行ともに2.4m等間である。側柱列の柱掘形は、一辺約0.7mを測るのに対して、妻柱の柱掘形は一辺約0.4mと小さい。主軸は、国土方眼方位に一致する。

SB02 発掘区西半部で検出した桁行1間（2.1m）以上、梁行2間（4.2m）の南北棟建物



検出遺構平面図

で、北側は発掘区外へのびる。柱間は、梁行2.1m等間である。重複関係から井戸SE09よりも新しいことがわかる。主軸は、国土方眼方位と一致する。

S B03 S B02の北側で検出した桁行1間(1.6m)以上、梁行2間(2.0m)の南北棟建物で、北側は発掘区外へのびる。柱間は、梁行2.0m等間である。重複関係からS B02よりも新しいことがわかる。主軸は、国土方眼方位と一致する。

S B04 S B02の南側で検出した梁行1間(2.2m)の建物で、桁行は南側へのびると考えられる。主軸は、国土方眼方位と一致する。

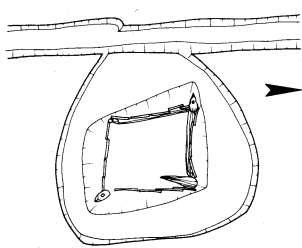
S B05 発掘区西西部で検出した1間(2.7m)以上の南北の柱列で、北・南・西は発掘区外へのびる。柱掘形は、一辺1.1mを測る立派なもので、規模から考えて建物の一部に相当する柱穴と考えられる。北側の柱穴には柱の抜き取り痕跡がみられる。主軸は、国土方眼方位と一致する。

S B06 S B05の西側で検出した桁行1間以上、梁行2間(3.7m)の東西棟建物で、西側は発掘区外へのびる。妻柱の柱穴は、後世の土壌により壊されていた。主軸は国土方眼方位と一致。

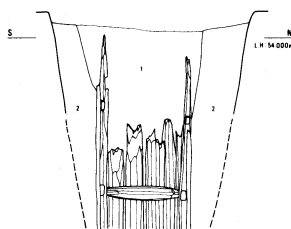
S A07 S B03の東側で検出した南北柱列。2間分(3.8m)を検出し、北と南は発掘区外へのびる。柱間は、北から1.8—2.0mと不揃いである。主軸は、国土方眼方位と一致する。

S A08 発掘区北東隅で検出した東西柱列。3間分(4.9m)を検出し、東側は発掘区外へのびる。柱間は、西端から2.8—2.1mと不揃いである。西から3番目の柱穴には、約10cm前後の石が据えられていた。柱掘形は、いずれも一辺0.3mと小さい。主軸は、国土方眼方位東でわずかに南へ振れる。

SE09 S B02・03に重複して検出した井戸である。掘形は、東西3.0m、南北2.7mの平面



楕円形を呈し、検出面からの深さ2.0mを測る。井戸枠は既に抜きとられており、残存していなかった。井戸底部からは、平城宮土器Ⅲの特徴をもつ土師器・須恵器とともに、唐三彩輪花杯の破片が1点出土した。



SE09 平面・立面図

SE10 S B01の西側で検出した井戸で、掘形は、東西2.1m、南北1.9mの平面楕円形を呈す。検出面から深さ約2.5mまで掘り下げたが、湧水が著しく井戸底部まで確認することはできなかった。掘形の中央部には、内法一辺約0.8mの縦板組井戸枠が据えられている。四隅に隅柱をたて、枅をもった横棧をわたして四辺の縦板を支える構造をとる。隅柱は、径10cmの円柱で2方に枅穴が穿たれており、長さ200cm以上を測る。横棧は、径10cm前後、長さ85cmの円柱状で両端部を円錐状につくりだし隅柱を組んでいる。縦板は各辺4枚の板が使用されている。板材の寸法は、幅18~20cm、厚さ2cmを測り、長さ110cmまで確認した。井戸枠

内埋土からは、平城宮土器Vに相当する土師器・須恵器や製塩土器片、木製品斎串2点が出土した。

Ⅲ 出土遺物

出土遺物には、奈良時代の土器類、瓦類、木製品がある。大半のものがSE10から出土しており、時期的にもまとまりをもっている。SE09からは唐三彩杯の破片が出土するなど良好な資料を得ることができた。以下、SE10出土土器及びSE09出土の唐三彩についての概要を記す。

SE10出土土器 土師器には、杯A・B、皿A・C、椀A・C、高杯、盤B、壺B・小形壺、甕Aがある。

杯A(1~4) 1は口縁部外面から底部外面までを全面へら削りしたのち外面全体にへら磨きをするC₃手法で調整する。2・3は、口縁端部をe手法で調整したのちに、口縁部外面から底部外面までをへら削りするC手法で調整している。4は、表面の磨滅が著しく調整は観察できない。

杯B(11~13) 杯B I(11・13;口径約21.9cm、器高約7.3cm)、杯B II(12;口径18.6cm、器高5.4cm)がある。いずれも口縁部内外面をへら削りしたのちに、へら磨きを施すC₃手法で調整する。

皿A(8~10) 8は底部外面だけをへら削りするb₀手法、9は口縁部上端だけを横なでするe手法、10はC手法で調整している。

皿C(5~7) 手づくねでつくられた小型の皿である。e手法で調整されている。いずれも口縁部内面に、油煙状の黒色物質が付着している。灯明皿として使われた可能性が高い。

須恵器には、杯A・B、皿A・C、高杯、鉢A、壺A・B・E・G・H・L、甕A・B・Cがある。

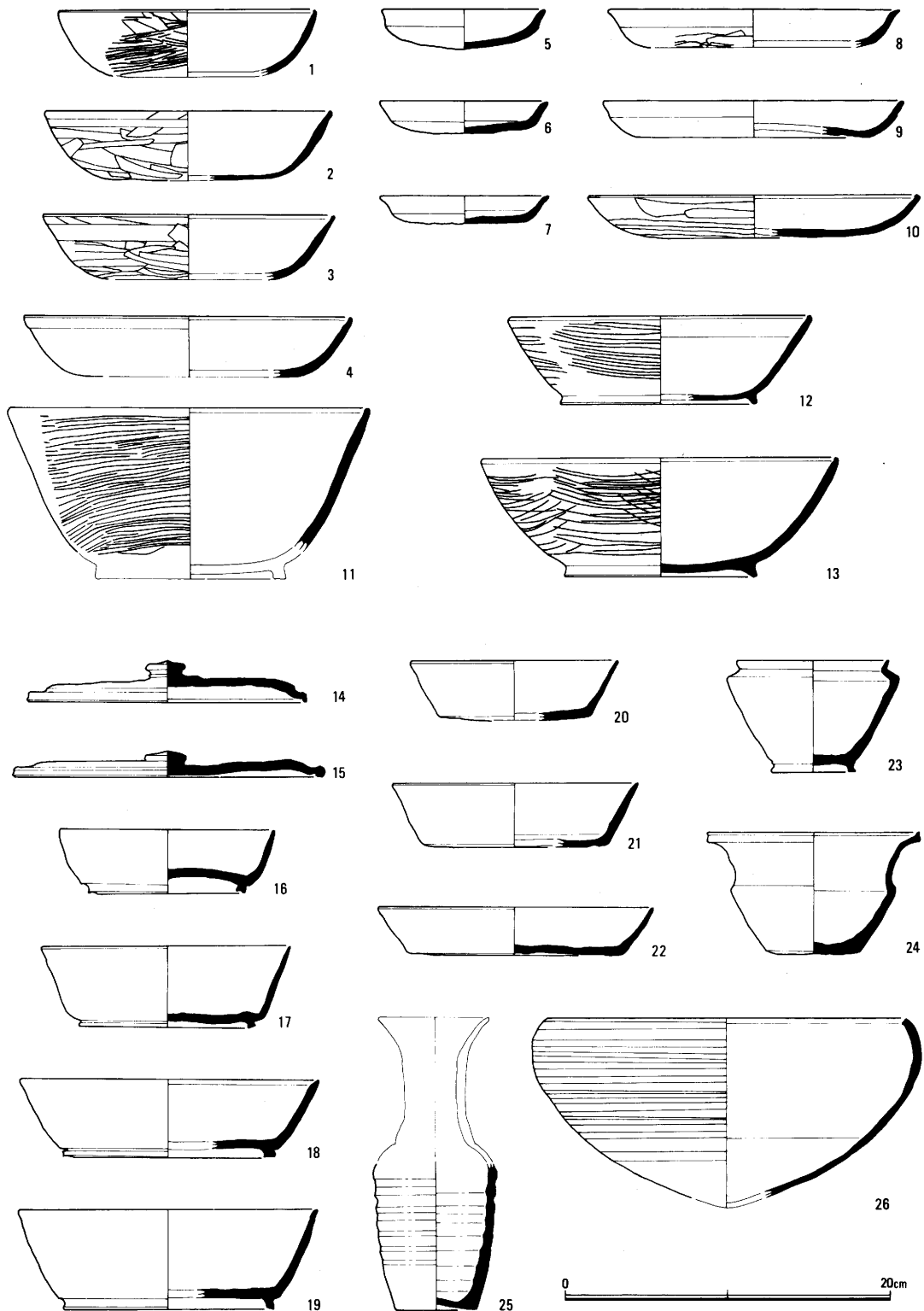
杯A(20~22) 20・22は底部外面にへら切り痕が残る。21は不定方向のナデを加えている。口縁部内外面は、いずれもロクロナデで調整している。

杯B(16~19) 大きさにより、杯B I(18・19;口径18.3cm、器高5.4cm)、杯B II(17;口径15.2cm、器高5.0cm)、杯B III(16;口径13.0cm、器高3.9cm)に分けることができる。いずれも、ロクロナデ調整をしている。

杯B蓋(14・15) 扁平な頂部と屈曲する縁部からなる。頂

土師器		個体数		比率
杯	A	9	69	46.0%
	B	3		
皿	A	24		
	C	5		
椀	A	10		
	C	10		
高杯		7		
盤	B	1		
壺	B	1	3	2.0%
小形壺		2		
甕	A	20	20	13.3%
小計		92	92	61.2%
須恵器		個体数		比率
杯	A	8	33	22.0%
	B	19		
杯蓋		(33)		
皿	A	1		
	C	1		
高杯		2		
鉢	A	2		
壺	A	4	17	16.7%
	B	1		
	E	2		
	G	1		
	H	1		
	L	2		
不明		6		
平瓶		1	1	
甕	A	4	7	
	B	2		
	C	1		
小計		58	58	38.7%
総計		150	150	100%

SE10出土土器個体数



SE 10 出土土器 1/4

部外面から縁部内外面までをロクロナデ調整する。

壺E (23) 狭い肩部に外傾する短い口縁部をつけた広口の壺である。体部外面全体をロクロナデで調整している。

壺H (24) 扁平な体部と大きく外反する口縁部からなる広口の壺である。外面全体に、おびただしいススが付着している。

壺G (25) 縦長の胴部と長い口頸部からなる壺、底部外面には回転糸切り痕が残る。

鉢A (26) いわゆる鉄鉢形である。ロクロ削りをしたのち丁寧にヘラ磨きを施している。

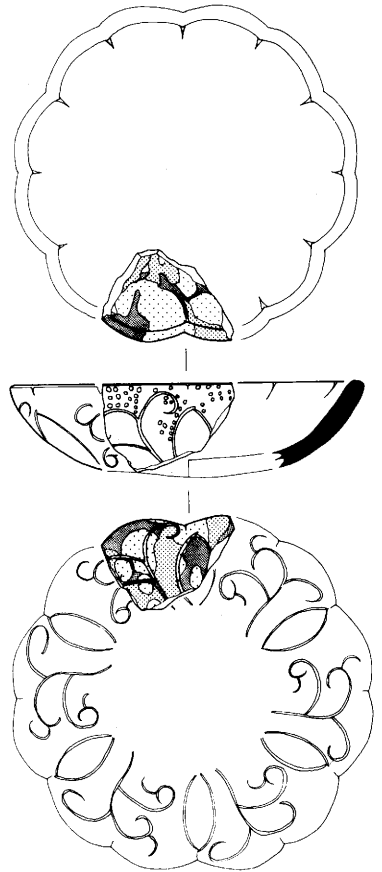
唐三彩 SE09の井戸底部から平城宮土器Ⅲに相当する土器と共に出土した。口縁部の一部分が出土しただけなので全体を復元するのは難しい。しかし、残存する口縁部の形態やたちあがりなどから、輪花形を呈する杯の一部と考えられる。口径約9.2cm、器高約2.4cm、器厚0.4cmを測り、六花からなる輪花に復元することができる。口縁部外面には型押しによる葡萄唐草及び花卉がみられる。このモチーフは、パルメットあるいは葡萄唐草を左右対称に配し、内側に花・果などを挿入するパターンを基本とした対葉文に近似している。口縁部外面の唐草の茎、花卉は緑釉、茎の分岐部、花卉の中は白釉、その他は褐釉を施している。塗釉法及び抜蠟法によるものであろう。胎土は、硬質で淡橙白色を呈している。

現在までに国内での唐三彩の出土例は、右表に示したように18例あるが、輪花杯が出土した例はなく、これが初例である。中国においても管見ではほとんどきかないが、水鳥形杯の尾に相当する部分を輪花形の杯ふうに表示しているものがある。今回出土の唐三彩破片は、あまりにも小さいため全体を復元するまでには至らないが、単なる杯ではなく、鳥形杯の一部と考えるのもあながちまちがいでないと思われる。

(奈良美穂)

注) 出土唐三彩については、京都市立芸術大学教授 佐藤雅彦氏の御教示を賜った。記して感謝いたします。

国内出土の唐三彩の一覧表は、小野木裕子「唐三彩の成立とその周辺への影響」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズⅡ (1985) に掲載されていた資料をもとに、筆者が知り得たものを書き加えて作製した。



■ 緑釉 ■ 褐釉 □ 白釉

SE 10 出土唐三彩 1/2

番号	出土地	出土品
1	柏原M遺跡 (福岡市)	輪花皿
2	十郎川遺跡 (")	器種不明
3	蔵司跡 (太宰府市)	枕片
4	観世首寺 (")	鏡片
5	市の上遺跡 (")	陶枕
6	沖の島5・7号岩陰遺跡 (宗像郡)	貼花文長頸壺
7	備後寺町廃寺 (広島県)	浄瓶片
8	大安寺旧境内 (奈良県)	陶枕
9	平坪京左京 (")	"
	二条二坊	
10	安倍寺跡 (")	鏡
11	坂田寺跡 (")	小壺片
12	法隆寺旧境内 (")	盤
13	平安京左京 (")	枕片
	八条三坊	
14	" 右京二条三坊 (")	陶枕・壺
15	" 左京八条三坊 (")	陶枕
16	" 左京七条三坊 (")	壺片
17	" 左京八条二坊 (")	器種不明
18	城山遺跡 (静岡県)	枕片
19	向台遺跡 (千葉県)	陶枕

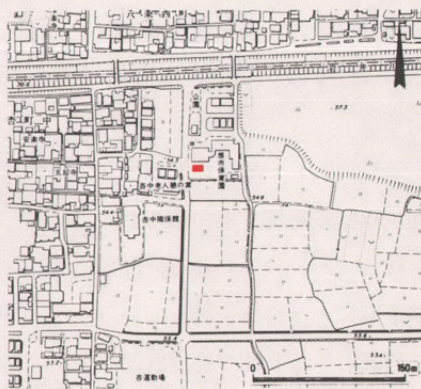
国内出土の唐三彩

10. 平城京左京八条二坊一坪の調査 第98次

I はじめに

本調査は奈良市杏町391の2番地において実施した、奈良市立辰市保育園増築工事に伴う事前発掘調査である。当該地は、平城京条坊復元では、左京八条二坊一坪に相当する。また、平安時代以降の辰市も当該地周辺に推定されている。

発掘区は、調査地中央に東西10m、南北6m（60㎡）の範囲を設定した。調査期間は、昭和60年9月26日から10月9日にかけてである。



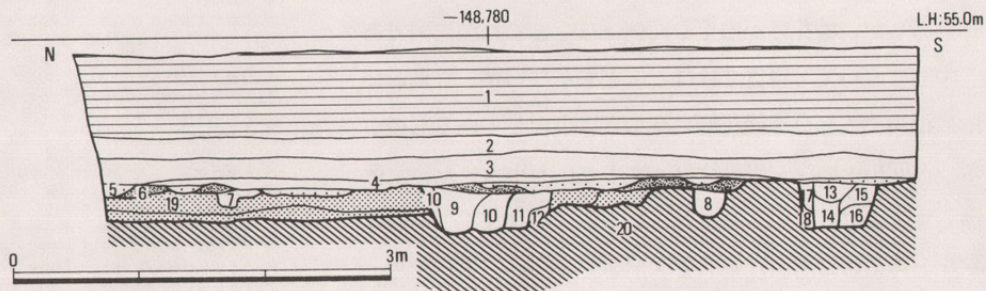
発掘区の位置 1/7500

II 検出遺構

発掘区内の基本的な土層堆積状態は、保育園建設時の盛土が現地表下約70cmにおよび、以下、旧耕土、床土、暗茶褐色粘土の遺物包含層と続き、地表下約1.1mで黄灰色粘土の地山面に至る。遺構は、基本的にこの地山面上にて検出した。

検出した顕著な遺構には、建物1棟、柱列1条、柱穴、弥生時代の流路等がある。検出した建物、柱列、柱穴には、弥生時代流路埋土を掘り込む形でつくられたものもみられる。以下に概説する。

弥生時代の流路は、発掘区内を蛇行しており、発掘区外東西方向へ続く。幅約4m、検出面からの深さ約30cmの自然流路と考えられるものである。流路内の堆積土は、大きく二層に分層でき、上層・暗黄褐色粘土、下層・黒褐色粘土の堆積がみられる。流路内からは、若干量の弥生時代後期の土器片が出土した。いずれも小片のため、図示し得ない。（自然流路の範囲については、遺



- | | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|------------|-----------|---------------|
| 1. 表土 | 4. 暗黄灰色土 | 7. 暗黄灰色粘砂 | 10. 暗茶灰色粘土 | 13. 茶褐色粘土 | 16. 黒灰色粘土 |
| 2. 旧耕土 | 5. 暗灰色砂 | 8. 暗黄灰色粘砂 | 11. 茶灰色粘土 | 14. 黒色粘土 | 17. 茶灰褐色粘土 |
| 3. 茶灰色粘質土 | 6. 暗茶褐色粘土 | 9. 黒茶灰色粘土 | 12. 淡茶灰色粘土 | 15. 黒褐色粘土 | 18. 黒灰色粘土 |
| | | | | 19. 暗褐色粘土 | 20. 黄灰色粘土(地山) |

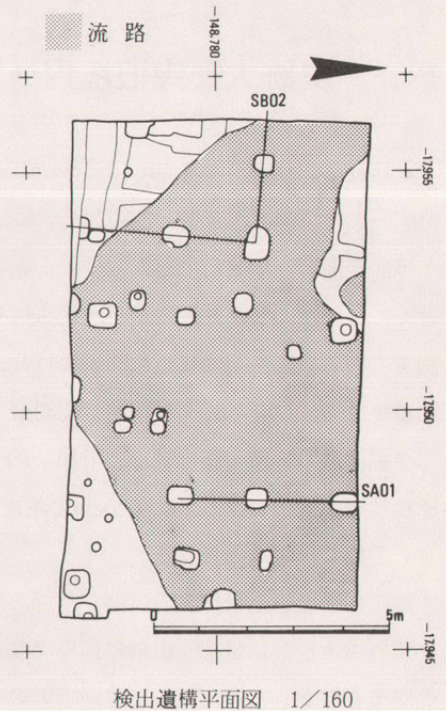
東壁堆積土層図 1/60

構平面図に網目をかけることにより示した。)

SA 01 発掘区の東部で検出した柱列である。2間分(3.6m)を検出。発掘区外北側へ続くものと思われる。柱間は1.8m(6尺)等間である。主軸は、国土方眼方位にほぼ一致する。柱穴内埋土から若干の奈良時代土器片が出土した。

SB 02 発掘区の西で検出した東西1間(1.8m)以上、南北2間(3.6m)以上の掘立柱建物である。発掘区外へ続くものと思われる。柱間は、東西1.8m(6尺)、南北1.8m(6尺)等間である。建物主軸は、国土方眼方位に対して、北で東に振れる。柱穴内埋土から若干の奈良時代土器片が出土した。

なお、検出した遺構埋土からは、それぞれ若干の土器片が出土したが、いずれも小片であるため、時期の確定には至らない。(立石堅志)



11. コナベ古墳外堤部の調査

本調査は、奈良市佐紀町法華寺町所在の奈良市道都跡910号線と市道北部245号にはさまれた自転車歩道の一部において実施した奈良市水道局届出の配水管改良工事に伴う事前の発掘調査である。当該地は、佐紀・盾列古墳群の東部に位置し、陵墓参考地になっているコナベ古墳の後円部外堤部分に相当する。調査は、東隣するウナベ古墳のように、二重濠を有するか否かを確認するために、東西1.5m、南北18.0m(27㎡)のトレンチを設定して行なった。調査期間は、昭年61年7月28日～同年8月1日までである。トレンチ内の土層堆積状態は、黒褐色土の表土(約20~30cm)を除去すると、すぐに黄褐色土の地山である。近・現代の攪乱・土壌が部分的に見られる他には、顕著な遺構を検出することはできなかった。また、出土遺物もない。少なくとも、後円部の部分は二重濠ではなかったと考えてもよからう。(奈良美穂)一



12. 史跡大安寺旧境内（第21次）の調査

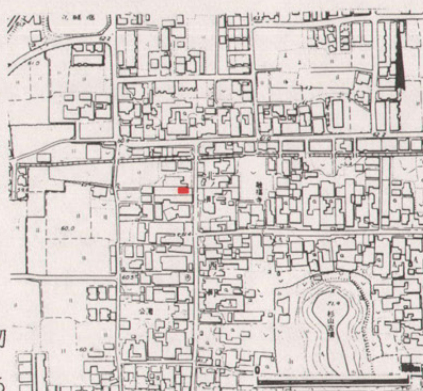
本調査は、奈良市大安寺町1035番地の1において、野田忠一氏申請の現状変更（住宅改築）に伴なって実施した事前発掘調査である。調査地は大安寺寺地内の北西隅近くにあたり、食堂并大衆院が想定されている地域の一画を占める。調査期間は昭和60年4月5日から同年4月10日までの6日間で、発掘面積は約32㎡である。

発掘区内の堆積土層は、地表下10cmほどまでは旧建物建築時の整地土で、以下20～30cmの茶褐色土の堆積があり、黄褐色土の地山となる。

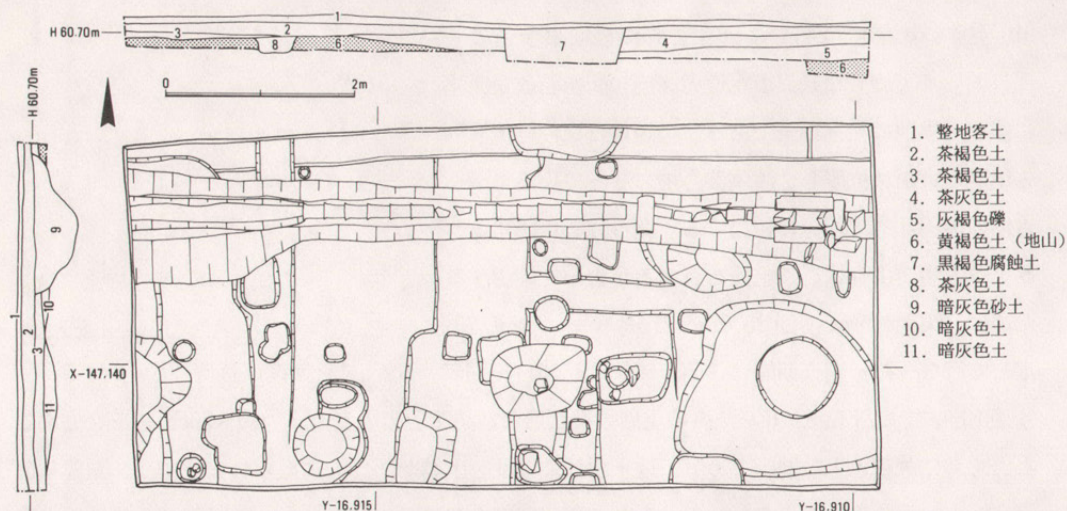
地山上面で、土管埋設の暗渠、井戸、大小の土塋などの遺構を検出したが、出土遺物からみてもいずれも近世（18世紀）以降の構築になるもので、大安寺と直接結びつく遺構は何ら検出することができなかった。ただ、上述の暗渠の一部には、凝灰岩の切石や奈良時代の瓦埴などが使用されていて、これらは大安寺の何処かの堂宇の所用物が転用されたものとみることができる。

出土遺物には土器類・瓦埴類がある。土器は18世紀頃のものが多いが、伊万里系の磁器やいわゆる京焼風の陶器などがみられ、それ以前のものでは僅少だが12世紀の土師器・瓦器なども出土している。瓦は奈良時代のものが比較的多く、軒平瓦（6664A型式）1点が含まれている。

（中井 公）



発掘区的位置 1/7500

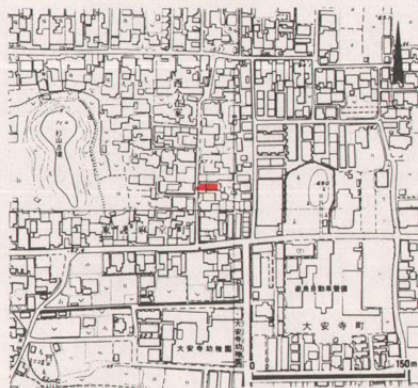


検出遺構平面図・北壁堆積土層図・西壁堆積土層図

13. 大安寺旧境内（第22次）の調査

I はじめに

本調査は、奈良市大安寺町字東今在家994-2番地において実施した山本五鈴氏届出の個人住宅改築に伴う事前の発掘調査である。調査地は、大安寺伽藍復元によると踐院の北部地域に相当する。調査は、調査地中央部に東西17m、南部3mのトレンチを設定し、昭和60年6月1日から開始し、同年6月12日まで実施した。

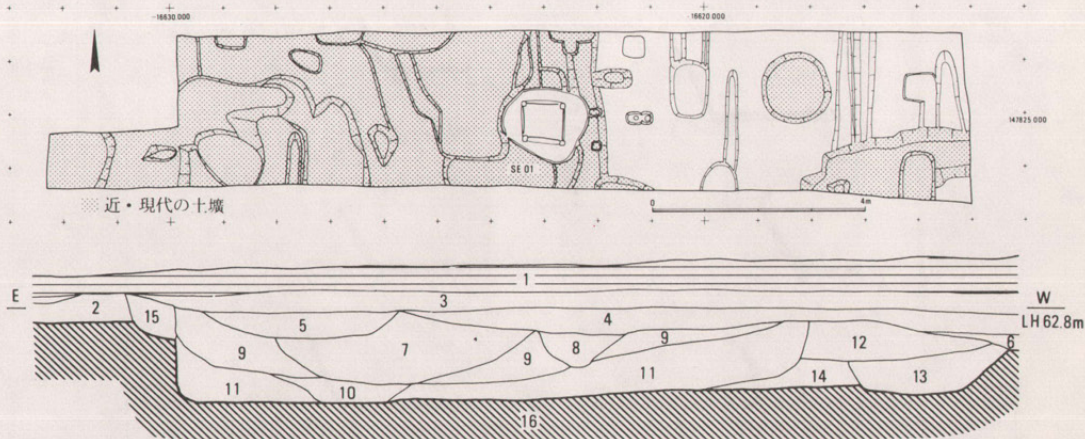


発掘区的位置 1/7500

II 検出遺構

発掘区内の土層堆積状態は、表土（約20cm）の下、近世の遺物を包含した暗褐色土（約20cm）が堆積し、表土から約40cm程度で奈良時代の遺構面である黄褐色土へ達する。発掘区西半部は、暗褐色土上面から掘り込まれた土壌及び攪乱により、奈良時代の遺構面が大きく削平されてはいたが、発掘区中央部において、奈良時代の井戸を1基検出することができた。以下、その概要を記す。

SE 01 掘形は、上部を削平されてはいたが、検出面では一辺1.7mの平面隅丸方形を呈し、断面は掘鉢状に掘り込まれている。検出面からの深さ約1.5mを測る。井戸枠は、一辺70cmの方形で、四隅に隅柱をたて、枘をもった横棧をわたして四辺の縦板を支える構造をとる。隅柱は、7cm角の角柱で2面に枘穴が穿たれている。最長76cmまで残存する。横棧の寸法は、4~6cm角で、



- 1. 黄灰色土 4. 暗褐色土 7. 暗灰色礫 10. 黄褐色土 13. 暗灰色粘土 16. 黄褐色土
- 2. 暗褐色土 5. 黒色土 8. 暗褐色土 11. 暗灰色土 14. 黄褐色粘土
- 3. 褐色土 6. 灰色粘土 9. 褐色土 12. 黄灰色粘質土 15. 黄褐色砂土

検出遺構平面図・南壁推積土層図

長64~68cmを測る。最下段のみ残存。縦板は、各辺ともに一枚板が使用されている。幅52~67cm、厚さ2cm前後、最長70cmまでが残存する。掘形裏込めには、底部から約40cmの位置で東・西・南の三方向に、板材が敷かれていた。長辺100cm、短辺10~30cm、厚さ約2cmを測る。枠内からは、木製品、土器類が出土した。

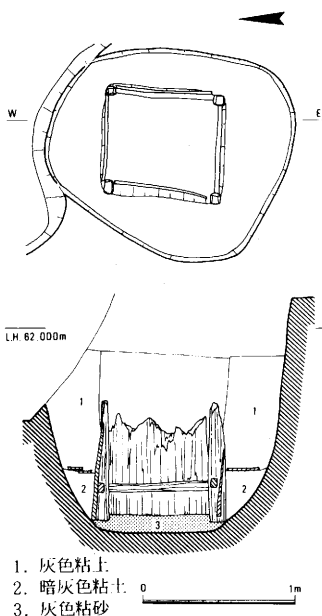
その他の遺構 発掘区西半部で検出した近世の土壌、攪乱や発掘区東半部で検出した近現代の井戸、土壌などがある。発掘区西半部で検出した土壌は、重複関係から6時期あることがわかる。先述のようにこれらの遺構は、暗褐色土層から約90cmにおよび、奈良時代の遺構面を掘り込んでいる。

III 出土遺物

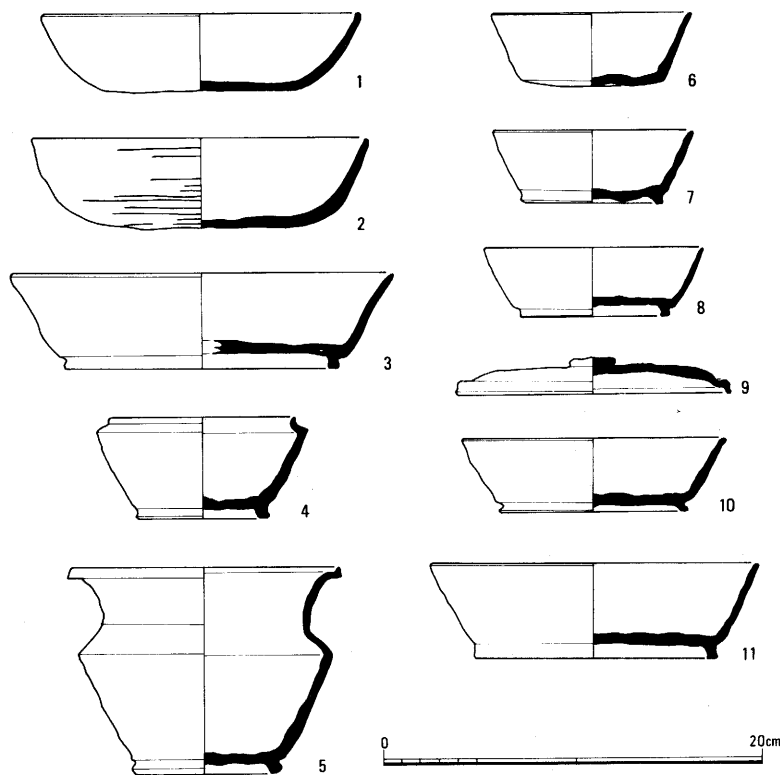
井戸SE01から、奈良時代中頃の特徴をもつ土器類や斎串1点が出土した。以下、出土遺物の概要を記す。

SE01出土土器 出土土器には、土師器、須恵器がある。

土師器には、杯A (1・2・14)、皿A (13・15)、皿B (16)、



SE01 出土土器 1/4



SE01 出土土器 1/4

土師器		計	%
杯A	4	} 16	26.2
皿A	10		
皿B	1		
碗C	1		
壺類	1	} 20	32.8
甗類	19		
小計		36	59.0
須恵器		計	%
杯A	8	} 21	34.4
杯B	10		
皿C	2		
(蓋)	(15)		
鉢A	1	} 4	6.6
壺E	1		
〃H	1		
〃Q	1		
甗類	1		
小計		25	41.0
総計		61	100.0

SE01 出土土器構成

椀C、壺・甕類がある。

杯A 口縁端部を丸くおさめるもの(1・2)と口縁端部を内側に巻きこむもの(14)とがある。1・2は、底部外面をへら削りしたのち、外面全体をへら磨きする b_3 手法で調整し、14は、口縁部内外面を横なで、底部外面は未調整のままに放置する a_0 手法で調整している。14の底部外面には墨書が残る。

皿A 口縁端部を丸くおさめるもの(13)と内傾させるもの(15)とがある。13は、口縁部から底部外面までを全面へら削りする c_0 手法で、15は、 a_0 手法で調整する。15の内面には、ラセン状暗文及び一段の斜放射状暗文を施している。2点とも底部外面に墨書が残る。

皿B 16は、低短な高台を貼した底部と屈曲しながらちあがる口縁部から成る。底部外面だけをへら削りし、口縁部内外面を横なでする b_0 手法で調整している。内面には、ラセン状暗文及び一段の斜放射状暗文を施す。底部外面には、へら描きによる文字がみられる。

須恵器には、杯A(6・12)、杯B(3・7・8・10・11)、杯B蓋(9)、皿C、鉢A(17)、壺E(4)、壺H(5)、壺Q、甕類がある。

杯A 平らな底部と斜め上方に開く口縁部から成る。6・12は、口縁部外面をロクロナデし、底部外面はへら切りのままで放置する。12の底部外面には墨書が残る。

杯B 杯Aに高台をつけたもの。大きさによって、杯BⅠ(3;口径20.0cm、器高5.0cm)、杯BⅡ(11;口径17.0cm、器高5.0cm)、杯BⅢ(10;口径13.7cm、器高3.8cm)、杯BⅣ(7・8;口径約10.7cm、器高約3.7cm)に分類できる。いずれも、底部外面から口縁部内外面をロクロナデ調整する。

杯B蓋 平らな頂部と屈曲する縁部からなる。9は、口縁部内外面をロクロナデし、頂部外面はへら切りのままで放置している。

鉢A 17は、尖った底部と内彎しながらちあがる体部から成る。口縁端部は内傾する。外面全体をへら削りで調整したのちに、粗いへら磨きを施している。体部下半には墨書が残っている。

壺E 低短な高台を付した底部と肩部に稜をもつ体部から成る広口壺である。4は、体部外面から口縁部内外面をロクロナデで調整し、底部外面はへら切りのままで放置している。焼成はやや軟質である。

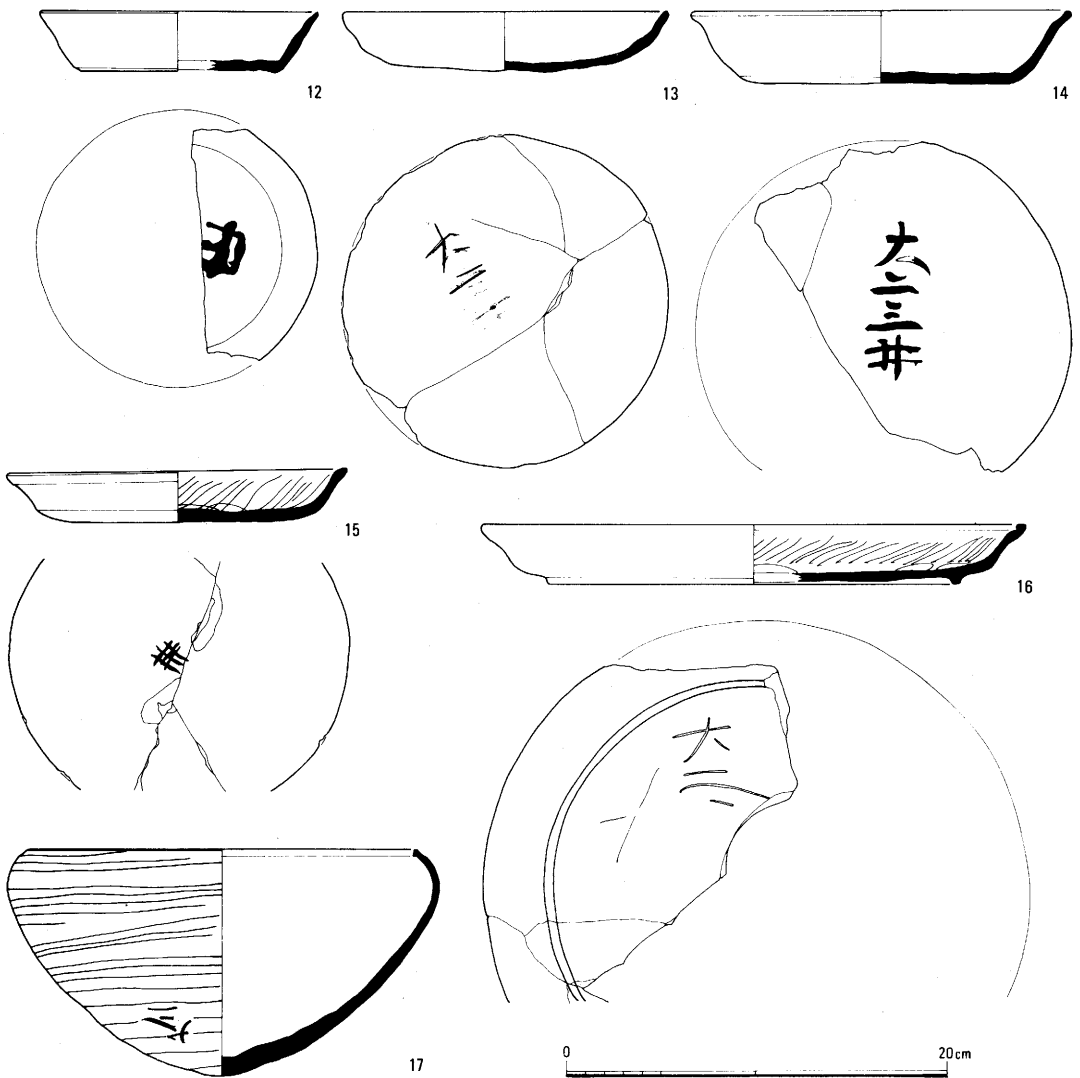
壺H 扁平な体部と大きく外反する広口の口縁部からなる壺である。肩部は巾が狭く稜をもち、直立する比較的長い頸部をもつ。5は、体部から口縁部内外面までをロクロナデ調整し、底部外面はへら切りのままである。高台の一部分には、二次的な焼成を受けた痕がみられる。色調は、灰白色を呈し、焼成は軟質である。

墨書土器 SE01出土土器のなかには、墨書及び線刻のみられるものがある。

13は土師器皿Aで底部外面に墨書及び線刻による文字が残る。「大二三井」と読める。最初に「大二」を線刻し、次にその上から「大二三井」と墨書きしている。14は土師器杯Aの底部外面

	記載内容	器種	記載位置	出土遺構	土器番号	図版番号
1	□	須恵器 杯A	底部外面	SE01	12	図版第30
2	大二(線刻) 大二三井(墨書)	土師器 皿A	"	"	13	"
3	大二三井(墨書)	" 杯A	"	"	14	"
4	□	" 皿A	"	"	15	"
5	大二(線刻)	" 皿B	"	"	16	"
6	大二(墨書)	須恵器 鉢A	体部外面	"	17	"

墨書土器一覽



SE 01 出土墨書土器 1/4

に墨書が残っている。13同様に、「大二三井」と墨書きしている。16は土師器皿Bの底部外面に、「大二」と読める文字を線刻している。17は須恵器鉢Aの体部下半に「大二」と読める文字を墨書きしている。12は須恵器杯Aの底部外面に、15は土師器皿Aの底部外面に墨書が残るがいずれも判読不可能である。

木製品 齋串が1点ある。細長い板材の上端を圭頭状に、下端を剣先状につくりだしている。残存状態が悪く、側面部分の原形はとどめていない。全長22.3cm、厚さ0.2cm、幅は2.4cmまでが残る。

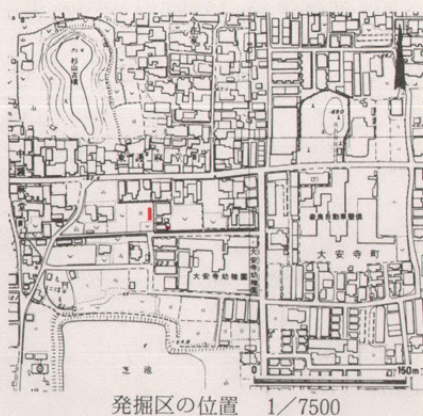
IV まとめ

大安寺賤院推定地の調査では、今回のように、奈良時代の土器が比較的まとまりをもって出土した例は少ない。SE01から出土した土器群は、平城宮土器Ⅲに相当する時期のもので、おそらく一括投棄されたものと考えられる。これらの出土土器のうちで、祭祀と関係が深いと考えられている齋串・須恵器壺^{注1)}Hの出土は、井戸の祭祀を考える祭に貴重な資料となろう。この他、特に注目すべきものに、「大二三井」の墨書及び線刻のみられる土器がある。大安寺と何らかの関係があるのだろうか。大安寺旧境内での資料の蓄積を待って、検討していきたい。（奈良美穂）

注1)『平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書』（奈良県教育委員会・1985）

14 史跡 大安寺旧境内（第23・24次）の調査

本調査は、奈良市大安寺町1263番地における大西義則氏届出の農業用倉庫新築、及び同1260—4番地における東 栄造氏届出の個人住宅新築に伴う事前の発掘調査である。両調査地は、大安寺伽藍復元によると賤院の西辺中央部に相当する。発掘区は、前者が東西1m、南北12m（発掘面積12㎡）、後者は民家の中庭での調査であったために、東西0.7m、南北0.7m（発掘面積約0.5㎡）と制約を受けた。調査期間は、昭和61年12月18日から同年12月21日までである。

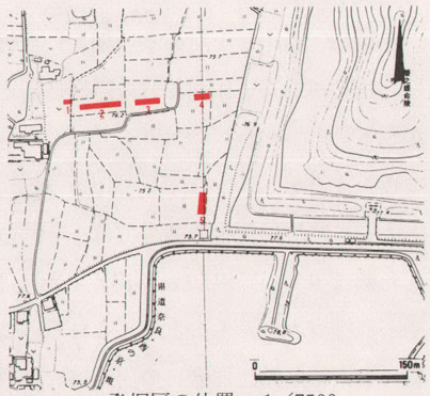


両発掘区内の基本的な土層堆積状態は、耕土・床土の下、黄褐色砂質土、暗灰色粘質土、灰褐色砂質土と続く。灰褐色砂質土からは、奈良時代の土師器・須恵器片及び瓦片が数点出土した。耕土から約0.8mで地山である灰色礫へと至る。検出した遺構には、前者のトレンチ南端で時期不明の土壌（深さ約0.1m）が認められただけで、他には何ら顕著な遺構を検出することはできなかった。（奈良美穂）

15. 佐紀町内遺跡確認調査

I はじめに

本調査は、磐之媛皇后陵古墳（ヒシヤゲ山古墳）の西側一帯の遺跡有無確認調査として行なった。調査地は、奈良市佐紀町1264番地他の水田で、1983年発表範囲では松林苑推定地内に含まれる。^{注)}ただ事前の現地踏査では、調査地付近においては、地表面での遺物の散布は認められず、水上池につづく調査地南側一帯は低地で遺跡の存在の可能性は少ないものと考えられた。このため、発掘区は、土地所有者の同意の得られた北寄りの水田に東西



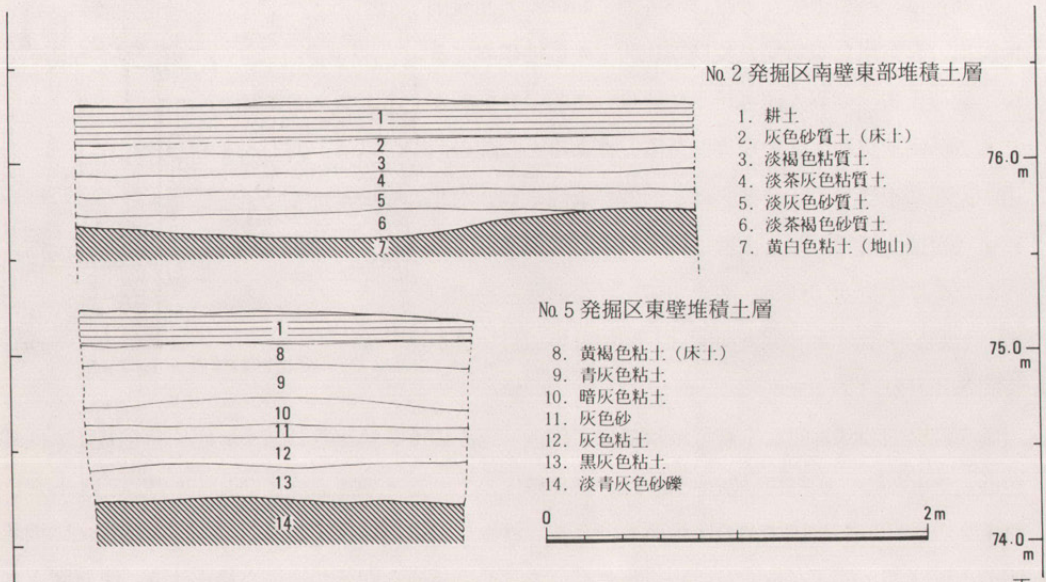
発掘区の位置 1/7500

方向に設定することとし、南側では、磐之媛陵古墳に近い水田1箇所のみ発掘区を設定した。発掘区の全面積は、626㎡である。調査は、昭和61年1月21日に開始し、同年3月27日に現地での調査を終了した。

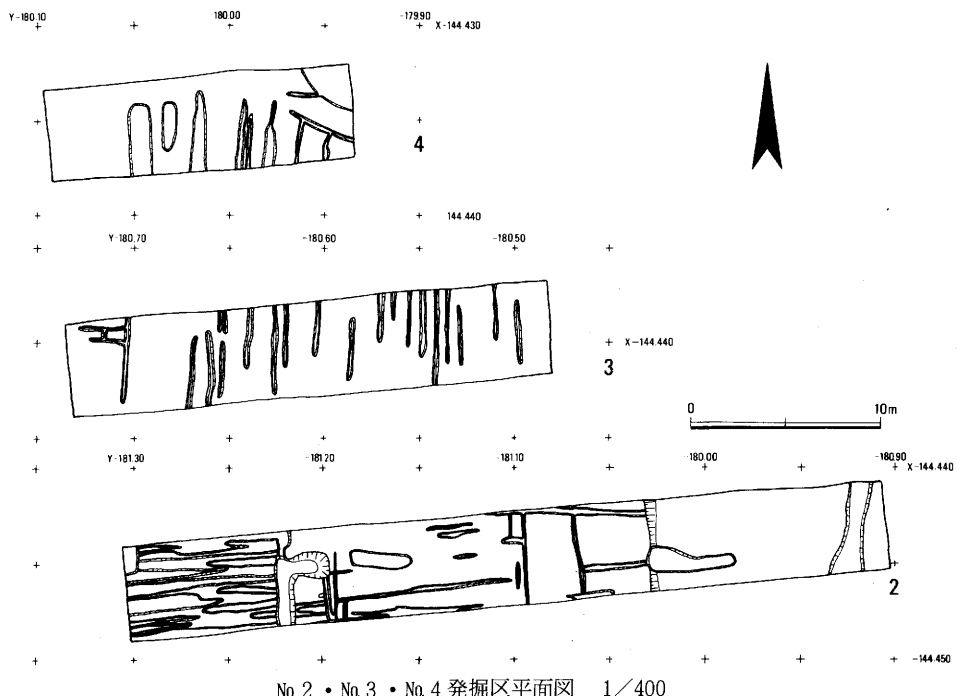
II 調査の結果

No.1 発掘区 調査地北寄り西端の発掘区（東西7m、前北4m）、耕土の下がすぐ、黄白色粘土の地山となる。黄白色粘土上面では、顕著な遺構は検出できず、出土遺物もない。

No.2 発掘区 No.1 発掘区の東に設定した発掘区（東西40m、南北5m）、発掘区西寄りでは、耕



発掘区堆積土層図 1/40



土の下に灰色砂質土の床土があり、その下が黄白色粘土の地山となる。この地山は、東へ低くなってゆき、発掘区東寄りでは、床土の灰色砂質土層の下に淡褐色粘質土、淡茶灰色粘質土、淡灰色砂質土、淡茶褐色砂質土が地山までに堆積する。これらの土層からは、奈良時代の須恵器片が少量出土したが、地山の黄白色粘土上面では、耕作に伴うものと考えられる素掘り溝を検出した以外、顕著な遺構は検出できなかった。

No. 3 発掘区 東西25m、南北5mの範囲で設定した。耕土、灰色砂質土の床土の下は、黄白色粘土の地山となる。地山上面では、No. 2 発掘区と同じく素掘り溝を検出した他、顕著な遺構は検出できなかった。床土の灰色砂質土層から、須恵器、土師器の小片が出土した。

No. 4 発掘区 東西16m、南北5mの範囲で設定した。No. 3 発掘区と同じく、耕土、床土の下が地山の黄白色粘土層となる。地山上面では、耕作に伴うらしい素掘り溝、時期不明の土壇などを検出した。床土内から近世陶磁器片が出土した他に遺物はない。

No. 5 発掘区 東西10m、南北20mの範囲で設定した。耕土の下が礫混じりの黄褐色粘土で、以下青灰色粘土、暗灰色粘土、灰色砂、灰色粘土、黒灰色粘土があり、地表下約1mで地山の淡青灰色砂礫層となる。黄褐色粘土層から磐之媛陵古墳のものと考えられる円筒埴輪の細片が少量出土した他、出土遺物はなく、遺構はなんら検出できなかった。 (森下恵介)

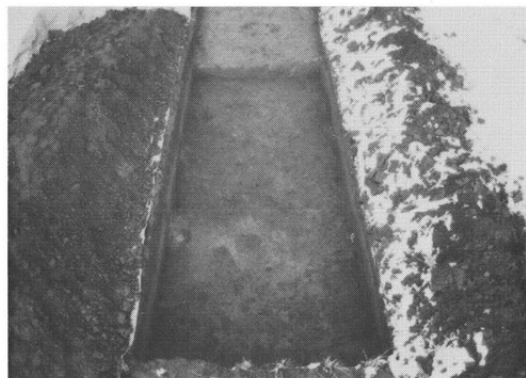
注) 河上邦彦「松林苑の諸問題」『橿原考古学研究所論集第六』1984年

奈良県立橿原考古学研究所「平城宮松林苑第10～12次発掘調査概報」1984年

圖 版



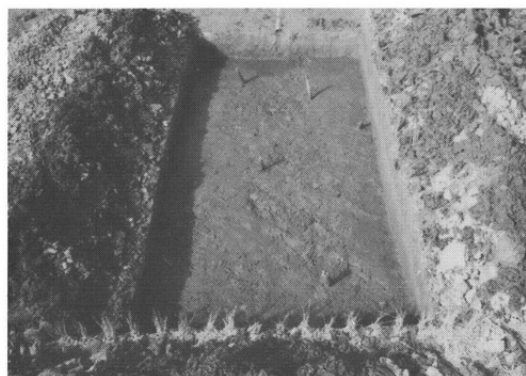
調査地全景 (東から)



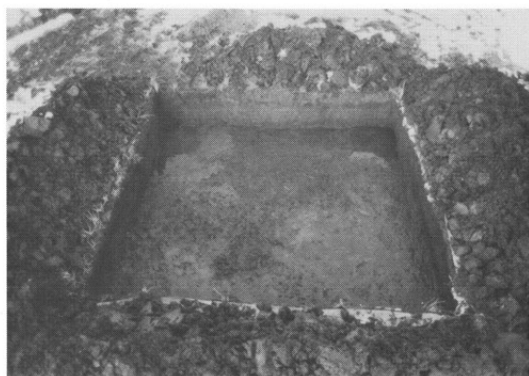
No. 1 発掘区 (西南から)



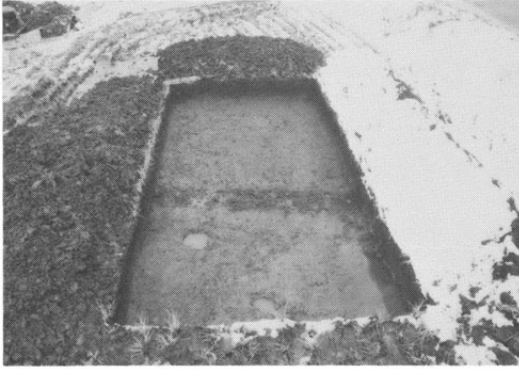
No. 4 発掘区 (東南から)



No. 3 発掘区 (東南から)



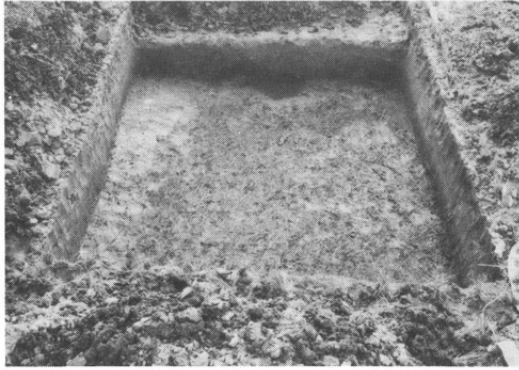
No. 5 発掘区 (西南から)



No.6 発掘区 (西南から)



No.9 発掘区 (東南から)



No.7 発掘区 (東南から)



No.10 発掘区 (東南から)



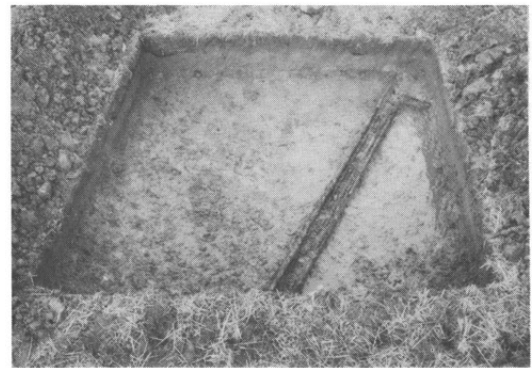
No.7 発掘区 (西南から)



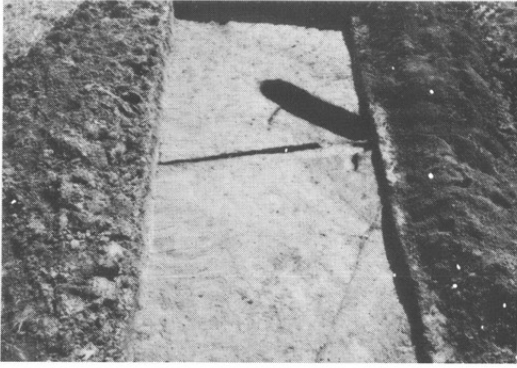
No.11 発掘区 (東南から)



No.8 発掘区 (東南から)



No.12 発掘区 (西南から)



No.13発掘区 (西北から)



No.16発掘区 (西から)



No.14発掘区 (西南から)



No.17発掘区 (南から)



No.15 a 発掘区 (東北から)



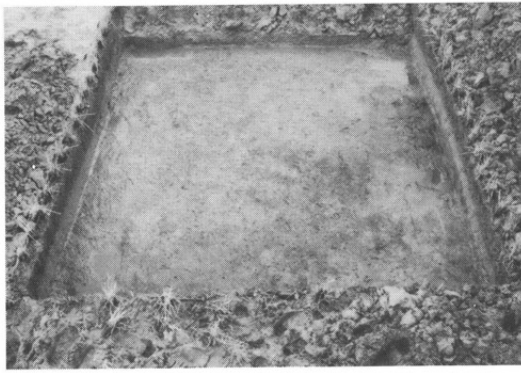
No.18発掘区 (西から)



No.15 b 発掘区 (西南から)



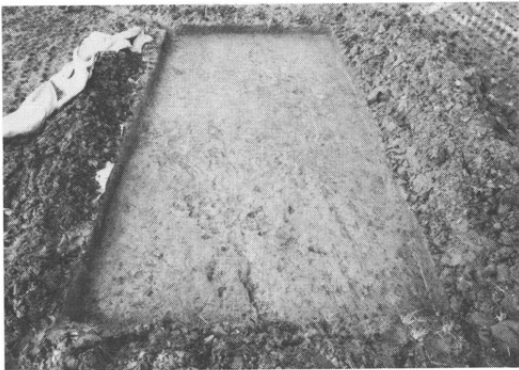
No.19発掘区 (南から)



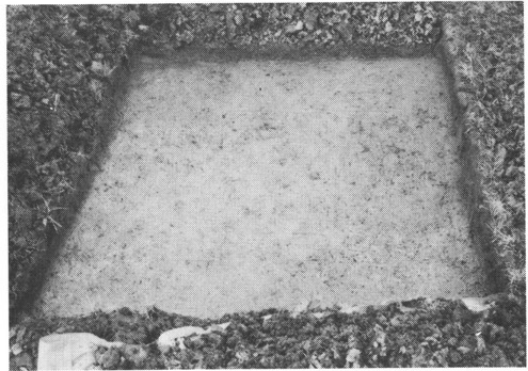
No.20発掘区 (西南から)



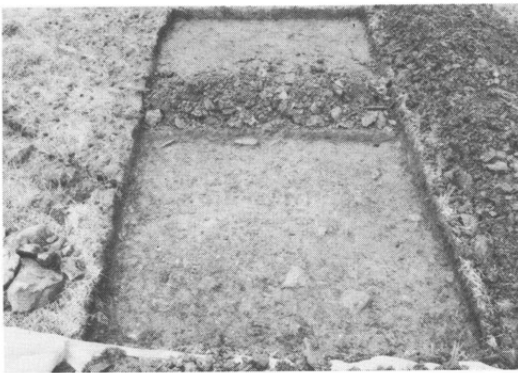
No.24発掘区 (南から)



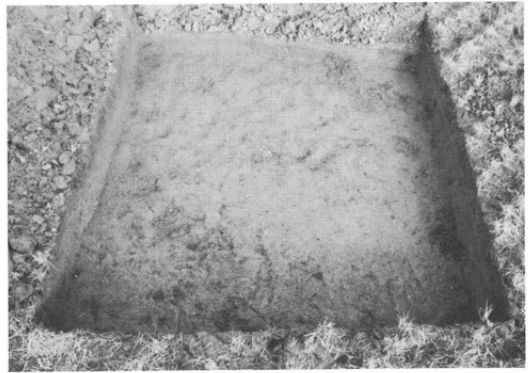
No.21発掘区 (南から)



No.25発掘区 (南から)



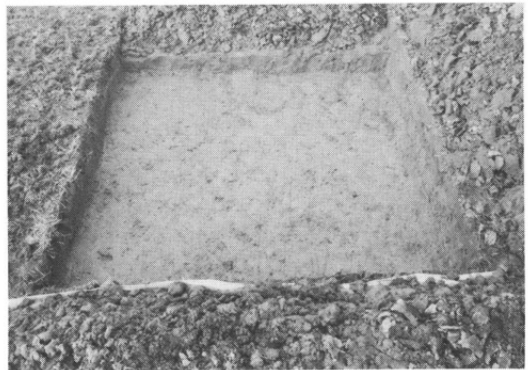
No.22発掘区 (南から)



No.26発掘区 (南から)



No.23発掘区 (南から)



No.27発掘区 (西から)



No. 2 a 発掘区 (西南から)



No. 2 b 発掘区 (西南から)



宮の下古墳外形（東北から）

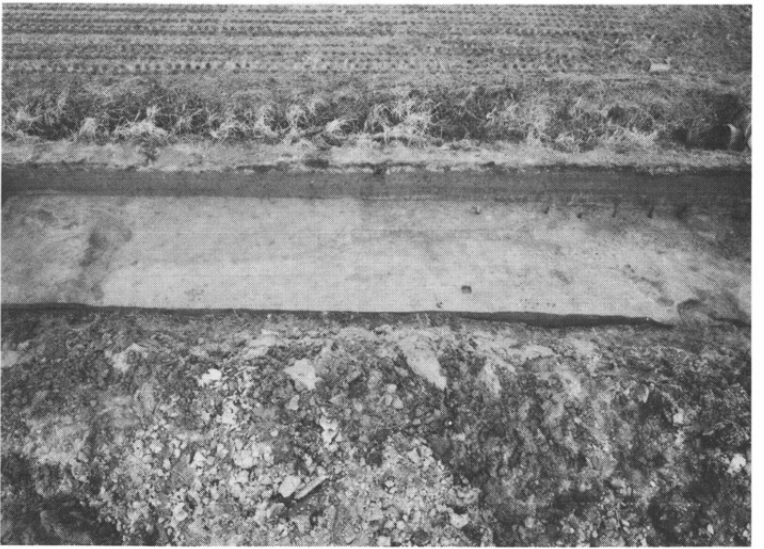


宮の下古墳発掘区（西北から）

1. 第1発掘区全景（東から）



2. 同 全景（南から）



3. 朱雀大路と東側溝
遺存地割（北から）





1. 第2発掘区全景（東から）



2. 同 全景（南から）



3. 下つ道東側溝（南から）



1. 第3発掘区全景（西から）



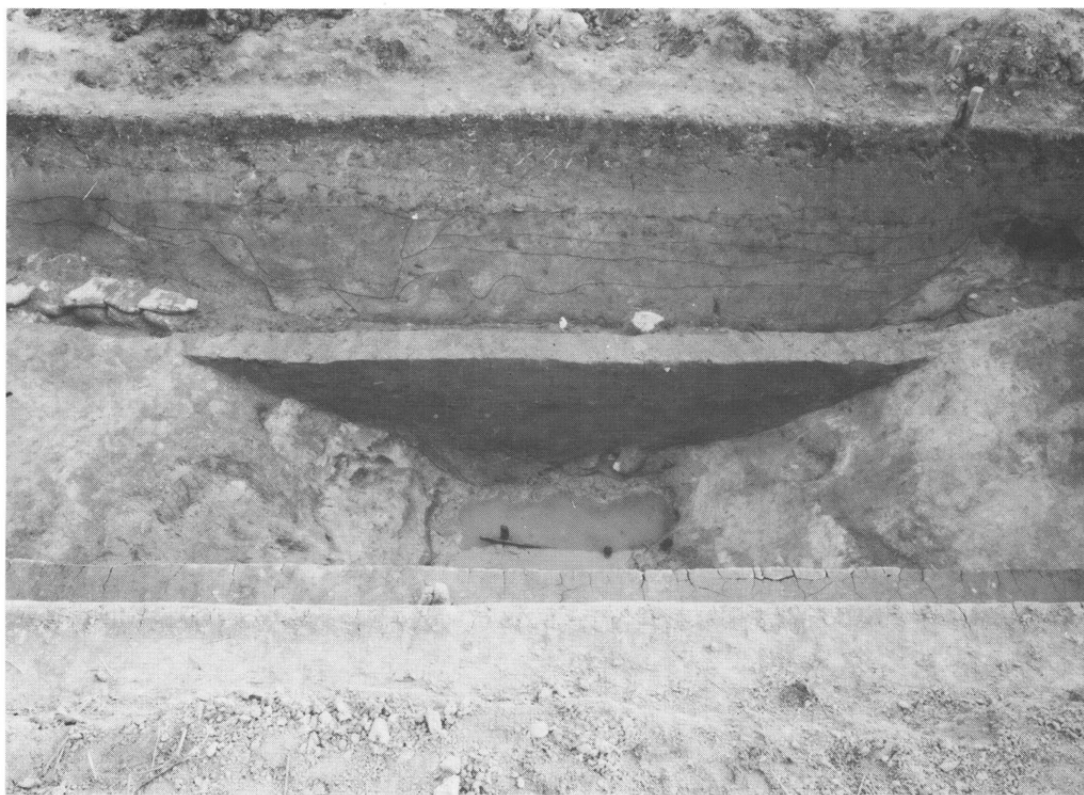
2. 下つ道西側溝（北から）



3. 下つ道下層溝（北から）



1. 朱雀大路西側溝（西から）



2. 朱雀大路西側溝（南から）

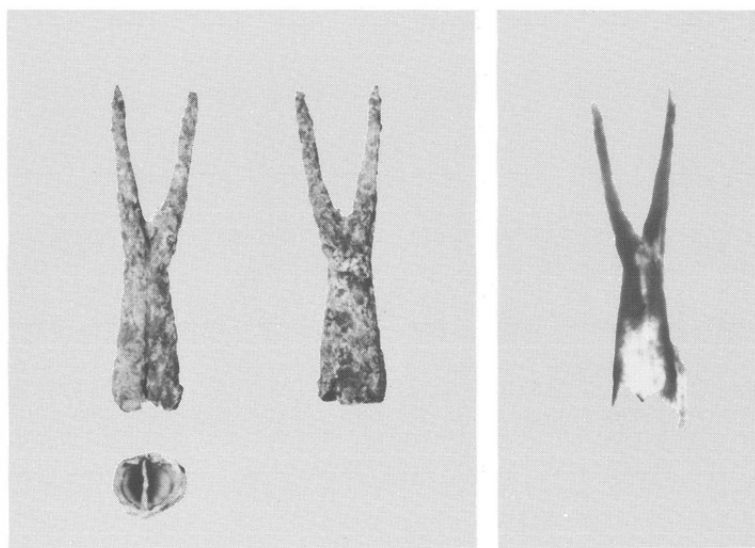
1. 朱雀大路西側溝と
五条条間路北側溝
(東から)



2. 同 合流部 (東から)

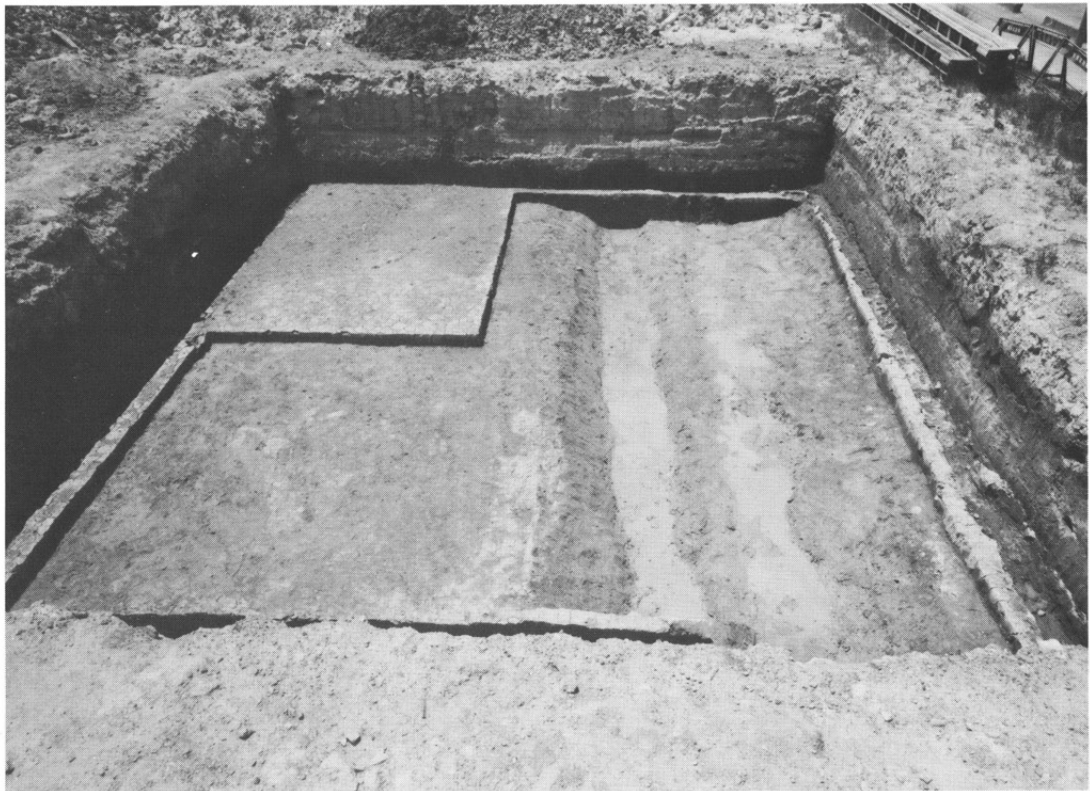


3. 出土二又鉞 (1/3)





1. SD 01 (東から)



2. SD 01・02 (東から)



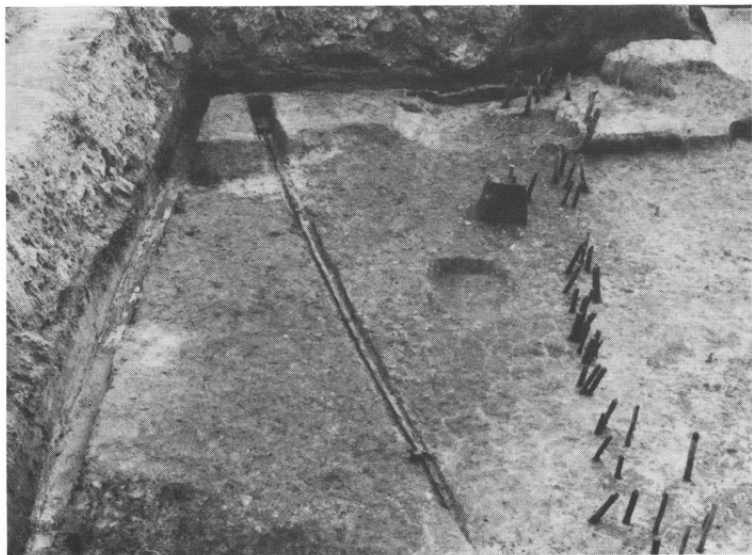
1. 発掘区全景（東から）



2. 同 全景（北から）



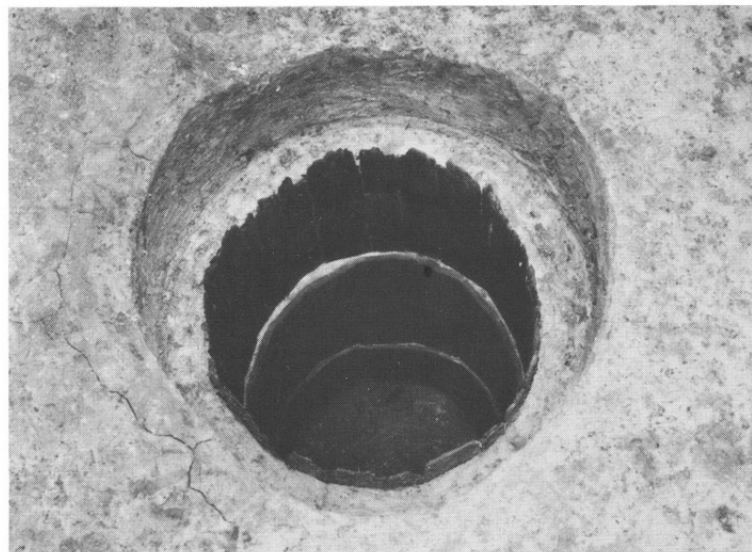
3. 同 全景（北から）



1. SX 03 (北から)



2. SX 03 細部



3. SE 02 (北から)



1. 発掘区全景(西から)



2. 石垣状遺構(東北から)



1. 発掘区と遺存地割 (東から)



2. 発掘区全景 (東から)



1. 発掘区全景（西から）



2. SD01（北から）



1. 発掘区全景（北から）



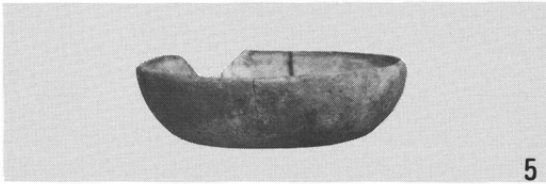
2. 発掘区全景（東から）



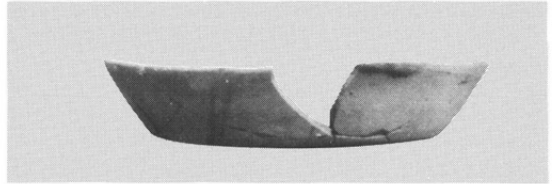
1. SB 05, SK 07 (南から)



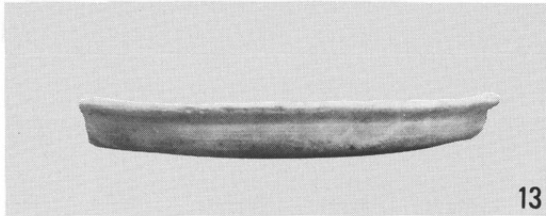
2. SK 08・09, SD 13 (東から)



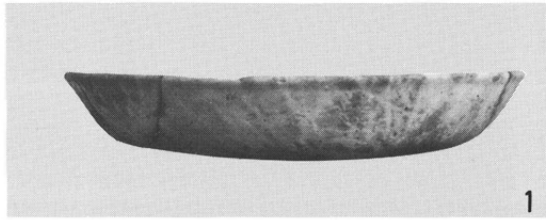
5



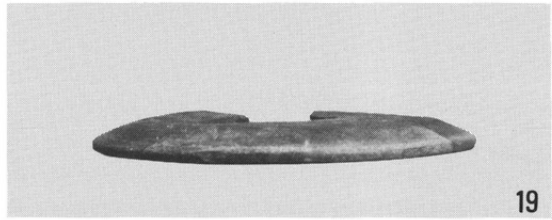
13



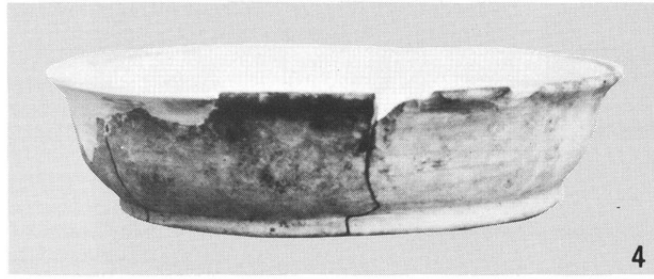
24



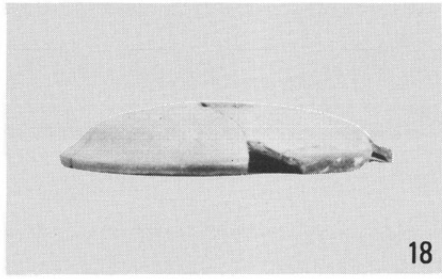
1



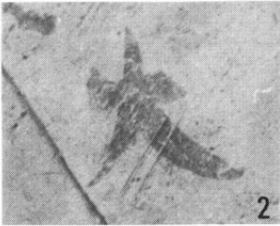
19



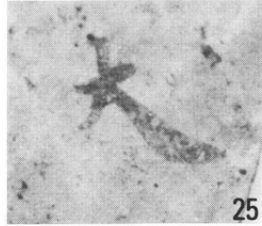
4



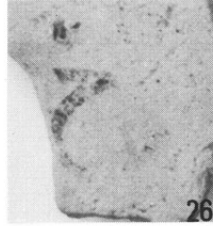
18



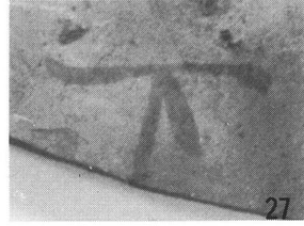
2



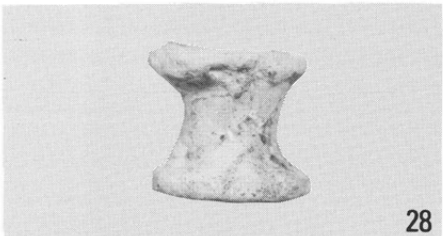
25



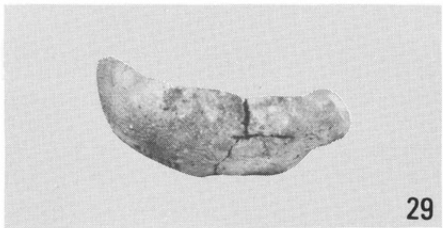
26



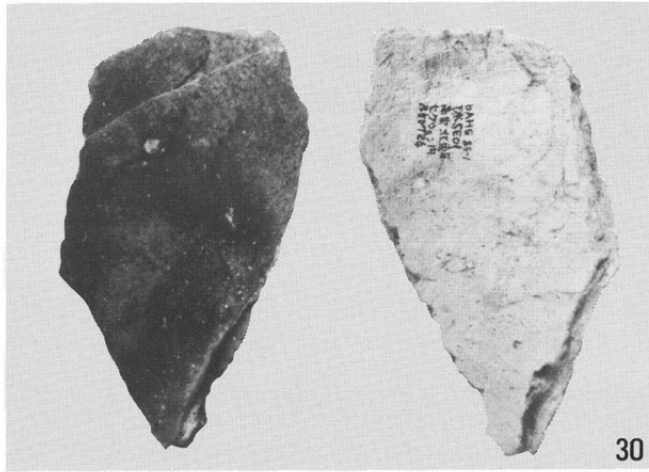
27



28



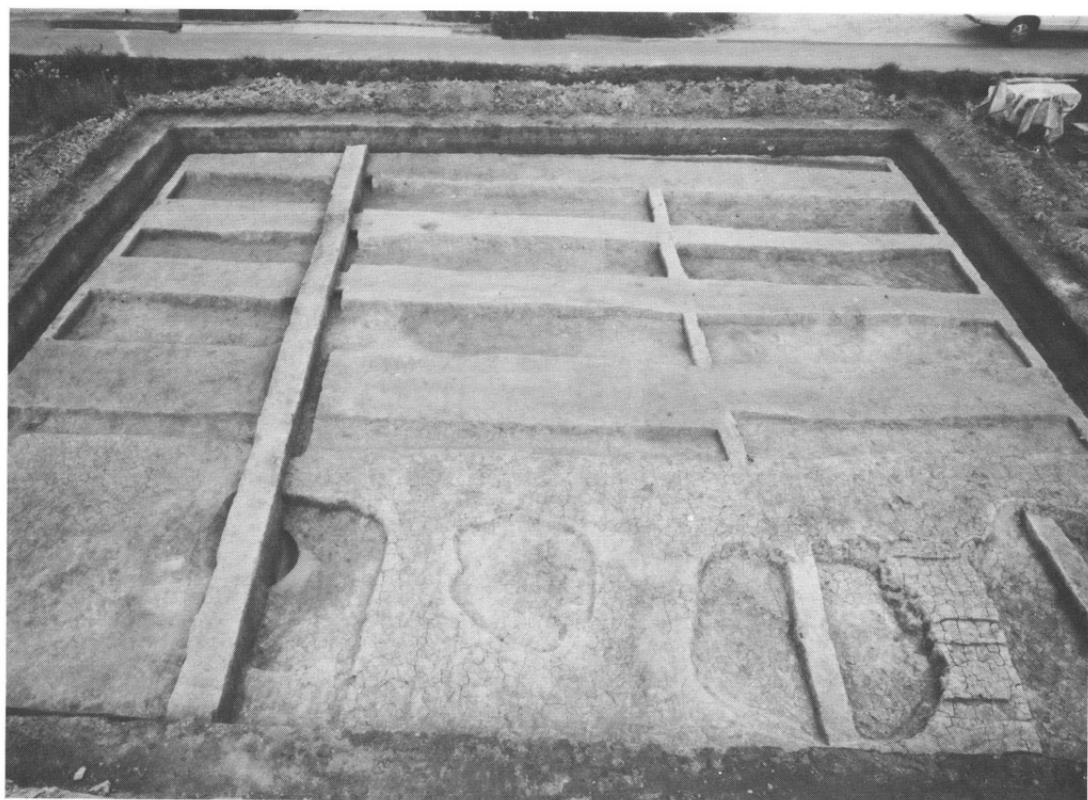
29



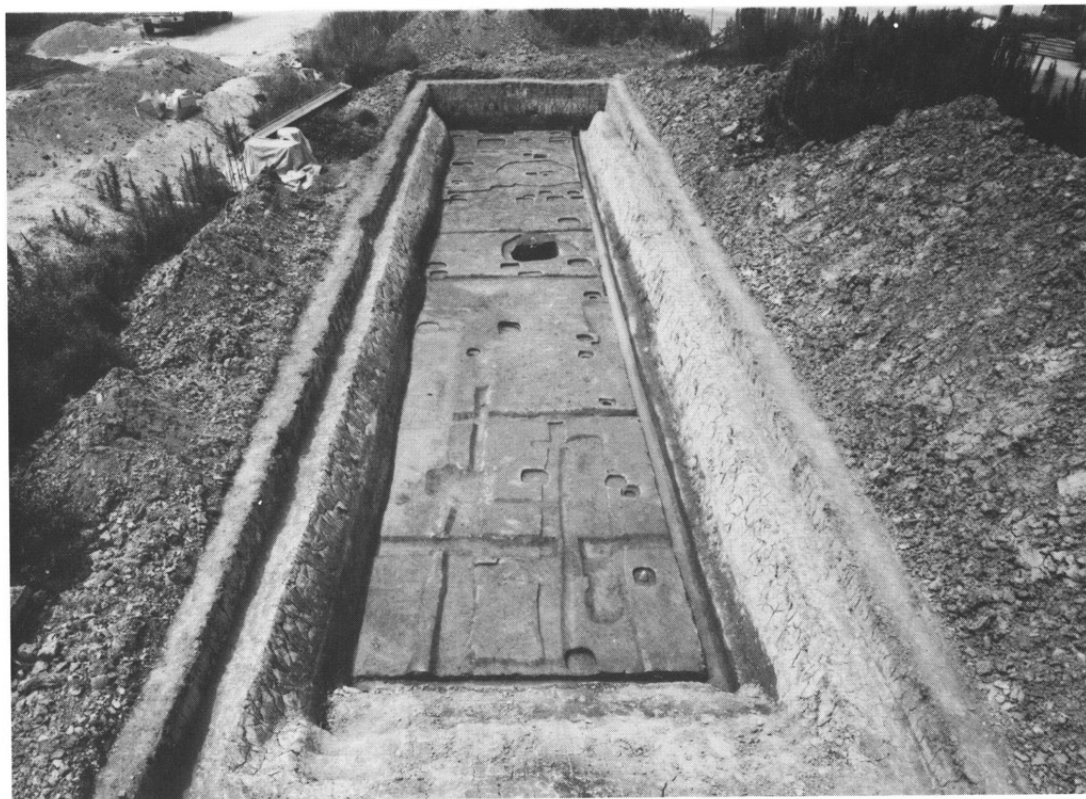
30



1. 発掘区全景（南から）



2. 発掘区全景（西から）



1. 発掘区全景（東から）



2. 発掘区全景（西から）

1. SB01 (南から)



2. SA07 (南から)



3. SB05・06 (南から)

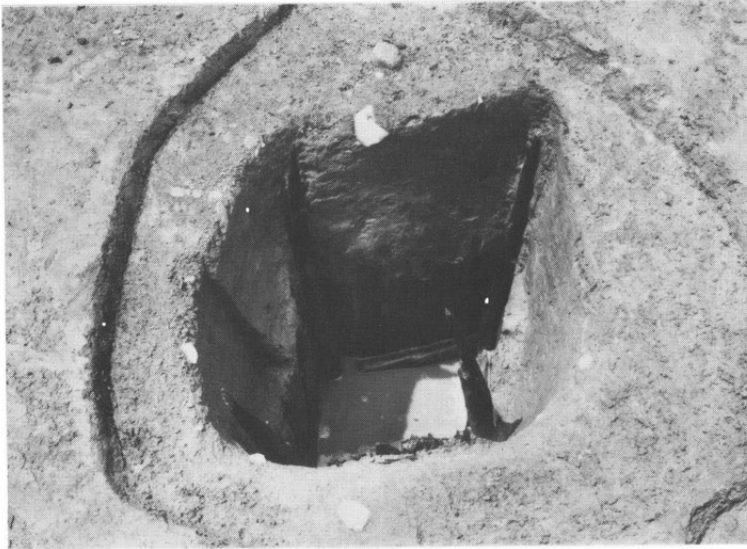




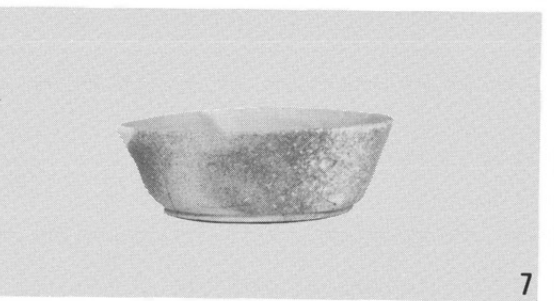
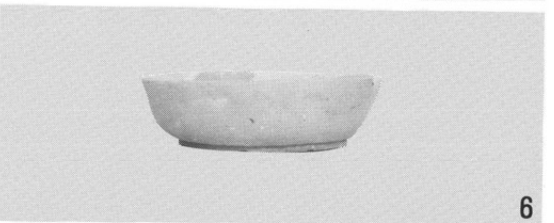
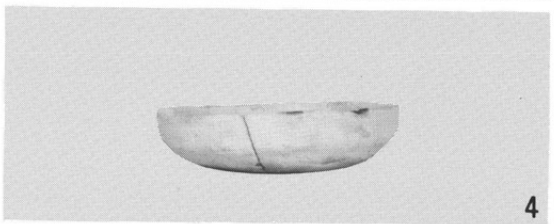
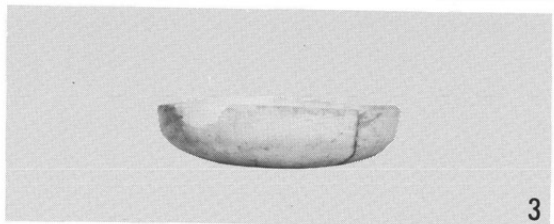
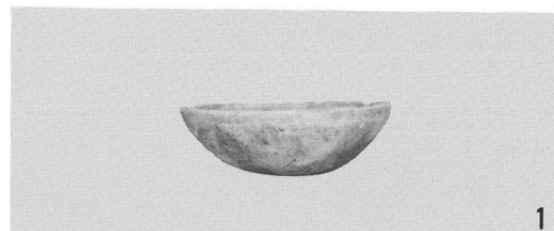
1. SB02・03, SE09
(西から)

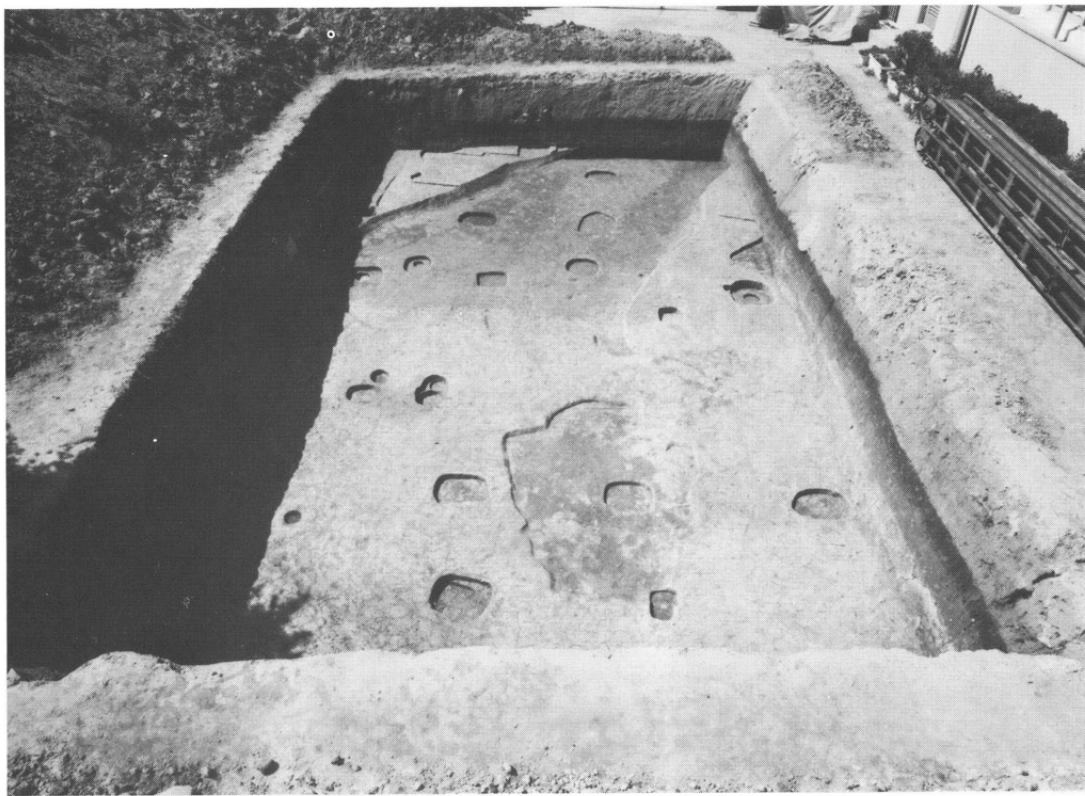


2. SB04 (西から)



3. SE10 (東から)

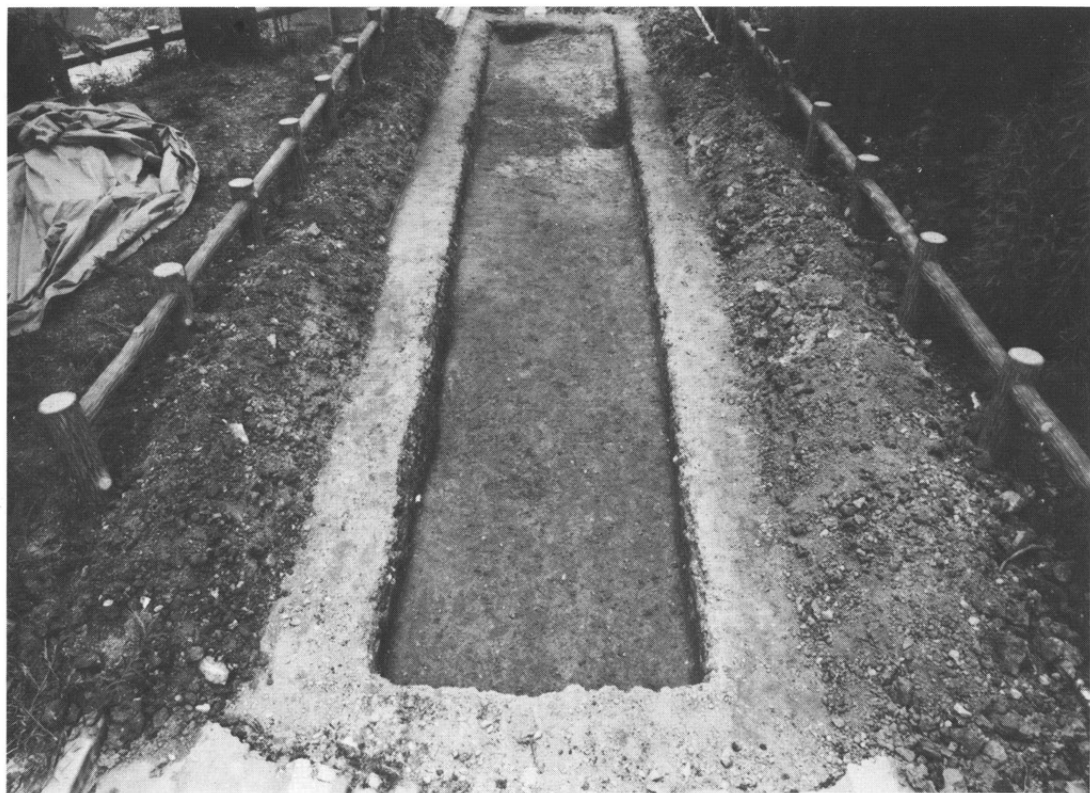




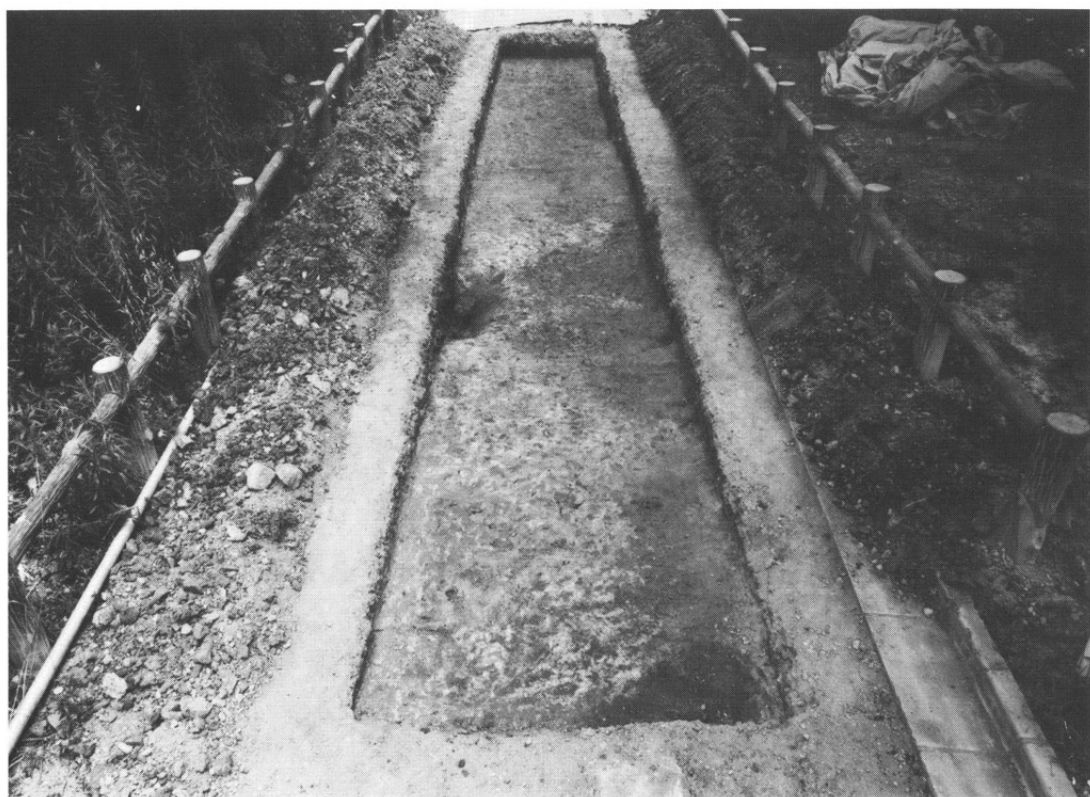
1. 発掘区全景（東から）



2. 発掘区全景（北から）



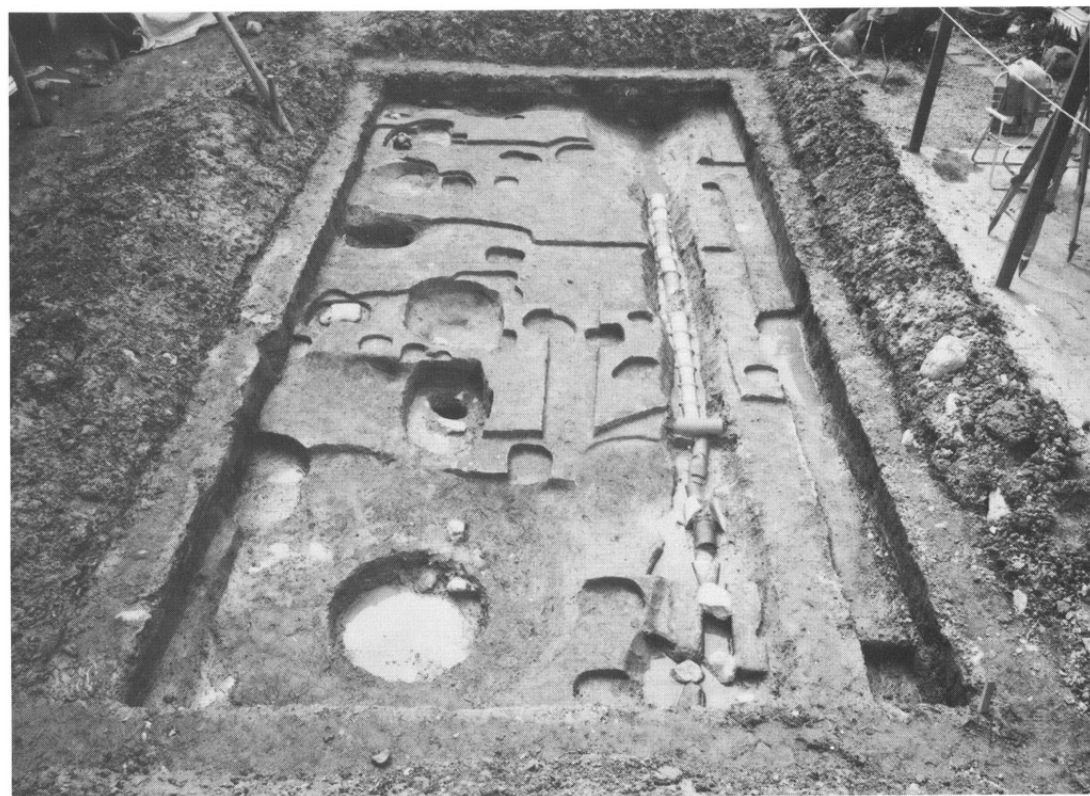
1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（南から）



1. 発掘区全景（西から）



2. 発掘区全景（東から）



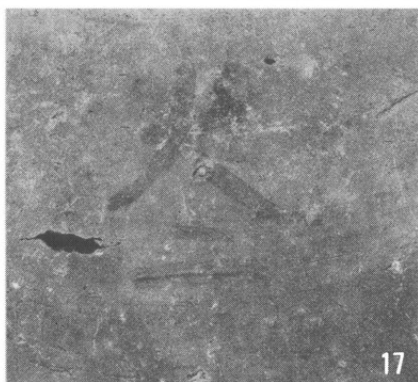
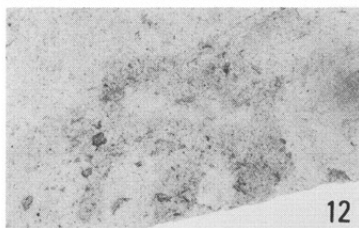
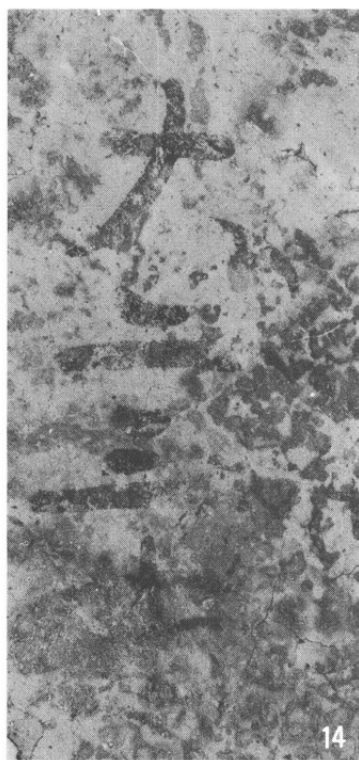
1. 発掘区全景（東から）



2. 発掘区全景（西から）



3. SE01（西から）





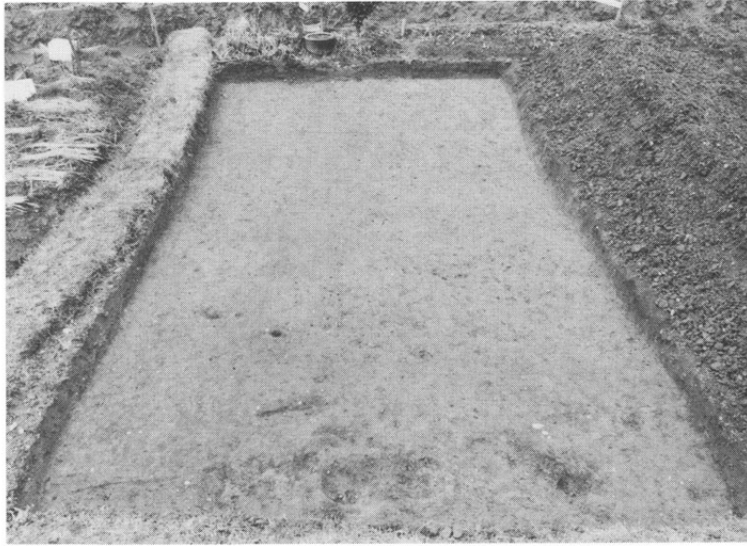
1. 東発掘区全景 (西から)



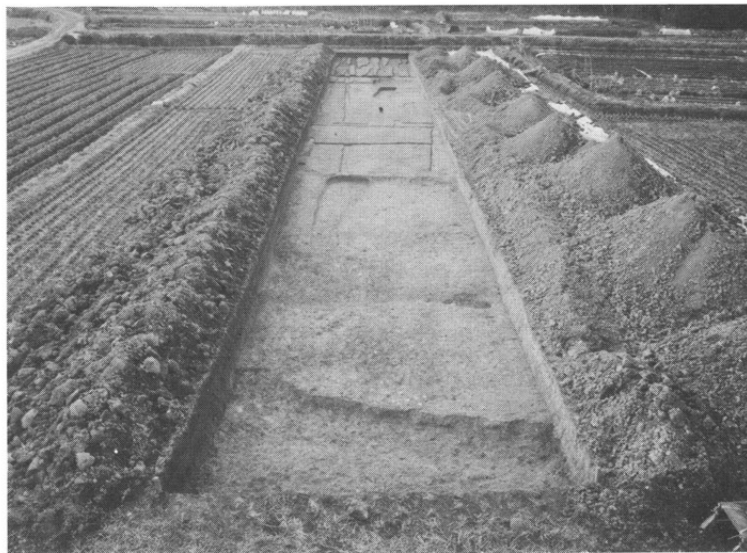
2. 西発掘区全景 (北から)



1. 発掘区全景（西から）



2. No.1 発掘区（東から）



3. No.2 発掘区（東から）



1. No. 3 発掘区 (東から)



2. No. 4 発掘区 (東から)



3. No. 5 発掘区 (東から)

奈良市埋蔵文化財調査報告書

昭和 60 年度

昭和 61 年 3 月 25 日 印刷

昭和 61 年 3 月 31 日 発行

編 集 行 奈 良 市 教 育 委 員 会
（奈良市二条大路南 1 丁目 1 - 1）

印 刷 共 同 精 版 印 刷 株 式 会 社
（奈良市三条大路 2 丁目 2 - 6）
